
CHAOS DRAGON SWORD

セイワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHAOS DRAGON SWORD

【Nコード】

N7181J

【作者名】

セイワ

【あらすじ】

渋谷にある翠明学院、そこに通う2人の青年、西条 巧巳と鳴神 剣二。この2人が渋谷を舞台とした怪奇事件に巻き込まれていく…、しかし2人は特別な力でこの事件を解決することになる…、そこで何と出会い、何を知り、何に立ち向かうのか…、さあ、この物語の幕は静かに上がるのだった…

オリジナル設定あり

毎月25日に登校予定。その日にはここに突っ走れ！！

プロローグ（前書き）

どうもセイワです！このサイトで最初の作品です！未熟なところは指摘してもいいです、それでは始まります…

プロローグ

???

「……………」

青き短髪の男は見ていた…、それは奇妙な形をした剣だった…、1つは翼を思わせる双剣、1つは二股になっている大剣、1つは鞭のようなハンドガードに緩やかに反ったブレードが接続しているサーベル。1つは板に巨大な刃が付いている、1つは全体に丸みを帯びている楕円系の片剣、そして柄の所まで刃を帯びている両手剣。これらを見た時彼は、その剣の持ち主が女性であることを知った、いや、わからないがそう知っているのだ、そして彼も…

「……………」

彼が構えると赤い細長い剣が現れた、しかしそれだけでなく剣が輝くと腰に巻きつきベルトになったのだ、そして両手を別々に回して右手が左上、左手が右下の位置に行きそしてこう叫んだ！！

「変身！！」

そう言った時、彼の体が光を発し、そして目を開けられないほどの輝きを発生したのだ…

4月10日 7:15 とある場所

「拓也…、起きんか~~~~~!!!」

そう言った直後、青の短髪でいびきをかいて熟睡している男の顔面に鉄拳を叩き込んだのだった…

「ムガッ!!!」

殴られた彼は、ベットから転げ落ち殴られた鼻を押さえ、何か奇声を発生した後、彼、西條^{にしじょう} 拓巳^{たくみ}は殴った人を見たのだった、そこにいたのは黒の短髪にちょんまげをしていて身長は170cm、学校の制服を着ていて、右手にこぶしを握っていて、左手には竹刀が握られている青年、鳴神^{なるかみ} 剣二^{けんじ}がいたのだった…

「剣二!、勝手に僕の基地^{ベース}に上がるなって言ったのに、何で入ってくるんだよ!!!」

…どうやら友達みたく勝手に入ってきたことに怒っている拓巳だった…

「お前な…、今日はお前の妹の入学式だろ、せっかく同じ翠明学院^{すいめいがくいん}に入ってたっていうのに兄として自覚はないのか?それとも、まさか今日は登校しないって言うんじゃないのか?」

剣二は呆れた口調でそう言ったのだった。おそらく友達^{とも}の妹のため^{ため}に起こしに来た、というのだった…

「?、七海^{ななみ}の?……………、あ、そうだった…」

…どうやらそれすらも忘れていたのだろう、妹の名前を言った後、

しばらく考えた巧巳は思い出したようでそう言ったのだった…

「…、はあ…、まあしたかないか…、一ヶ月前のアレ以来、忙しかったからな…、俺達は…、それはそうだが、七海にはアレは言っていないような？」

一旦呆れた剣二であつたが、その理由を知っているらしく、懐かしいと感じていた。と同時に拓巳に七海にアレについて喋っていないかを聞いてみたら、

「安心しろ、七海には喋ってないからな…、ところでそれだけなのか？剣二がここに来るのは飯や迎えに…」

巧巳はそれについては喋っていないことを剣二報告するのだつた。と同時にここに来る理由がそれだけではないかと聞き出そうと言つたら、

「まあな、簡単だが朝食を作ってきた。あと迎えもな…」

剣二はそう言つて、小さな包みを取り出した。それを開けてみると本人が簡単だと言っているが、プロ級の料理人が作った様な朝食が出てきたのだつた。

「…、簡単つて言つてくれるなよ…僕から見たら剣二はすごいよ…、じゃあ着替えてくるから外に待つてくれ」

料理の感想を言つた後、寝巻きのため着替えるため外に待つてくれと言つたのだつた。

20分後…

「…しかし、巧巳も変わっているな…、何でこんなところで暮らしているんだが俺には分かん」

剣二もここで朝食をとっているのか自分で作った卵巻きを食べながら巧巳に言ったのだった。ここはある雑居ビルの頂上でそこにはコンテナハウスが建っている。それが先ほど巧巳が言っていた基地である。ちなみに巧巳はオタクで前は一步てまいの引きこもりであった（オタクは変わらない）。

「いいだろ、それに住むのかは人の勝手だろ…、けどここで飯を食ってあいつの世話は誰がするんだよ？」

剣二と同じ制服に着替えた巧巳はきんぴらごぼうを食べてそう返送した後、気になっていたことを言ったのだったが、

「ああ、こっちに来る前七海に会ってな、あいつの世話をしてくれて頼んでおいた」

朝食を食べ終えた剣二は後片付けをしてそう答えたのだった。

「ふー…んそうなのか？何か言っていなかったか？…ごちそうさまでした…」

ご飯を食べ終えた巧巳は器を剣二に返し七海が自分に何か言ったのか聞いてみたのだった。

「…、巧巳も少しは成長したな…、まあ大半はお前のことを心配しているぞ、後は…俺は巧巳の友達になつてくれたことへの感謝…だ

な」

そう言った後懐かしむ剣二であった…、と腕時計を見て、

「もうすぐ登校の時間だ…、下で待っているからな、準備しろよ」

と剣二そう言って剣二は出口へ、巧巳は自分のベースへ、2人は分かれたのだった…

7：45 雑居ビル玄関

「ワリイ、ワリイ、ビデオの予約をしてな…、ってオイこれどうしたんだよ!？」

鞆を持ってきた巧巳が見たのは、青いバイクに乗っていてこれまた青いヘルメットを被っている剣二であった。

「ああ、おっさんから貰ったやつでな…ちゃんとお前もあるぞ、ほれ免許書」

そう言って剣二は免許書を巧巳に渡したのだった。そこにはキッチリ自分の名前が入った免許書だった。

「…、ハ、ハハ、ちゃんと貰えるんだな…、ってお前が運転するか!？」

何やらそれを見て、何か思い出したように笑う巧巳であったが、剣二が運転することに驚いて言ったのだった。

「ああ、だけど今日だけだぞ、今日、巧巳のバイクをおっさんに貰うんだからな、早く乗れ…」

剣二はそう言つて赤いヘルメットを投げて、巧巳はそれを被りしづしづ剣二の後ろに乗ったのだった。そして彼らの乗せたバイクは翠明学院に向けて走つて行つたのだった。

そう彼らは知らない…

彼らはこれから起きる怪奇な事件に巻き込まれることになるうとは…
しかし彼らは普通とは違うある特別な力を持っていたのだった…
そしてこの物語の幕が静かに…

上がるのだった…

プロローグ（後書き）

いかがでしょうか？このプロローグには謎が隠されています…、それを探してください…、ではまた…、その答えを待っています…

第1話 出会い（前書き）

どうもセイワです！すいません！！更新が遅れてしまいました！！
！それではどうぞ…

第1話 出会い

翠明学院 校門付近…

「へっ？剣二は巧巳の所に行っただんかよ！？光ちゃん、七海ちゃん？」

そう声をあげた人物は髪は赤く、短髪で顔に絆創膏が張っていて身長は170cmある青年、漢封^{かんふう} 炎火^{えんか}が2人の女子学生に言ったのだった…

「うん、剣二さん、おにいの所に行くって言っただバイクに乗って行ったんですが…？何かあるんですか？」

そう答えたのは、金髪で長髪、赤いカチューシャをつけた女の子、西条^{にしじょう} 七海^{ななみ}である。剣二と巧巳が言っていた七海はこの子である。

「…まずいですね…、剣二の悪い癖が出ないといいですが…」

何やら深刻な顔で言ったのは水色の短髪で、眼鏡をかけていて身長は170cmの青年、水舞^{すいまい} 氷牙^{ひょうが}、ちなみに所属している部活は剣道部で剣二もそれに所属している…

「え？剣二の悪い癖って…あれだよね…」

何やら嫌な汗を垂らしているピンクの髪でポニーテール、身長は155cm女の子、叶野^{かのう} 光^{ひかり}、剣二の家に居候していて、これまた2人の会話に出てきたあいつである。

「あれ以外ないよ…、朝から災難だよな…巧巳は…」

そう相槌をかけたのは、緑の髪にボサボサヘアで小さい眼鏡をかけていて身長165cmの青年、郷風太も嫌な汗を出していた、と…

「ん、あんたたち何しているの？まさか何か企んでいるんじゃないよね？」

そこにやって来たのは茶色のサイドポニー、身長160cmの女の子、保堂地可である。彼女は剣二達のクラスの委員長でもある。

「んなわけねえだろ！剣二と巧巳のことで話をしていたんだよ！そんでもって剣二がバイクに乗ってくるって話していたんだ！！」

炎火は地可に何もしてないと同時に今話をしていたことを言ったのだった…と、

「ギヤア~~~~~！！！！」

何処からか悲鳴が聞こえてきたのだった…、それを聞いた時、

「…どうやら悪い予感は的中でござるな…」

そう言ったのは金髪で髪がツンツン立っていて、175cmもある青年、仁堂雷丸はいやな汗を垂らしてそう言ったのだった…

「イヤ~~~~~！！！！」

そうそこには、バイクで時速100km近くのスピードで爆走して

いる剣二と、後ろで悲鳴を上げている巧巳の姿がいたのだった…。

「ってヤッパリ剣二の悪い癖が出ていやがる！！おお~~~~い、ここにバイクが突っ込んでくるぞ！！！！校門付近にいる奴等は早く逃げろんだ！！！！俺達も逃げるぞ！！！！」

それを見た炎火はグラウンドにいる生徒に危険を知らせると同時に、校門付近にいる生徒に避難を呼びかけて、自分達も避難をしたのだった…、そして剣二と巧巳の乗せたバイクは校門を突っ切り、校舎の玄関付近で急ブレーキをかけて止まったのだった…

「あ、あの…剣二さんの悪い癖って、何ですか？」

避難をした七海は止まったバイクを見て炎火達に気になっていた疑問を質問しようとしたら、巧巳はバイクから降り、ヘルメットを外したと思ったら地面に手を付き、何やらブツブツと呟いていたのだった…

「…はあ、巧巳も悪い癖が出てきましたね…、まあ巧巳はともかく剣二のアレは見たら分かりますよ」

氷牙は七海にそう言って剣二達の所へ行き、まだバイクに乗っている剣二のヘルメットを七海が取って見ると…

「……………ZZZ……………」

寝ていた…鼻ちようちんをしながら…

「…、あの~~~~、もしかしてこれが…？」

それを見て唾然とした七海はそう訊ねると…

「…そう、これが剣二の悪い癖…、何時^{いつ}何処^{どこ}でも寝る癖なのよ…」
「私達もこれには頭抱えているのよね…、一体^{いったい}如何^{どう}してこうなるのか分からないわ…」

頭を抱えて返答した地可と光であつた…

「…まあ何時もの事だからね、じゃ、早い所終わらせますか」

風太がそう言つて取り出したのは…バズーカであつた…（汗）

「…えっ？ふ、風太さん？何を…」

「あ、耳塞いでね…、じゃあ行くよ～～～！！」

七海が風太に疑問を指摘する前に耳を塞いでくれと言われて言つた通りにした、そして本人は耳栓をしていて引き金を引いた…、風太が言わなければおそらく耳の鼓膜が破ける位の爆音が校舎に響いたのだつた…、どうやら音だけで弾が出てなく、代わりに軽い痙攣を起こして気絶している巧巳と剣二の2人がいたのだつた…

「つておにい！剣二さん！大丈夫ですか！？」

我に返り剣二と巧巳の所へ行く七海であつた…、ちなみに何人かの生徒は爆音に驚いたり、剣二達と同じく気絶して救急車に運ばれてパニック状態になっていた…

時間が進み剣二達のクラス 2 - B

「はあゝゝゝ、ひどい目にあった…、もう剣二が運転するバイクに乗らねえ…」

先程のダメージが癒えたのか巧巳は自分の席に座って今朝の事をを思い出し、ため息つきながら言ったのである…

「行く前に言つたろ？乗せるのは今回だけだつて…、それより今日の放課後おっさんの所へ行くぞ、お前のバイクの鍵はおっさんが持っているからな」

それに反論するかのように巧巳の前の席の剣二が言い、今朝言ったことを再確認したのだった…、と、

「ガガガ！！！」

剣二の肩に乗っている、飛行帽を頭に寄せ、耳や尾が青で、それ以外は白いネズミ、シロンが何かを指していたのだった。

「ん？何だ？つておっさんか…、噂をすれば何とやらか…」

剣二がシロンが指差した方向を見ると、黒いスーツにサングラス、赤いネクタイをした男、不動ふだつ じょうめい銃四郎じゅうしろうが剣二達のクラスの廊下に入っていた、ちなみになぜ不動がおっさんと呼んでいるのは、剣二がある日不動のことを「おっさん」つて言い、それ以降剣二がそれを連発したため、そのまま定着したのである（本人は嫌がっているが…）…

「よし、席につけ…、授業に入る前にお前達に話がある…」

そう切り出した不動はクラス全員を見渡し、それを終ってそう言っ

たのである。不動はどうやら剣二達のクラスの先生でやっているらしい…

「今日、このクラスに転校生が来ることになったそうだ」

それを言った後クラスが騒いでいたのだった、まあ当然の反応である…

「落ち着け… って言っても無駄か…、しょうがない、入っていいぞ」

騒ぎ立てるクラスに慣れているのか、不動はその転校生をクラスに入れたのだった。

「…」

静寂、それもそのはずだ、何故なら教室の入り口には…ピンク色の髪が方まで伸びていて、それと赤いリボンを片側の髪に結んでいる少女が立っていたのだった…

「まあ、こういうクラスだ、一応簡単な自己紹介をしなさい」

不動はそういうと黒板にどうやら転校生の名前を書いてそれが書き終わると同時に彼女はこういったのであった。

「はじめまして、今日からこのクラスで皆さんと一緒に勉強することになりました、咲畑^{さきはた} 梨深^{りみ}です！よろしくお願いします、ビシィッ！」

そう言った彼女、梨深はそう言って敬礼らしいポーズをとったのである…

「まあ…、そうゆうことだ…じゃあ席は、西条、お前の隣だ、わからないことは西条や前の席にいる鳴神に聞け」

そう言った不動に言われて巧巳の隣に座る梨深は、

「よろしくね」

そういつて挨拶をした、それを確認した不動は、

「それとな、最近物騒な事件が起きているからな、皆も気をつけるように！」

そうここ最近、謎の事件が起きていたのだった、警察も動いているが謎が謎を呼び今だ解決の意図が掴めないのだ。それを言った不動は授業を始めたのだった…

昼休み

「すいません、こっちに…剣二さんいませんか？」

剣二のクラスに七海が来たが、

「ああ、ここには剣二はいないな…多分屋上にいると思うぞ、炎火や巧巳達もそこに行つたみたいだし…ってもう行っちゃった…」

そう答えたのは左耳にピアスをしている青年で剣二達のクラスメイトの三住^{みすみ だいすけ}大輔で、話の途中で出て行つた七海はすぐに屋上に向か

って行こうとしたら後ろから声をかけられたのだった…

「ねえ、私も屋上に行きたいけどいいかな？」

場所が変わり屋上

「…剣二ばネエだな、いつも思うけど…」

巧巳は剣二の持ってきた弁当の中身を見てそう感想を言ったのだった…（因みに「ばネエ」は「半端ネエ」の略である）

「そうか？まあ今まで爺ちゃんと2人で生活をしてきたから…、自然に学んだんじゃないか？」

剣二はそう言っただけで自分の分のご飯を食べていたのだった…、剣二や巧巳以外に、炎火と氷牙、風太に雷丸、更には地可に光とどうやら剣二の作ったご飯を目当てにきたようだ…（それが証拠に剣二の弁当に入っている料理は多いのである）と、屋上のドアが開いてきて出てきたのは…

「ん、七海と…へっ？何で梨深さんも来てるんですか？」

そう剣二が言うように七海の後ろには梨深が居たのだった…

「剣二さん、それは…ってすごいです！！これ全部剣二さんが作ったんですか！？」

それについて説明しようとした七海だったが、剣二の作った料理に

驚いていた…

「剣二君、料理作るのうまいですね…、実は私…この学院に着たばかりですので、剣二君や巧巳君に昼休みの間案内しようと思いましたが、たけどいなくて、それで探しに行こうとしたら、七海ちゃんが剣二君達が屋上にいるって教えた所を見て、それで私もそこに行こうと思っただけです」

梨深も剣二の料理に関心してから、此処に来た理由を説明した後、

「…、たはは、無理なお願いでしたかな…？」

どうやら弁当の量とそれを囲む彼らを見てそれは無理だと思ったか、梨深は少し笑った後そう言ったが、

「いいぞ」

黙って聞いてた剣二が言ったのは、案内してもいいという事だった。

「えっ？それじゃあ…」

驚いて剣二を見る梨深、

「まっ、おっさんに言われただけじゃないけどな、「困っている人を助ける」っていつも爺ちゃんが言っているしな」

そう言っただけで水筒に入っているお茶を飲んだ剣二、どうやら義理人情ぎりにんじょうの性格らしい…が、

「まあ、午後の授業はサボる予定だったからな、理由を見つけて儲もつ

けもんだがな」

…どうやら午後の授業をサボる予定だったらしくサラリを言う剣二に啞然とする梨深と七海に、

「…んじゃあ、僕も案内するよ、どうせ僕もサボるし…、あ、一応僕は咲畑さんの案内に言っただけで伝えてね」

反論所か同じくサボる巧巳も案内することにして、炎火達にそれを伝えてと言ったのだった…（汗）、勿論梨深と七海も啞然としたままである…

「っておにい！学校いつも来ているのに、そうやってサボっていたの！？」

我に振り返るように七海が巧巳に詰め寄りそう言ったのだった…

「当たり前だろ、僕頭いいから同じサボり仲間ができてよかったんだよ、なあ剣二？」

あっさりと断言し同じサボり仲間の剣二に言った巧巳…

「そうゆうことだ…で気になっていたが、まだご飯食べないのか？」

それに同意する剣二は気になっていた事を言ったのだった…

「「？…ああ～～～！！！」」

一瞬何かと考えた直後大きな声を上げる梨深と七海であった…そして手に持っていた弁当をすごい勢いで食べていき、それを啞然とし

て見守る剣二達であつた…

「ガ…ガガガ…」

剣二の肩に乗っていたシロンはため息つきながらエビフライを食べ
ていた…

これが咲畑 梨深とのファーストコンタクトである…

第1話 出会い（後書き）

どうでしょうか？後連絡事項ですが3月3日から5日まで小説を書く事ができません…、すいませんがまだ謎の答えを考えながら待つてください…、ではまた…、その答えを待っています…

第2話 遭遇（前書き）

どうもセイワです…うう、更新は亀な位遅いです…、それではどうぞ…

第2話 遭遇

一階廊下…

「えつと…、ここが保健室、怪我した時や具合の悪い時はここに行くといいよ…」

そう説明する巧巳、その隣には剣二がいて、さらに2人の後ろには梨深が説明を聞いていたのだった…（ちなみに彼らがこうしている事は担任の不動は知っている…）

「ええつと…剣二君と巧巳君は何時から知り合いになったの？」

最初から考えていた梨深は自分が気になっていた事を質問したのだった。

「ん？俺と巧巳がか？」

そう剣二が不思議になって答え、何故その質問をするのかを考えていたら、口が少し笑って、

「ははは…ん、お前、巧巳の事好きになったんだろ？」

と面白そうに言ったら…

「ええ！？な、何でそうなるんですか！？」

それを聞いた梨深は驚いてそうだったのか聞いてみたら…

「いやな、授業中に巧巳の事、たまに見ているし、昼休みや休憩の時何回も巧巳の事を見ていたから何かな……って思ってた……」

自分の推測を言っただけでその反応を見る剣二、

「ち、ちち、違います！わ、私そんなこと……」

剣二が思った以上の反応を見せる梨深に、

「ウワ……、これが噂の一目惚れってやつなのか……」

巧巳もそう言っただけだから梨深の顔が赤くなってきて……

「ん、顔が赤くなって……、図星だな、……そうかそうか、巧巳も遂に彼女ができたな……、これで大輔に自慢ができるな……」転校生を初日に彼女にした……って、言っただけで巧巳……！

それを見た剣二は何度も頷き、巧巳の肩に手を置きそう言ったら、

「ギャ、ギャルゲーの展開だよこれ、フ、フヒヒヒ……」

何かのスイッチが入ったのか何か不気味な笑いを上げる巧巳……（はつきり言っただけで怖い……）

「だからなんでそうなる……って聞いてない……」

話についてきていない梨深は何とか誤解を解こうとしたが、全然耳に入っていない2人に困っている……

「よし、今から放送室に言って学院の皆にこの事を放送するぞ！行くぞ巧巳ー!!」

「イエッサーー!!隊長!!!!」

巧巳は剣二に向かって敬礼すると2人は放送室のある方向へ走っていったのだった…

「な、何でこうなるの……、話を聞いて……!!!!」

半分泣いて後を追いかける梨深、転校して初日彼女はある意味最大のピンチに直面していたのだった…

「ガ…ガガ…」

剣二の肩に乗っているシロンも何かため息をついていたのだった…

15分後…

「だから悪いって言っているだろ…ほんの冗談だろ…」

そう言っただけでバツそうな顔で剣二が言ったのだった…、あの後何とか誤解を解こうと必死になる梨深だったが、剣二と巧巳のからかいに全然聞いてもらえなく泣き出しそうになって、それを見た2人は冗談だと言ったが逆に怒ってしまったのだった…

「当たり前です！冗談にも程がありますよ!!」

あやゆく「転校初日に、誤解によって同じクラスの、隣の生徒の恋

人になった転校生」という事態を何とか避けた梨深は、誤解を招いたとはいえまだ怒っていたのだった…

「まあ、僕も悪乗りが過ぎたけど…、で僕と剣二が知り合いになった理由だっけ、何でそうゆう事を聞くの？」

少し反省している巧巳は何でそういう質問をするのかを聞いてみたのだった…

「え？ええ…一応クラスの隣同士になった事ですので一応聞こうかなって…」

一瞬キョトンとした梨深であつたが同じクラスになったことでの興味だつたが、

「…それはな、1年の時、こいつが秋葉原で不良に喧嘩に巻き込まれているのを見てな、電化製品を買いに来ていた俺はその不良をボコボコにして、それから色々あつて今の状態になつたんだよな…つて何スットンキョな顔にしているんだ？」

剣二はそう思い出しながら、懐かしそうに言つたら梨深は以外だと顔に出ていた…

「うゝゝん…何か剣二君って何か掴めないよね…いい加減な所もあれば頼りになるし、性格が何とも言えないね…それに…」

そう言つて考え込む梨深、どうやら彼女にとって剣二は変わった人物だと認識したのである…

「？それに…」

何か考えているのか聞いてみようとする巧巳……

「つ！？」

とよく見てみたら今朝の夢で見た6振りの剣のうちの1振り、翼の形をした剣があることに気が付いて、おもわず驚いたがある疑問が浮かび上がったのだった…

「巧巳君？如何したの？」

それを見た梨深は固まっている巧巳に声をかけたのだった……

「い、いや……何でもないよ……、そう言えば剣二が如何とか言ってい
なかつたっけ？」

そう言って大丈夫と言って、さっきの話を聞こうとする巧巳である…

「あ、うん…何だか不思議で、どうしてそんなに人望が出るのかな
~~~~~って思ったの…」

そう言つて自分の考えを言う梨深である。確かに剣二の周りには巧巳以外に炎火達がいるため、梨深は不思議に思ったのだつた。

「ああ、それはね… 剣二から聞いたけど炎火や氷牙、風太に雷丸、地可は小学生からの同級生で光は君が転校する数日前に転校してきた、今は剣二の所に居候しているんだ」

劍一の代わりに巧巳が答えたのだった…、で何故劍一の代わりに答

えたのは、当の本人は…

「おお〜い、早くしろ…、お前ら何しゃべっているんだよ…」  
もう既に先に行っていたのであった…

「ああ、ワリイ剣二、すぐ行く〜」

そう言って巧巳は剣二のもとへ走りだしたのだった…

「…やっぱり…気のせいかな…」

梨深はそうつぶやくと剣二達の方へ歩き出したのだった…

時間は進み放課後…バイク置き場…

「何？そんな事があったのか？」

そう言ったのは剣二達のクラスの担任の不動で、その隣には赤いバイクがある。如何やらそれが巧巳のバイクである…

「そうなんです…、まさか僕と同じ力を持つ人に出会うなんて…、でも、僕は気付いたのにあの子は気付かなかったですよ？それってどういことなんでしょうかね？」

何故かマジな顔になっている巧巳は、あの時気が付いた事を不動に報告したのだった…

「まあ…夢の事もあるし、これについては後からわかるんじゃないかな？」

青いバイクの横には剣二もいて如何やら剣二も気が付いていたらしく肩に乗っていたシロンも頷いていたのだった…

「そうか…、ここ最近は奴らはまだ大人しくしているが油断は禁物だ…、用心しろよ…」

そう言っただけでバイクのカギを投げた不動は職員室に行こうと歩いたのであった…

「はい…、気をつけます…」

そう言っただけでため息をつく巧巳の肩に…

「…」

剣二が無言だが大丈夫だという目をしていたのだった…

数時間後… 21:00… 巧巳のベース

………

『ナイトハルトさん、そう言えば最近、龍の化身や仮面ライダーが活躍したってニュースでやってますよね、ナイトハルトさんはこれは如何思っているですか？』

『自分が思うのにこれは何か凄いことの前触れではないのか、と思うのが吉』

『そういえば、これも最近話題となっていますが「渋谷ニユージエネレーションの狂気」は如何思っているんですか？やっぱり犯人は何が目的があつたんですかね？』

『それよりもファンタズムの曲は聞きました？、あれはお勧めですよ、ボーカルのFESの歌声はいいですよ』（萌）』

.....

「うっ、グリムとチャットをしているのに、何故こうなっているの……」

そう巧巳は何かパソコンを見てそうつぶやいたのだ……、ちなみにナイトハルトは巧巳のネットゲームの「エンパイア・スウィーパー・オンライン」のハンドルネームであり、グリムはナイトハルトのパーティを組んでいるハンドルネームである……

ナイトハルトはこのエンスー（エンパイア・スウィーパー・オンラインの略）で「疾風迅雷のナイトハルト」を呼ばれるほど有名であり神として崇められている存在でもある……

そういうわけだから彼を崇める人たちもいて巧巳はある意味大変である……

「ん？、何だろう？また新たな……」

落ち込んでいる巧巳を知らずかチャットに將軍という人が入ってきたが、それよりもこれを何とかしないということでキーボードを打

ちこんだのだった…

それから30分後…

「や、やっと終わった…」

最後に会話していたグリムが退室し、やっとという感じの巧巳であったが、如何やらまだ将軍がいることに気がついて、さらに書き込みがあることに気がついたのだった…

『ここにいるのは私とあなたですね、あなたにある情報を教えたくて来ました…、もちろん信じるのはあなたです…』

そう書き込みがあったのだった…、そして巧巳は次の文で驚愕する…

『第3の「ニュージェネ事件」についての情報です』

そうこの接触が…彼らを…そして彼女達を巻き込んだ戦いの日々開幕開けとなることになろうとは、まだ…知らない…、そして…

『その目…だれの目…』

続  
く  
…

## 第2話 遭遇（後書き）

どうでしょうか？

お知らせですが…

この小説に評価とお気に入りはあることに気がつきました！！  
こんな小説を楽しみにしている方たちのために頑張りたいと思います！！

というより…

感想とか、辛口でもいいですから書いてください〜〜〜〜、  
マジですから、本当ですよ！！！！

…  
ではまた…、その答えを待っています…

### 第3話 発生（前書き）

どうもセイワです、今回の話は説明が主でありますので、そこそこ注意してください。それではどうぞ…

### 第3話 発生

翌日：10：20：翠明学院屋上

「第3のニュージエネの犯行予告場所が送られたあ！？」

巧巳が話がしたいという事で剣二は巧巳と共に屋上に来たのだが、そこで巧巳が第3のニュージエネの予告が送られたと言って大声を出したのだった。

「渋谷ニュージエネレーションの狂気」……………

これは1か月前：3月5日の深夜、渋谷駅周辺での最も高いビル（地上41階）であるコナリアスタワーの屋上へリポートから、5人の高校生が飛び降り自殺をした事件があつた。死亡したのは男子高校生3人、女子高校生2人である。5人それぞれの爪の間にわずかな肉片が残っていたこと、目撃証言などから、5人は互いに手を繋いだ状態で同時に飛び降りたと警察は発表した、しかし調査が進むにつれ不可解な点がある事が分かった。

1つ目は自殺の理由で、5人は決して親しい仲だったわけでもなく、通っている学校も別々であつた。警察の調べで5人の足取りは、午後7時頃に渋谷駅前で待ち合わせ、そこからカラオケボックスへ向かったことが判明していて、カラオケボックス店員の証言では、5人ともこれから自殺するようには見えず、ごく自然な様子だったと証言している。また被害者の遺族も自殺するはずがない、そんな

兆候はまったくなかったと断言している…

2つ目は空白の2時間で、午後9時に出た後、5人は帰るわけでも別の店に行くわけでもなく、渋谷のあちこちを歩き回っていたと目撃があった。事件のあった日は平日だったため、5人は学校帰りでそれぞれがカバンを持っていたが、そのカバンは渋谷のあちこちに捨てられていた。宮下公園に1つ、センター街の路上に2つ、駅南口の歩道橋上に1つ、そしてコーネリアスタワー入り口前の生け垣に1つ。おそらくそれらのカバンは、この空白の2時間の間に被害者自身が捨てたのだが、なぜそんなことをしたのかは不明である…

3つ目は目撃者がなしであり、午後11時過ぎになって、彼らはコーネリアスタワーの正面入り口からビル内に入ったのである。そしてロビーを通ってエレベーターで最上階へ向かったが、ロビーには常に従業員がいたので、そんな時間に5人の高校生が入ってきたら呼び止められるのが普通だが、なぜかこの時間に5人の姿を目撃した人は皆無でロビーはもちろん、エレベーターでも、最上階のレストランフロアでも、5人を見たという目撃者は、不思議なことに1人もいないとのことである…

4つ目はこれが1番の謎である密室である…、コーネリアスタワー屋上へリポートへのドアは施錠されており、鍵がなければ外へ出ることは出来ないのである、かといって鍵が壊された形跡もないのである。5人の遺品から鍵も見つかっていないのである…

そのドアのノブから5人の指紋は見つかっていないのである…

以上の事から、これは単なる自殺ではなく他殺と色々な目測が飛び交う中、3月19日の未明、渋谷駅南口のガード下で、不自然に腹部が膨らんだ状態で仰向けに倒れている男性の遺体が発見されたの

だった。

その腹部、正確には胃の中から、胎児の遺体が見つかったのであった…

被害者は大学生で、被害者の腹部の傷は、医療用の糸で縫合されていて、その傷の周辺に爪でかきむしったような跡があることから、被害者は生きたまま開腹されたと見られていて、縫合系の一部は、無理に引きちぎったような状態になっていたのである…

またこの事件も不可解な点がある事が分かった。

1つ目は猟奇的な犯行の意図で、日本で起きた犯罪史上類を見ない残虐さであるこのような犯行を犯人が行った意図は、どこにあるのか、テレビなどでは連日、犯罪心理学者の先生方が議論を交わしていて、これほどに手の込んだ方法で殺すのには、よほど強い恨みがあつたのではないか？、あるいはこれは劇場型犯罪であり、犯人はただ目立ちたいだけではないか？、さらには社会への皮肉を込めたメッセージ…、など。

けれど犯人がまだ捕まっていない現状では、それらはすべて憶測でしかなく、真相は闇の中で少なくとも被害者は、抱えているトラブルなどもなく、人に恨まれるような人物ではなかった…

2つ目は胎児の母親はどこに？である…、被害者の腹部に入れられていた胎児は、妊娠8ヶ月ほどの状態だった…、嬰兒ではなく胎児だということは、正常な出産は行われなかったということになる。被害者の腹部に入れられた時点で胎児は亡くなっていたそうだが、少なくとも事件直前まで母親のお腹の中にいた可能性が高いという情報もある…

ではその母親は、いったいどこでなにをしているのか？  
考えられるのは、

1：母親は早産しどこかに捨てた。その後、犯人が発見し事件に利用した

2：母親は犯人に捕まっている、あるいは殺された

3：母親が犯人、あるいは共犯

以上の3つのケースであるが…

犯人が縫合系などを事前に入手していることを考えると、1のケースはあまりに偶然性が強いため現実的ではなく、2のケースの場合、被害者がさらに1人増えてしまうことになるのだが、おそらく一番可能性が高いのはこのケースで、3は衝撃的なケースですが、可能性としては考えられなくもありません。

とにかく母親はいまだ名乗り出ておらず、行方不明である。

3つ目は被害者と胎児の関係で、当初は、胎児が被害者の子供なのではないかというような憶測も上がったが、警察によるDNA鑑定の結果、両者に血縁関係なしと断定されたのである…

ではなぜ被害者が犯人に殺されたのか、なぜ被害者の腹部に入れられたのが胎児だったのか。それはいまだ謎に包まれたままである…

以上の事からこの事件は世間にもたらした衝撃は強く、さらに、明らかな殺人事件だったことから、俄然渋谷が注目を浴びるようになり、『ニュージエネレーションの狂気』という言葉がメディアに出始めたのもこの事件の後だったのである…

そしてこの事件が最初の事件を他殺を強めることになり、最初の事件を『集団ダイブ』、今回の事件を『妊娠男』と呼ぶことになり、その非常に凄惨な犯行が、報道を自粛している放送局もあるほど有名になっている…

それと同時期に怪物が現れてそれを仮面をかぶった者や龍の戦士がそれらを倒しているという都市伝説があるのだが…、これはのちに語るだろう…

さて話を剣二と巧巳の会話に戻そう…

「そうなんだ…、おまけに画像まで来るし… 本当気味悪くてな…」

巧巳は昨日の事を思い出してため息をつたのであった…

「で、その中身は見たのか？」

剣二は巧巳に重要な事を聞いたのであるが…

「言わないでくれ！ 思い出して気持ち悪くなるよ！！！！… まあそう言うと思って一応保存したやつを持ってきたんだが…」

… 如何やら見てしまい、その事を記録から消したいくらい衝撃映像であるらしい…、しかし剣二が気になる事からとメモリースティックを見せたのだが、何か顔色が良くない…

「…、お前、何かまだ隠していることがあるな…」

何か様子がおかしい巧巳をみた剣二は巧巳に問いただした。

「…、そうなんだ…、ほら教室に入る前、黒板に書いていたやつが気になっていたんだ…」

そう言って、朝の教室にある文字が書かれていた事を言った巧巳…

「…、ああ、確か…」

そう言って剣二はこう言った…

「その目…、だれの目…」

そう言った剣二であった…

「これはな…僕が小学生の時に書いた作文のタイトルなんだ…、それに、送ってきた將軍もこの言葉を知っていたし…」

そうこれは、巧巳しか知らない言葉である…。それを知っているのは…

「確かにおかしいな…、それよりもその將軍から送ってきた画像、見せろよ…」

剣二はそう言う…

「ガ…ガ…ガ…」

どっから持ってきただろうかノートパソコンを持ってきたシロンが現れたのだった…

「相変わらず用意はいい事で…」

ある意味手際はいいい剣二にそう言って、シロンからノートパソコン

を貰って、メモリースティックを差し込みパソコンを起動した巧巳  
だった…

…彼らはこのまま2時間目をサボるつもりである…（学生の皆さん  
は彼らをまねしないでください、作者もしてませんが…）

それからしばらく問題の画像である…

「これだな…、んじゃあ開ける」

そう言って画像を開けるようさざりと言う剣二に、

「うっ、まだ見るのか…、ええいもうどうにもなれ…!!!!」

最初、躊躇していた巧巳であったが、腹を括りその画像をクリック  
したのだった。

「!!!!、なっ…」

そこには…何かに突き刺さって血を大量に流している男性の死体の  
写真があるのだ…

「…しかもこれだけじゃないんだ…」

如何やらこの反応は予想していたらしく、改まって言う巧巳は…

「…これは昨日のうちに届いたんだけど…、將軍は…今日に起きる事を予知したんだ…」

そう言ったのだった…

「なあ！？、それじゃあこの画像が今日！！」

災厄な予感を剣二は重い巧巳に言ったのである…

「今日…第3のニュージエネが起きる…」

そう言った時チャイムが鳴ったのであった…

時間は進み…夕方のあるコンビニ…

「で、何でここにいるの僕達…」

そう言つて雑誌アニメのを見ている巧巳と…

「うん？まあ將軍が何者かはわからないが…、頂いた情報だ、その犯人を捕まえるんだ！…んでついでにその將軍の顔を拝みに行くと…」

その隣にはこれまた雑誌の漫画を読んでいる剣二である。如何やら第3の事件を見に行くということにしたのだった…

「でも、將軍はおそらく会えないと思うけど…、大丈夫かな？…」

そんな心配をする巧巳であつたが…

「…あ、そう言えば剣二、将軍の事で思い出したんだけど…、画像と一緒に変な数式が付いてきたんだ…」

と巧巳は将軍の事である事を思い出して剣二に話しをしたのだった…

「ん？その数式がどうしたって言うんだ？？」

剣二はその数式が将軍から送られてきたのかを聞いてきて、

「うん、その数式の後にくこう書かれていたんだ…『この公式によって世界の可能性は殺されてしまった』…って」

そう謎めいた言葉を言ったのだった…

「…どういうことなんだ？…」

そう言つて剣二は何でこの公式が送られてきたのかを考えていたら…

「ん？ありゃあ…」

剣二はふとコンビニの窓を見るとそこにいた人物に気がついた…

「あれは…梨深さん？」

剣二の声に気がついて巧巳も外を見ると、確かに梨深がいて彼女も彼らに気が付いたらしく、コンビニに入つて言ったのだった…

「あれ？タツクンに剣二君、どうしたの？」

…如何やら剣二はそのままだが巧巳はタックンって呼ぶことにしたの梨深であつた…

「ああ、ちよつとな…」

まさか「これから起きるニュージエネの犯行現場に行く」って言えないので、巧巳は梨深に適当に話そうとした時！

「キヤア~~~~~~~~!!!!」

遠くで女性の声がしたのだった!!

「巧巳!!」

「わかつている!!」

そう言った後、剣二と巧巳はコンビニから出て行き、声の方へ走っていった…、そして細い通りには剣二達と同じ制服の女子生徒がいて腰が抜けたのか座り込んでいた…

「巧巳!彼女を…、いつ!?!」

剣二は巧巳に座っている女の人に何かあつたか聞いていこうとしたが、その前に剣二は見たのだ……

両腕の手首は縛られて上につり下がっていて、そして…白い十字架が何本も体に突き刺さっている……男性の死体があつたのだった

……

これが巧巳と剣二の遭遇した第三のニュージエネ…「張り付け」で  
あり…そして彼女達との本当の出会いが幕を上げるのだった…

続く…

### 第3話 発生（後書き）

どうでしょうか？いよいよ物語はようやく始まるつとじています…

今まではプロローグと思ってもいいでしょう…

また評価とお気に入りが増えています。

これからもがんばっていききたいと思います！

ではまた…、その答えを待っています…

## 第4話 変身（前書き）

どうもセイワです…、すいません！！更新が一ヶ月以上かかりました！！、後、後書きのほうで募集がありますので最後まで見てください、それではどうぞ…

## 第4話 変身

事件発生から数分後…

「で、第1発見者の悲鳴を聞いてきてみたら男性の遺体があった…と」

第3のニュージエネが発生した場所には警察がいて事件現場にいた剣二達に事情聴衆じじょうちゆうしゆをしている刑事がいたのであった…

「はい…、って刑事さん、ちょっと聴いてもいいですか？」

と剣二は事情を聞いている刑事にふと思ひ聞いてみたのだった…

「ん、何だね？それは…」

と歪んだ態度で話をする刑事に…

「ああ、居たつス！判警部補はん…」

そう言つて来たのは若い警察官でどうやら剣二に話をしていたのは警部補である…

「？どうした諏訪すわ？何かあつたのか？」

どうやらこの諏訪は判の部下であるようで判は何か慌てていたのである…

「あの…実はですね…」

そう諏訪が言おうとした時！

「判君？何やっているのかね？」

と体格がしつかりしていて白髪が混じっている眼鏡の男が立っていたのだった…

「こ！これは鳴神警視官、ど、如何して此処に？」

判はまさか自分の上司にここにいることは思っておらず驚いて敬礼をしていた…

「爺ちゃん！？何でここにいるの！？」

…もう1人驚いている人もいるのだが、その言葉に…

「な！？も、もしかしてお名前は…」

その言葉に驚いてその人に聞いてみる諏訪に対して…

「鳴神 剣二、そこにいる鳴神<sup>なるかみ</sup> 総一郎<sup>そういちろう</sup>の孫ですけど…」

そう言う剣二であった…

数分後…

「し、失礼いたしました！！まさか警視官のお孫さんだと思わず、本当にすいませんでした！！！！」

そう言つて何度も頭を下げる諏訪に対して剣二は困つた顔をして、

「い、いや…、顔を上げてください…まあこうゆう事には慣れていきますから…、それよりあの警部補さんは？」

…如何やらこういふことには慣れているらしく、まだ頭を下げている諏訪にある疑問が出たので聞いてみた…と

「まったく鳴神警視官が居るだけで現場の雰囲気が異常にピリピリしていて、俺はこういふのは好きじゃないな…っと、そのお孫さんがいたんだよな確か…」

…噂をすれば何とやら…その判警部補が剣二や諏訪の所へ来たのだつた…

「あつ！先輩！！どうでした？鑑識の結果は？」

如何やら判は今まで遺体の鑑識に行つていたらしい…

「…それはな…、って確か剣二だったよなお前…お前も聞くか？」

そう言おうとした判は剣二が居た事に気がついて聞いてみたのである…（みなさん、これは小説の話で実際は聞いたりしません。剣二は警察のトップの人間の孫であることで信用できるということと話をするのである）

「はい…、私もそのことで聞こうと思つていたのでお願いします」

如何やら剣二は目上の人には敬語で話すみたいである…

「ああ…、被害者の身元は今のところわからないが年齢は50代だろう…死因は絞殺、刺さっていた十字架は後で刺したんだろう。その十字架は杭であるんだが…、下に落ちていたそのすべてが指紋が発見しなかった…」

つまり犯人も後の事も考えて指紋を拭いたのか、それとも手袋をはめてやったのかはわからないが指紋で犯人を特定できないのであった…

「ただ…事件直前の30分間ほど、現場周辺で壁に杭を打ち付ける甲高い音が聞こえていたという証言がいくつかあるが…、俺はそこにあたるうと思うが…、恐らく収穫はないだろうな…」

そう言ってしかめっ面をする判であった…

「まあ私もその時間に巧巳と一緒にコンビニに居ましたから…証拠はコンビニの定員に聞いてみてください」

そう読者のみなさんも知っていると思いますが巧巳と剣二の2人はコンビニに居る事が前の話で知っているため2人は犯人ではない事が分かりました…

「しかし確か咲畑 梨深のアリバイは君達が見たという証言しかないし…諏訪その子の所へ連れて行け、俺が直接話をする」

そう言って剣二と別れた判と諏訪…それを見ていた剣二はポケットの中にあつた携帯電話を何処かにかけたのであつた…そして…

「…さあて…行きますか…」

そう言ってその場から去ったのであった…

その頃巧巳は…

「うんうん、ブラチューのあの場面をわかる人に出会えるなんて…」

…第1発見者の人と何か話をしていたのだった…

「そうですね…あの…すいませんが、あなた西条君だったから彼は鳴神君だよ…」

そう言って彼女はそう確認をとったのだった…

「ええ、そうですね…あの…貴方は…」

そう言えばこの人の名前は何だろうと思ったのか巧巳は彼女に訪ねたのだった…

「あ、すいません、私、貴方達と同じく翠明学園の3年生、楠<sup>くすのき</sup>優<sup>ゆ</sup>愛<sup>あ</sup>です」

そう言って頭を下げる優愛であった…

「…それでブラチューの話になりますが…」

そう言って話を戻そうとする巧巳…ちなみにブラチューとはブラッドチューンの略でアニメにもなっている漫画で巧巳のお気に入りだ

ある…

「そう言えば…ブラチューのオルジェルのフィギュアが来月に発売するんですが…もう予約済みですか？」

そう言う優愛である。ちなみにオルジェルとはブラチューのヒロインで魔法少女であるで…

「あ~~~~！！！！すっかり忘れていた~~~~！！！！、今すぐ虎。穴に行つて予約せねば！！！！、ということで優愛さん、自分はこれにて！！！」

そう言つて走り去ろうとする巧巳であつたが…

「ちょっと待つてください、アドレスの交換をしたいと思います…」

如何やらメールアドレスを交換しようと優愛は言つたのだが…

「すみません、僕は携帯を持っていないので…また会つた時にパソコンのアドレスを渡します！！！」

そう言つて砂煙を立てて走り去つた巧巳…その場にポツンと取り残された優愛は、

「…まだ…聞きたいことがあつたけど…ふふふ」

そう言つて笑つたがが目は笑っていなかった…

そして…

人気のない通り…、その道路の真ん中には大人数の行進がしていた…、しかしそれをよく見てみると人ではなく紫の体に赤い一つ目の異常の者、更にその後ろには巨大な白い蟻<sup>あり</sup>が大通りを堂々行進していたのだった！！

「ったく、巧巳はどこで油を売っているんだか…」

そう言つて異形の行進の前にいたのは…剣二だったのだ！！

『どうせフィギュアの予約に行つたのだろう…、しかし…このタイミングで奴らが現れるのは…』

その声は剣二の腰から聞こえてきたのだった！！

「確かに…、まあそのことは後にしようぜ<sup>すまじゅうけん</sup>激龍剣…、如何やらあちらさんからお出迎えだぜ…！！」

そう言つて剣二は突っ込んできた紫の異常の者が片手に刃物が曲がりくねっている短刀を持つて剣二に突っ込んできたのだった！！

『しょうがないな…やろうか剣二…！！』

「ああ！！ゲキリュウケン…！！」

そう言つて腰に手をかけるとそこから光が放ち、剣二の手には龍の顔を見立てた剣が握られていたのだった！！そして中央に剣を構え柄を下げると、

「リュウケンキー！！発動！！！」

そう言つて鍵を柄が下げて出てきた穴に差し込み回し、もう一度柄を上げたのである！その時に両側に龍の翼に見立てた物が展開したのだった！！

『チェンジ…リュウケンドー！！』

そう機械音がすると剣の先に光が集まつて行き…

「激龍！！変身！！！」

そう叫んだ時！光が天に登り…その光が龍の形になった！！そして！その光の龍は剣二のもとに降りてきてその中に入ると辺りに眼が開けられないほどの光を放つたのだ…、そして…光が収まると剣二のいた場所に白い騎士が立っていたのだ…、否…

それは…その騎士の名は…

「地球と共に生れし龍が、闇にうごめく間を砕く！！リュウケンドー！！！！来！陣！！！」

そうその声は剣二であつたのだ…その手には先程の剣を握っていたからである…

「…いい加減、出てきたらどうだ…」

そう言つてリュウケンドーは路地裏に声をかけたのだ…

「あっちゃ…ばれていたかよ…もしやと思つて来てみたらお前

がいたもんだからな…」

そしてそこから出てきたのは…巧巳である…

「当たり前だろ？それよりも仕事だ、こいつらを倒すぞ…」

「へいへい…」

そう言つて両手を下に広げると腰に光が放ち、それが収まると中心に赤い球体が付いたベルトが現れたのだった、そして前に夢で見たように両手を別々に回して右手が左上、左手だ右下の位置に行きそして夢で言つた言葉で叫んだ！！

「変身！！」

そして光が放ちその光が収まると顔は一本の角に赤い複眼、首には赤いマフラー、体は赤い鎧に身を包んだ戦士が立っていたのだった！！！！

…続く！！

#### 第4話 変身（後書き）

いかがでしょうか？

剣二はともかくとして何と巧巳が変身しました！！

そこで募集です！！この巧巳変身体の名前を募集したいと思います！  
本当にお願ひします！！（土下座！！）

後評価が上がっていました、ありがとうございます！！！！  
ではまた…、応募を待っています…

## 第5話 夢（前書き）

どうもセイワです！すいません！！白黒仮面さんに指摘された所を書き直していました！！後小説の書き方を変えてみました。それではどうぞ…

## 第5話 夢

(巧巳サイド)

「そんじゃあ！！行きますか！！」

言うと同時に剣二は走り出し、手に持ったゲキリユウケンを先頭に居た紫の怪人に頭から一氣に一刀両断した！いっとうりょうだん…相変わらず容赦ないな…

「ギジャ~~~~！」

そう断末魔の悲鳴を上げた紫の怪人…僕達は「ジャマイマ」と呼んでいる(命名者は剣二) 怪人は紫の煙となつて消えてしまった…

「へっ！いくらジャマイマが多くてもな、所詮ザコなんだよ！！」

『しかし数は多い、油断は禁物だぞ、剣二！』

「分かっているって、そんじゃあ突っ込むぜ！！」

剣二は手に持ったゲキリユウケンと会話をした後、ジャマイマの群れに突っ込んだ！！…まあゲキリユウケンもああは言うけどあの2人(?)は結構似た者同士だからねえ、片方が暴走するともう片方が押さえる…いいコンビだねえ…

「…っと考えている場合じゃない、剣二は…相変わらず剣二は強いなあ…さてと…僕も行きますか！！」

考えに浸っていた僕はジャマイマの大群に突っ込んだ剣二を見るとそこで大暴れしている剣二の姿を見て僕は半分呆れて覚悟を決めて

僕も走り出した。その群れの一体に走ったスピードを生かした飛び蹴りを繰り出し戦いに参加したのだ…

僕と剣二の戦いは対照的で剣二は剣で切ったりなぎ払ったりしているのに対して僕は殴ったり蹴ったりと徒手空拳としゆくうけんを駆使している…まあ剣二や炎火達に一年間鍛えて貰った…いやあれはいじめ？、だって崖から谷底に落とされるは自殺で有名な青木ヶ原樹海に放り込まれるはで殺されかけた事が何度もあったんだよ！………けど確か剣二達それらをやる時「大丈夫、俺らもそれをやったんだからな」…もしかして剣二達があんなに強いのは過去にあれをやったのかな…、まあ僕は言うのもなんだけどタヒにかけるが何度もあったから不良がからんで来ても大丈夫な強さをつけたことだし…まあいいか。

「巧巳！お前、戦いが慣れてきたんじゃないか！！」

「それほどでも！！」

過去のトラウマで考えていた僕に剣二そう言ったので僕は色んな意味を込めて答えた後、目の前にいたジャマイマに怒りを込めて拳を繰り出してジャマイマをぶっ飛ばした…ああもうこうなったらお前たちで僕の怒りをぶつけてやる！！疾風迅雷のナイトハルト様を怒らせた罪、お前たちに償わせてやる………！！！！

（剣二サイド）

…巧巳の奴荒れてんなあ…ジャマイマはかわいいそうだな、敵に情けは無用だけだな。

『…なあ剣二、巧巳の奴…何か怒っておるが、如何したのか？』

と手に持っている剣、激龍剣が俺に語りかけてきた。ちなみに激龍剣の声は普通は俺以外は聞こえないのだが他人にも聞こえる事も可能な機能がついている。

「さあ？まあ、あいつにいい所を持つていくのはしゃくだけだな」

『…お前という者は…、しかし剣二よ、数は多いこのままではまずいぞ…、ナツクルキーを使え』

「分かったぜ、…激龍剣！！」

激龍剣と会話をした俺は激龍剣の柄を上げて、

「ナツクルキー！召喚！！」

俺は腰にある魔弾ホルダーから取り出した鍵…マダンキーを鍵穴に差し込み、それを回して柄を下げた！

『召喚、魔弾手甲<sup>ナツクル</sup>』

そう激龍剣が言うと刀身に光が集り、

「来い！マダンナツクル！」

そう言つて激龍剣を上げると剣の光は俺の右手に行き、そして龍の顔を模った手甲<sup>てっこう</sup>となったのだった！

「巧巳、離れろ！スパークモード、セット！」

俺は巧巳に注意をしてマダンナツクルの角を上げると口の部分が開き其処から電流が今にも出てきそうな勢いであつた！！そして巧巳が離れたのを確認して横に1回転した後！！

「喰らえ！ナツクルスパーク！！」

そう叫び其処から電撃が放たれたのだった！！

「……ギジャ……！！」

そしてそのままジャマイマの群れに直撃しそのまま煙となって消えたのだった……しかし……

「ちい……やっぱり魔物相手にこれはやっぱり火力不足か……」

俺はそれを見ると舌打ちをした、その理由はジャマイマを倒したナツクルスパークはそのまま白い蟻……いやこの場合は魔物と呼んだほうがいいか……その魔物に直撃はしたものの効果はなかった……

「けど、ジャマイマを一掃できたからいいじゃないの？」

そう言っただけの隣に行き話をする巧巳……確かに巧巳の言った通りさっきのナツクルスパークでジャマイマは一掃されたのだから当初の目的は達成したのだから……まあいいか……

「まあ、それは分かっているさ……さてと……行くぜ巧巳！！」

俺はそう言っただけで魔物に向かって突っ込んだ！！

（巧巳サイド）

「って言ってる側から！待ってよ剣二！！」

全く剣二は…、言い出したら即決行する癖はあまり変わってないかな…、まあそれはいい意味でいいんだけど…と僕も早く行かないと…

剣二の後ろに一緒に駆け出す僕！そしてそれぞれ剣と飛び蹴りを喰らわせた後、僕はバク転して数歩下がり、集中して頭の角が展開し左右に角が一本ずつ計三本の角になったのを確認したら、そのままジャンプし首に巻いてある赤いマフラーを手に持ち、右足に巻きついて其処から炎に包まれる。それが晴れると炎の紋章が描かれている足の鎧が付いた！

「行くよ！点火！！」  
イグニッション

そう僕は叫ぶと足の紋章が輝いて其処から足の紋章と同じ紋章が現れた！それを右足を前にしてくぐると僕の右足が燃えていたのだ！  
！そしてそのまま魔物に突っ込み飛び蹴りを繰り出したのだ！！

「グギヤア~~~~！！！！」

もちろんこれで止めは出来ないけど…、まあ後は剣二に任せるか…

（剣二サイド）

「よし！一気に止めと行くぜ！激龍剣！！」

俺はそう言つと激龍剣の柄を上げて、

「ファイナルキー！発動！！」

俺は魔弾ホルダーから取り出したマダンキーを鍵穴に差し込み、それを回して柄を下げた！

『ファイナルブレイク』

そう激龍剣が言くと刀身に光が集りだしたのを確認した後、俺は上に飛び、空中で一回転した言った…、必殺技の名を！！

「激龍剣！魔弾斬り！！」

俺はそう言つと同時に俺の方を向いていた魔物の頭から一気に一刀両断した…、そして俺はその魔物を背に向けて言った…

「闇に抱かれて…眠れ…」

そう決め台詞を言つた後、魔物は光の粉になって消えた…、マダンキーを残して…、俺はそれを掴むと、

「俺はこれからこいつを届けに基地に行く、巧巳は…如何するんだ？」

俺は巧巳にこれからの予定を言つたのだが…、巧巳は少し考えた後、

「ああ～～～！！、セイラさんのフィギュアの予約の事、すっかり忘れていた！！急ぎ予約せねば！！というわけでまた明日！！！！」

そう言つて砂煙を立てて去ってしまった巧巳…

「…やっぱりフィギュア関係かよ…」  
『予想した我も言うのもなんだが…変わらんな巧巳は…一ヶ月経つても…』

俺と手に持っている激龍剣はため息をついてそのまま歩きだした…

(????)

夢を見ていた…

その夢は…僕が仰向けに倒れていて…

視線が…空から降ってきて…

その瞳は…いつも僕を見つめていて…

眼差しは…厚くて真っ黒な雨雲を突き抜けて…

雨のように僕へと降り注ぐ…

……僕を…見るな……

夢なのに冷たい…

雨の冷たさよりも背中に預けている何かの冷たさが…さっきから体の震えが止まらない…、夢なのに…

ひどく寒い…、夢なのに…

突き刺さってくる…誰のものかも分からない天からの視線…

それから逃げるように…

僕は一僅 わずか に首を持ち上げて周囲を見渡す…

そこで僕は驚愕する…

其処にあるのは…崩壊した渋谷<sup>街</sup>…

其処にあるのは…絶望…

其処にあるのは…死…

其処にあるのは…無…

…誰もいない…誰も動いていない…誰も…生きていない…

聞こえてくるのはただ…降り続ける雨の音だけ…

このまますべてを…

生きているものも…死んでいるものも…

全てを優しく包み込んで洗い流してしまっただろうか…？

体が…動かない…動かせるのはかろうじて…首と瞳だけ…

体が震えているけど…そんなのはただの生理現象でしかない…

僕の意識じゃない…僕は身を震わせたいなんて思っていない…！

夢なら…覚めてくれ…！

そう思っていた時…ふと死の雨以外の音が響く…

無の中から浮かび上がってくる…たった一つの有…

……君は…誰…？

そう言おうとしても声は出ない…

如何やら…本当に動けるのは…首と瞳だけらしい…

その肌が青白く見えるのは……

雨の冷たさに凍えているのから…？

それとも…君がもう死んでいるから…？

でも…彼女は震えていなかった…

そして…前髪で隠れそうになっているその瞳は……

……僕を…見るな……

ひどく悲しそうに見える…

狂気じみているように見える…

なにも映していないようにも見える…

もしも………

世界には僕と彼女のふたりしかいなくて…

こうしてお互いだけを永遠に見つめあっていたら………

僕の世界は…彼女の瞳に映るものだけになるのかな…？

彼女の世界は…僕の瞳に映るものだけになるのかな…？

彼女の瞳に映るのは…僕…

僕の瞳に映るのは…彼女…

そう考えると…世界は途端<sup>とたん</sup>に縮小<sup>しゅくしやう</sup>化する…

………

不意に僕の耳に届く…とてもキレイな声<sup>ノイズ</sup>………

彼女はうなだれて………

両手を…左右に広げる………

まるで…あの雨雲の上へ向けて飛び立とうとするかのように…

あるいは、この雨すべてを…受け止めるかのように…

うなだれた彼女の表情は…僕の位置からもうかがい知ることとはできない…

雨の薄膜の向こうで…君は…どんな顔をしているのか…

その時…左右の手に桃色の光が放ち…そして…其処から剣が現れた…

そして…その剣は左右に…まるで翼を広げて…

まるで……天使…？

乱舞する光の羽は…僕を祝福しているのか…それとも…

(?????)

「巧巳……さつさと起きろ……!!!!」

そう何かが聞こえたと思うと顔に強烈な痛みで起きたのだ、というよりこのやり方は…

「…、剣二！何時も何時も言っているだろ！！起こすときは…って…」

そう言おうとした時、剣二の後ろにいる人物を見て僕は驚いた…

「あ！おにい、生存確認～～～」

そう何で…、って分かっているがあえて言おう…

「七海！なんで僕の家にいるの！？」

…絶対厄日だ今日…絶叫する僕は心の中で呟いたのだった…

…続く…（汗）

## 第5話 夢（後書き）

いかがでしょうか？

白黒仮面さんの言ったことを参考にしましたがいかがでしょうか？  
巧巳が見た夢は果たして何だったのか？其処の所を考えてみてください。  
さい。

後巧巳変身体ですが…一ヶ月経つても来ないのでここで打ち切りと  
させていただきます…本当にすいませんでした！  
名前は自分で決めます

ではまた…その答えを待っています……

## 第6話 平和な一日(?) (前書き)

どうもセイワです！

今回の話はネタがふんだんに使われているギャグ編です。

それではどうぞ…

## 第6話 平和な一日(?)

4月12日…巧巳の家の前

(巧巳サイド)

「…で、如何して七海がここに居るの？」

その後、パジャマから学生服に着替えた僕は、何故七海が基地こゝに来た理由を聞いてみた。剣二が来た理由は僕に朝ご飯を届けに着たんだと思うけど、

「おにいがニュージエネの事件の第1発見者だつて聞いて心配したんだよ！少しは家の事も考えて…」

はあとため息をついた僕、如何やら七海は僕に説教するために来たみたいだ、隣で剣二が「俺はいいのか？、一応俺も第1発見者だが…？」と言っていますか？

「剣二さんはいいんですよ、剣二さんはほつとしても強いんですから(キツパリ)。それよりも問題はおにいの方ですから！」

逆に化け物扱いされた剣二、まあ否定はしないが(汗)。それはそうと問題は僕ってどうゆう事？

「母さんから聞いたんだけど…、おにいが小学生の時、遠足で来れない事があつて、その日にその遠足のバスが事故にあつたんだつて。幸い怪我けが人は出たけど死んだ人はいなかったんだです。けどお母さんが言うにはおにいが居なかった事で何かが起きた、それだけは言

えるんです」

ああ、あの時か…、確かにあれは嫌な事件だったな。けどあれは確か僕が楽しみにしていた遠足を両親が無理やり休ませたんだよね、で僕はそれを根を持って…、って、

「ちょっと待った、その流れで言ったら七海は僕を監視するために来たの？」

「うん、そうだよ」

うわ…、やっぱりそうだよ。それって外見は子供なのに1児の母でまたの名を「医師免許を持ったB」<sup>ブラジタック</sup>じゃないか。そう思って僕はまたため息をついたのだ。

「大丈夫だろ七海、お前が思っているほど巧巳は強いぞ。…それよりも巧巳と七海、早く飯を食え、学校に遅れるぞ」

「そうそう大丈夫…、ってうわ本当だ、早く食べないと学校に遅れる！」

剣二にそう言われて時計を見るとやばい時間になっていた。そして急いで食べる僕と…

「うわあああん、おにいの馬鹿<sup>ばか</sup>ああああ、おにいのせいで遅刻したら許さないだからね！（怒）」

僕に文句を言っただけ食べる我が妹、七海である…（汗）

それから数時間後…

翠明学園 2 - B 教室 休憩の時間 10:15

「で、朝のホームルームに寝ている剣二を抱えて登校した、朝から大変だな巧巳」

そう言っただけで笑っている炎火達（言ったのは三住君）、光達女子は遠くで笑っている。くそ、こいつ等…僕の苦勞も知らないで（怒）。あれからバイクで登校した僕達（七海は僕のバイクに乗せて）であったが、剣二の悪い癖（寝る事）が出てしまつて、七海は気づいたら居なくなつていたからしたかなく僕が運んだけど、人を運ぶって重労働なんだよ！それなのに（怒）。唯一の救いは不動のおっさんから「大変だったな」って何か同情の目で見られた事位かな。

「で、どうなんだよ、第三のニュージエネの現場は」

そう言っただけで話の方向を変える三住君、うう、昨日の事を思い出さないでくれよ…

「そう…だね、現場は確か…」

どうせ断つてもしつこく聞きに来るだろうし、仕方なく昨日の事を炎火達に話した。

「…？、はりつけじゅうじか磔に十字架？、何だろう、どこかで聞いたことがあるような…？」

話を終えた時、ふと風太が何か心当たりがある様に言った。

「そつえば確かにそうだな、何だろう…何かの曲だったかな？」

三住君も何か聞き覚えのある事も言っているし、どうゆう事なんだろう？

「まあそれよりも…、奴等が現れたって言う点は気になりますね。巧巳、この件については剣二の2人で調査して下さい、これは上からの直接的な指令です。私達は引き続き奴等の撃退に当たりますが、奴等が巧巳達の所に現れたら必ず叩いて下さい」

と氷牙がそう言った。まあ確かに奴等が出てきたって言う時点で怪しいから上も黙っていないだろうけど、まあ念のためだし…

「あ、そうそう巧巳、例のアレ、完成したから後で取りに行ってくれ。お前専用に白波さんと一緒に開発したけど大変だったからな。詳しい説明もそこでする」

と三住君が後半疲れたように言うと、

「って、アレが出来たのか！？よく完成したよなあ」

炎火が直に反応して言ったのだ。まあアレの完成で戦力が上がるって白波さんが言っていた訳だし、…ケ。。。曹に出ているク。。。や、B。。。Hに出てくる涅。。。リとは違い真面目だし…大丈夫だよ  
ね？

「これで巧巳も魔物を倒せるでござるなあ、おめでとう」

そう言っただけを叩く雷丸…うん確かに嬉しい、これからの戦いには絶対に必要だし、僕自身も奴等に脅威って事を知らせないといけな  
いし…

キンコーンカーンコーン

そう考えていた僕の耳に始業ベルが鳴った。はあ、次は何の授業だったけ？

ちなみに剣二はずううううと寝ていました（鼻提灯と涎よだれを垂らして）、頭の上には同じく寝ているシロンも同様。

更に数時間後：

同場所 屋上 昼休み 12：15

「はあ、ヤッパリ剣二の飯、うまい」

そう言って卵焼きを食べる僕、やっぱりうまいなあ、剣二の作ったご飯は。ちなみに屋上に居るのは僕と剣二、炎火に氷牙、風太に雷丸、地可に光、昨日から自前のご飯を持って来ている七海に梨深さん、そして今日、「俺にも混ぜてくれ！」と土下座をしてまで入った三住君の計十一人である。

「うん、そうだねえ、…それにしてもこれだけの料理を1人で作るなんて、光さんは剣二君の家に居候しているって言ったけど、料理を手伝っていますか？」

そう梨深さんが光に質問してきたが、

「とんでもないよ、私なんて今まで料理作った事無いから出来ないの。…前に作った事があるけど大失敗して、剣二に「料理は俺が作るから、他の家事をやってくれ」ってきつく言われたの…ショックだったなああ」

うん、その時の事は覚えている、…うんアレだ、銀。のお。さんの作った。焼きたアレ、て言うか炭だつたな見た目は、味は……アレ？おかしいな？それだけは思い出さない……？

「いやいや、光ちゃん、作らない方がいいよ。それを食べた巧巳、死に掛けた事から」

そう三住君は言った…、うん、思い出した…アレは本当にやばい奴だ、て言うか兵器だアレ、アレを食べたらあの世に逝けるよ、本気で。それを思い出した僕の背中は変な汗で濡れていた。

「そ、そうなんだ…、たはは、ご愁傷様だね、タツクン」

梨深さんがそう言うのと、僕に向かって手を合わせて合掌したのだった。酷いよ…（涙）

「まったくだ、…けどな掃除は逆に散らかすは、風呂は水風呂になつたり熱湯風呂になるはで、家事全般は全然駄目駄目なんだぞ光はま、最近はずっと上達している、っていうか、そうして貰わないとこっちも困る。人は少しずつ成長している、「失敗は成功の元」って言うしな」

剣二は自分の分のご飯を食べ終え光に対しての厳しい判断を下した。（光本人は凹んでいる）

（剣二は自分と他人に厳しいからね、「努力を怠る者は何時まで経っても駄目な者」って口癖のように言っているからなあ。）

そう僕は心の中で思った。と屋上の扉が開いて、その先に居たのは…

「あれ？優愛さん、如何してここに？」

そう、僕が言っただけに居たのは、昨日別れたきりであった優愛さんだ。

「優愛さん？確か昨日の事件で現場に居て、巧巳と意気投合したオタクさん？」

地可がそう思い出して言っただけ、って失礼な事を言っただけじゃない。

「はい、そうです、…そう言えば巧巳さん、昨日の事、覚えています？」

なんか調子狂うなあ、…そう言えば昨日って何か言ってたわけ？

「ってああ、確かパソコンのメールアドレスを教えるって言ってたわけ？なら、はい」

僕は思い出して、昨日の内に書いておいたメールアドレスを優愛さんに渡したのだ。

「憶えて頂いたんですか、有難う御座います」

そう言っただけで頭を下げたのだ。何か照れるなあ。

「ブーブー、おにいはいいいねえ、パソコンだけどメール渡せる人はがいて…、お母さんから携帯電話買って貰うって言うけど、おにいには買ってあげないって言うのかな」

口を3の字にして文句を言う七海…って、

「ちょっと待て、携帯買うつて、僕がこの学校に上がる時には買つて貰えなかったのに、何で七海の時だけ買つて貰うんだよ。おかしいよそれ！」

そう、何で七海が携帯を買うことが重要だという点で僕は怒っている。ちなみに剣二は兎も角、炎火や氷牙、風太に三住君、おまけに携帯に無縁な雷丸まで持っている。つまり携帯を持っていないのは僕のみってことだ。

「はあ、いいいいいよ、どうせ僕は親に携帯を買つて貰えない元引きこもりのオタク野郎ですよ、はあ、星来たん、フヒヒヒヒヒヒヒ…」

(剣二サイド)

「おいおい、巧巳の奴、ショックであの頃に戻っているぞ、如何するんだ七海」

そう俺は七海に言ったのだ。七海には悪いが、巧巳がド。〇見たく落ち込んだ原因を作ったのは自分だから責任を取ってもらわないと。

「ええつと、お、おにい、私の携帯のついでにおにいの携帯を買う事になったから、ね、だから機嫌直してよ」

…まあ、合格点かな。巧巳は携帯を持っていない事をずっと気にしていたからな、その上妹に携帯を持つことになって不満が爆発した

んだろう。

「…え、本当？ヤッフ~~~~！妹に携帯を買うつて、これって何てエロゲー、って感じだな。フヒヒヒ」

巧巳の機嫌は直ったのは良いが、逆にテンションが上がっているなあ、変な動きをしているし。

『剣二、アレは流石に止めるべきではないのではないか？（汗）』（良いんだよ、確かに巧巳は携帯持っていなかったし、少しくらい大目に見てくれ激龍剣）

俺は腰の所で待機状態となっている激龍剣と頭の中で会話（？）をしているいたら、

「ねえ剣二、私にも携帯欲しいけど、買って貰えない？」

はあ、如何やらこつちにも携帯欲しい奴が出てきたよ。しかも「買ってください」って目で語っているし。ま、今月のお金は余計にあるしな、

「明日休みだしな、光用の携帯買いに行くか」

まあ丁度食材も少なくなってきたるし、買い物ついでにって事にしようか。

「でもさこれ、剣二と光ちゃんのデートじゃん、考えようによつては」

隣で茶々入れんな三住（怒）。

「ったく、そんなんじゃないっての。だからお前は「下半身で物を考えている男」って言われているんだ」

「うっせええええ、そんな事ねえよ、ただ可愛い子が居候している剣二が羨ましいだけだあああああああ！！」

「「「「「結局それが本音じゃないか！！だからお前（（三住）（（三住君））は「下半身で物を考える男」って周りに言われているんだろ！少しは自覚しろおおおおお！！！！」」」」」

と三住に対して俺と巧巳、炎火に氷牙、風太に雷丸の6人で総突っ込みを入れたのだ（三住って言ったのは炎火と氷牙と雷丸、三住君って言ったのは巧巳と風太である）。と更に追い討ちをかける者が、

「そうよねえ、アンタ影で「ハーレムを作っている」って噂があるのよ、其処<sup>そこ</sup>ん所は如何なのよ？」

地可が三住にその噂を言ったのだ。まあ確かに外見は良いんだから好意を持っている女子がいるのは確かだけど、まさかなあ、三住<sup>こいつ</sup>にそういう事が…

「違うよ。けど、ハーレムを作るって野望は有るけど」

「って、その噂半分本当だったんかいいいいいいいいい！！」

「三住、駄目だろそれは！！」

「だから「下半身で物を考える男」って言われているんですよ！」

「けど、ココまで馬鹿だったなんて…」

「阿呆の究極体でござる（汗）」

「三住君、それは三次元の話であって、二次元…というより日本は駄目なんだけど（汗）」

「何かアンタって、本当に女の敵ね」

「最低」

「そうですよ！」

「大ちゃん、何時か警察に捕まりそうだねえ」

「いえ、絶対そうですよ」

三住のともでもない暴露した為、上から俺、炎火、氷牙、風太、雷丸、巧巳、地可、光、七海、梨深、そして優愛の順に三住に突っ込みを入れたのであった。お前は何処かの生徒会の副会長か！！そして止めに、

「ガ、ガガガ、ガア」

俺の肩で何か言っただけ息をついたシロンであった。

「？、思っけど剣二、シロンの言っている事分かっているのか？」

そう炎火が言うので一応言っておく、

「まあな、シロン、さっき言ったところを皆に分かる様にするんだ」  
「ガガ」

そうシロンに言っと、どこから出てきたのか木で出来た手持ちの看板を手に持ってこう書かれていた。

「はあ、要は三住は女たらしって事だな、ダメじゃん」

…まあ「知らぬが仏」って言われているからな、知らない方が良くないかなかったか？そう思っていたら三住はさっき巧巳と同じくかなり落ち込んでいた（合掌）

「…シロンって剣二君と同じく厳しいねえ、やっぱり飼主主に似た

んじゃ無いのかな？」

と梨深が俺に言った後何事も無かったのようになり食事が再開したのだ  
った…

そして更に数時間後…

同場所 2 - B 教室 放課後 16 : 15

(巧巳サイド)

「以上が連絡事項だ、週末で遊びに行く時は何人か友達を連れて行動するように！それと部活だが…土日は休みと決定した。今後の部活も終了時刻は遅くて6時とする。他に質問は？」

「ハイ！」

不動のおっさんがそう注意事項を述べた。まあニュージェネの事件や化物騒動で家の人も不安になるから当然の処置だと思うよ。特に七海達1年生は入学して来たばかりだから余計心配するからね。そう思っていた僕の耳に梨深さんの声が聞こえた…、そういえば夢に出てきた声ノイズって梨深さんに似ていた様な…

「咲畑、如何したんだ？」

「あの、聞きたい事あるんですけど？私、部活は如何すれば良いですか？」

梨深さんがそう言ったのだった。確かに梨深さんは一昨日おとといに学校に来たから部活入っていない筈だけど…

「ん、そうだったのか…、そう言えば、剣道部は例年無く入部希望

者が多いからな、まあ去年1年生で全国大会個人戦、優勝した奴が居るからな。そうだろ、鳴神？」

そう、去年の夏休みで剣二は先輩達に混じって出場し、幼い頃から剣道やっていた為、物凄い強さで全国大会個人戦を優勝したのだ。また個人戦だけではなく、団体戦にも出場していて、剣二の奮闘もあり団体戦も全国優勝したのだった。去年の3年生が抜けても同様で、剣二の練習は厳しいが、剣道部全員一生懸命頑張っている。ちなみに僕も剣二の勧めで剣道部に入っているが、剣二に1本取れないのけどね（笑）。

とゆうより剣二は恐らく、何処かの海賊狩りの三刀流や奥州筆頭の六爪流、何処かのマフィアの雨の守護者や死神代行、今はとあるシヤーマンの持霊となった侍や人斬り抜刀斎の技が使えて、さらに生身でも、か。は。波や霊。螺。丸や風。拳に眼。砲が出来て、北。神。や六。等の体術も習得するし、通称「堂島の龍」とよばれる極道やヒモでパチンコ好きのヤクザなヒーローと互角に戦えるかも

（汗）

「ええつつ、剣二君ってそんなに有名だったんですかあ！？」

「ああ、因みに西条や水舞、三住も剣道部だぞ」

不動のおっさんの言う通り三住君も剣道部に所属している。

「まあ、見学は自由だから今日、見に来れば良いじゃないか？。以上だ」

「起立！、礼！、解散！！」

学級委員である地可がそう言った後、僕達は教室から出て行った…

その数分後…

同場所 武道館 16:30

「上下素振り、30本、始め!!」

「1!2!3!4…」

で、ここは剣道部が使っている武道館で隣には柔道部や空手部が使っている武道館がある。一応僕は剣道着に着替えて準備運動の後こうやって素振りをやっている。ちなみに女子も入っていて、三住君のファンもここにいる事が多い。と、

「すみません、見学に来ましたああ。ビシィ!!」

そう言つて敬礼したのは、梨深さんである。ヤッパリ気になって来たのかな…

「ねえ剣二君、あの子1年生?体験入学は来週からよ?」

如何やら3年生の女子が気になっていたのか剣二に聞いてみたのだ。因みに剣二の立場は副部長の肩書きだが、事実上仕切っているのは剣二である。

「あ、多分俺のクラスに転校してきた子ですよ。今日、見学するかつておっさんに言われたので。おい巧巳!この素振りが終わったら梨深を適当な所に座らせて…<sup>そこ</sup>って其処!!声が小さい!!もう一回最初からやり直し!!!」

うわあ剣二、先輩でも容赦ないなあ…そう心の中で思った僕は、声をちゃんと出してその素振りが終わると梨深さんの所にやって来たのだ。

「あ、タツクン、本当に剣道やっているんだあ、…それにしてもすごい熱気ねえ」

そう僕の方を向いて感想を言った後、武道館の方を見てこう述べたのだ。

「まあね、剣二が来てから剣道部は一躍有名いちやくになってね、結構厳しいよ。因みに氷牙も剣道経験者でねえ、剣二の次に強いんだよ。…まあ僕や三住君は兎も角他の2年生や先輩の3年生はあの2人に勝てないけどねえ」

そう言つて僕は梨深さんに話した時、

「師匠おおおおおおお！！」

「お前らあああああああ！！」

と隣の武道館から暑苦しい声が聞こえてきたのだ。

「ね、ねえ…さっきの声、炎火君の声だったよねえ？」

そう頭に冷や汗を浮かべた梨深さんは、確認のために僕に言った。

「うん、そうなんだよ。梨深さんは見たこと無いけど、アレが炎火の姿なんだ。熱血漢丸出しで大声で叫ぶし、口癖が「熱き心に不可能と文字は無い！」とか「極限！！」などとてもなく熱いんだよ。あ、因みに聞こえて来たのは空手部の方だから」

と梨深さんに簡単に説明したけど、絶対炎火はどっかの宇宙人のごとく顔面から炎を放出したり、どっかのお館様のごとく心頭滅却し

たらマグマも涼しく其処<sup>マグマ</sup>から出て普通だと思つ。…と言うより居るだけで熱いんだよねえ、炎火つて…

「ねえそれより何で炎火君、何で師匠つて呼ばれているの？」

「ああ、それはねえ…、1年生の時、当時の空手部は不良の集まりで担当の教師もグルになつて悪さをしていたんだ。それを知つた炎火は入部初日に、当時の2、3年の先輩をボコボコにした揚句、当時の担当教師を大怪我させる大乱闘が起こつたんだ。学園の方も空手部に頭を悩まされてね、それが起こつた後、空手部の2、3年生は退学、担当教師も辞めさせたんだ。でそれを起こした炎火はそのまま部長になつただけで、乱闘騒ぎで去年の大会は出場停止になつてねえ、でも炎火はめげずに1年で部を盛り上げて何時しか師匠つて呼ばれるようになったんだ」

まあその乱闘騒ぎに剣二が駆けつけて暴れたのは言うまでも無いけど…

「そうだったんだ…、けど炎火君つて正義感があるね」

「まあ、剣二と同じく幼い頃から空手をやっていてね、僕も少しぐらい炎火から教わつたんだよ。あ、ここで見ててね」

そう言つて梨深さんを僕達が見える所に連れて行き僕はそこから離れたのだった。

でそれから数時間後…

同場所 同場所 17:55

「礼！」

「「有難う御座いました！」「」」

そう言つて全員は正座したまま剣二に向かつて座つたまま礼をしたのだ。

「担当の先生から聞いていると思うが、土日は休みになった。しかし我が剣道部は休み中は各自素振り100回はするように、それと体力づくりにも取り組んでくれ。以上だ」

剣二は休みについての事を話した後全員が立つて帰る準備をしたのだ。もちろん僕もだけだ。

「巧巳、後で理科準備室に来てくれ」

そう三住君が耳元で言つたので僕は頷いた。と、

「タツクン、一緒に帰ろう」

後ろから梨深さんの声がしたのだけど、

「ごめん、ちょっと白波先生の所に用があるんだ。校門の所に待つてくれないのかな？」

そう僕は言つと着替える為に更衣室に行ったのである。

それから数分後：

同場所 理科準備室 18：10

「……以上がこいつの使い方だ。こいつで変身する時は今までとは違う姿になるかもしれないが、何時も通りに戦える」

そう言ってくれたのは、髪の毛が金髪で今は白衣を着ている男性は  
白波 鋼一しるなみ いっいちさんで、三住君が話していた人はこの人である。僕の前  
には龍の顔をしたブレスレットが置かれていて、その隣には数本の  
鍵マダンキーが、更に隣には白いマダンホルダーが置いてある。

「白波さんに手伝ったとはいえ、これを制作するのに苦労したよ。  
なんせ魔弾核マダンコアの状態から完成まで徹夜の連続だからなあ、絶対なん  
か奢あこれよな！」

「三住君は遅くても10時位に帰しているが、徹夜までは俺がやつ  
ていたぞ。けど、休みの時には本当に徹夜をしてくれたからな」

白波さんの隣にいた三住君が言った事に対して白波さんがつつこん  
だのだった。三住君、帰りにご飯奢あこるね、そう僕が心の中で誓った  
後、龍のブレスレットを右手首につけたら、

『よう、俺の名は蓮龍拳れんりゅうけん。お前が俺の主か？』

と蓮龍拳と名乗った龍のブレスレットは目を赤く点滅して僕の頭の中  
に直接語りかけてきた。そういえば剣二も激龍剣と会話する時に  
頭から直接に語るって言っていたっけ…

「そうだよ、僕の名前は西条 巧巳。よろしく蓮龍拳」

そう言っ僕は蓮龍拳の顔を触ったのだった。そして横にあるマダ  
ンキーを一本残して取り、マダンホルダー差し込んだのだ。差し終  
えた時、マダンホルダーが光の球になって蓮龍拳の中に消えたのだ  
った。

それを確認した僕は、最後に残ったマダンキーをズボンのポケット  
の中に入れてこの部屋から出た。

それから数時間後…

巧巳の基地<sup>ベース</sup> 21:30

「それっ、それっ。よし、これで終わりだっ」

『おお、巧巳って凄えな。疾風迅雷の2つ名は伊達じゃないな』

パソコンでエンスーをやっている僕に対して感想を述べる蓮龍拳。  
あの後蓮龍拳の相棒となった僕は剣二がバイトをしているレストランに行つて三住君に夕御飯を奢つた（もちろん梨深さんも一緒だったため彼女にも奢る事になったけど）。その時に剣二から蓮龍拳とのコミュニケーションをとるには自分を知る事だつて言われてこれ  
をやっている訳。一応他にも僕の好きなブラチューなどのアニメを見ることになったんだけどね。例えばと。。。ラやデ。。。ラ！！、  
涼。ハ。。。シリーズなどなど…

「ん？メールだ、何だろう？？」

次にアニメを見るためパソコンをシャットダウンしようとした時、  
メールが来たのだ。差出人は…優愛さんだ。

『なにになに…、「巧巳さん、急なメールですいません。明日休みですし、同じオタク同士遊びに行きませんか？もし行けるんなら明日10時に渋谷駅の正面に来てください。そこで落ち合いましう』…だつてよ。どうするんだ？巧巳』

そうメールの内容を読んだ蓮龍拳は僕に語りかけてきたのだった。

「ううううん、まあ明日確かに時間あるし、剣二も光と一緒に何

処かに行くことだし、まあココは行きますか。けど僕はあんまり三次元の子には興味ないけどね」

僕は明日優愛さんの誘いに乗り、そのままパソコンの電源を切ったのだ。さて何を見ようかな？よし「会。は。。。様」でも見ようと…

だけど…この時僕は想像も付かなかった。彼女、楠 優愛さんは心に大きな傷があったことを…、そしてそれが僕を更なる混沌カオスを生むことになるなんて、この時の僕は微塵も感じていなかった…

次回に続く……

## 第6話 平和な一日(?) (後書き)

いかかでしょうか？

ネタについての質問も受け付けています。

わからないことがあったら感想の所にドシドシ送ってください。

それではまた…、感想を待っています…

## 第7話 謎が謎を呼ぶ（前書き）

どうもセイワです！

最初に言っておきたいことがあります。

優愛の巧巳の呼び方が巧巳さんじゃなくて西条君でした。すいませ  
んでした。

気がついた人もいるかもしれませんがキーワードに????があつた  
のを見たと思いますかその????が分かります。

それではどうぞ…

## 第7話 謎が謎を呼ぶ

### 第7話

4月13日 9:55 渋谷駅正面前…

（巧巳サイド）

『で、一体何処にいるんだ？その優愛っていう奴。巧巳と同じ「オタク」なんだから巧巳と同じなのか？』

右手首についている蓮龍拳は失礼なことを言ってきたのだ。因みに僕の服装は黒い長袖のジャージを上に来てその下に赤いTシャツに青いジーパンと私服に着ている。財布はちゃんとズボンの後ろについている。

（違うよ、優愛さんは一昨日会ったばかりだけどいい人だったよ。後輩である僕達に対して敬語で話すし…、因みに蓮龍拳、オタクって言うけど僕や優愛さんは「アニメオタク」って言われていて他にも「鉄道オタク」や「歴史オタク」など種類があるんだ。ハイこれ重要だよ、後でテストに出るからね）

『ふうううん、色々あるんだな。一応「オタク」って種類があるだけは分かった。けど何でテストなんだ？』

蓮龍拳との心の会話（漫才？）をしながら左手首についている腕時計を見ていてもうすぐ10時になろうとした時に、

「あ、いましたあ。よかったあああ、西条君、来てないと思いました

たよお」

後ろから声が聞こえてきたので振り向くと白いワンピースを着ていて手にカバンを持っている優愛さんがいたのだ。

（か、可愛いなあ…、はっ！イカンイカン！！僕には星来ちゃんいう僕の嫁がいるのに。あやゆく孔明の罠に掛かりそうになったよ）  
『巧巳…駄目だコイツ、相棒として何とか修正するか。おいせつかく誘いに乗ったんだ、ここは漢らしくいけ巧巳！！』

心の中でそんなやり取りをしていた僕達に、

「あのお、早く行きましょう。もうすぐライブが始まりますし」

と優愛さんはそう言ってライブのチケットを僕にくれたのだ。どうやらこれを見に行くために誘ったらしい。

「あ、そうなんですか、…ってこれは応募者から抽選でいけるライブのチケットじゃないですか！僕も応募したんですが落選してあの時は悔しかったですよ。それをもらえるなんて嬉しいです。ウヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

ああ、優愛さんが天使に見えてきたよ。自然と笑いが止まらないよ（笑）

「あ、あのお（汗）。人がたくさんいる所ですのでそれを止めて貰えないでしょうか？」

優愛さんがそれを見て若干引いていたが、周りの人にいやな目で見られないために注意したのだ。

「ああ、すいません。ちょっと浮かれていました。さき、早く行きましょう、ライブが僕達を待っていますよー!!」

そう言っ僕は優愛さんの手を握ってライブ会場に急いだ。だつて…そのライブにはブラチュウのオープニング曲や星来ちゃんが歌っている曲も入っているしい♪

『はあ、コイツに主を認めた俺もなんだが、早くも不安になつてきた(汗)』

その頃…

とある電化製品所 10:30

(剣二サイド)

「ううううん、剣二い、どれが良いのかな？」

見本の携帯電話を30分ぐらい眺めている光と、それを見ている俺一応光用の携帯を買うのだが依然本人はどれを買うのか迷っているのだ。俺は蒼いジャージと青いジーンパンを光は赤い服と黄色のスカートを着ている。

(まあ一応性能をきちんと説明したが、機能が多いと分からないが逆に少ないと光が「何これ、ふざけないでよ!」って怒るからなあ。仕方ない、ここは店員に聞いて…)

そう思っ店員を探そうとした俺の目に入ったのは…、

「ん、アレは…七海か？」

俺が見たのは光と同じく携帯を眺めている七海だった。そういえば昨日、七海が携帯買うつて言っていて、ついでに巧巳の携帯も買うつて言っていたな。もう自分の携帯を選んで巧巳の趣味にあった携帯を探しているのか。

「あ、剣二さああん、ココで何をしているんですかあ」

どうやら俺の視線を感じたのか、七海は俺の方を向いて声をかけると俺の方へ歩いて来たのだ。

「ああ、昨日言っていたけど、光の携帯を買いに来ただけ…、あいつ買つのずいぶん悩んでいてな、かれこれ30分掛かっているんだ」

俺は七海にこれまでの経緯いきわづを語ったのだった。

「そうなんです…、そういえば剣二さん、おにいが何処にいるかは知りませんか？」

七海は納得しながら俺に巧巳が何処にいるかを質問してきたのだ。

「巧巳か？あいつなら朝飯を届けた時にはまだ寝ていたからな。今も基地ベースにいるんじゃないのか？」

俺は今朝のことを話して、巧巳はおそらく其処にいる事を言ったのだ。まああいつは休みの前日に予約していた録画を見ているか、パソコンでゲームをやっているかだから大体深夜2時くらいまで寝ないからな、自然と遅く起きるんじゃないのかな。

「だけど剣二さん、其処にはもう行ったですけどおにいは何処かに行っているみたいでいなかったんですよ。もうう、せっかく携帯と一緒に買おうって誘うと思ったのにい、一体何処にいるのよおにい  
はああああああ！！（怒）」

しかし七海が言うには来た時には何処かに出かけていたらしい。つて七海、怒るのは分かるが大声を出すなよ、他の人もいるし迷惑だし（汗）。人に迷惑をかけるのはさすが兄妹だな…

「まあ、何にしても巧巳の事は心配なのは分かる。けどな、昨日も言ったがあいつに関しては大丈夫だ。不良に絡んできても逆に返り討ちできると思うぞ」

俺は七海に心配するだけ無駄とそう言ったのだ。その根拠は、

（巧巳が1人で出かけることは、昨日の内に分かっていたからな）

その前日

剣二の家 22:00

「何？優愛の誘いのメールが来て、その誘いに受けたのか」

そう言っただけ俺の家の電話にかけて来た巧巳に対してそう答えたのだ。俺の家は武家屋敷で、江戸時代の頃に薩摩で鳴神龍神流なるかみりゅうじんりゅうという流派の道場でやっていた祖先が渋谷しぶやに引っ越した時に建てたって幼い頃に祖父ちゃんに教えてもらった。因みに鹿児島の実家は健在で正月などに帰っている。

「そうなんだよ、確かに明日僕暇だし行ってもいいかなって思っているんだ。って剣二、優愛さん呼び捨てにしないでよ。一応先輩だよ」

電話越しに会話している巧巳の声を聞いていた俺であった。因みに俺が今着ているのは剣道着で、家にいる時はそれを着ている。因みに何着か持っていて、其々寝巻それぞれき用など分けている。

「はいはい、分かった分かった、けどな例え年の差があろうがそれを威張っている奴は大嫌いだってことは巧巳も知っているだろう。まあ話を戻すが今後のことを考えると、一応息抜きも必要になるかな。俺も明日、用事で出掛けているから本格的な調査は明後日ってことにしよう。じゃあ切るぞ」

そう言っただ俺は電話の受話器を下ろそうとしたら、

「ああ、そうそう、七海には内緒にしてくれよ。絶対付いていくって言いそうだから、何とか誤魔化してよ。じゃあ頼んだよ」

そう言われてあっちで切って、俺は電話の受話器を下ろした。

「剣二いいい。私はお風呂上がったから、お風呂入ってもいいよ  
おおお」

かれこれ30分くらい風呂に入っていた光が風呂から上がって来たので俺は風呂に入りに入ったのだった。

で現在…

「…さん、剣二さん。どうしたんですか、さつきからばおっとして不意に七海の声が聞こえてきた。どうやら昨日の事を思い出していたのだろっ。そんな訳で誤魔化した俺。」

「ああ、大丈夫だ。それよりも七海、ちょっと頼みがあるんだけど。光に携帯の選び方を教えてくれないか。女の子同士なら分かるかなって思っ。その代わり、巧巳の携帯は俺に任せてくれないかな」

まあ確かに巧巳に合いそうな携帯は判るからな。まあ、あいつに貸しをつくるのも悪くないか。

「あ、じゃあ宜しくお願いしますね。光さああん」

そう言っ。光の所に行く七海を見送った俺は、巧巳に合いそうな携帯を探しに歩いた。

それから数時間後…

とあるレストラン 12:30

「うううん、美味<sup>おい</sup>しいいいい。ここの料理本<sup>おい</sup>当に美味しいねえ」

喋りながらフォークとナイフでステーキを切っ。食べている七海。あれから巧巳や光の携帯を探すのに時間が掛かったが何とか買うことが出来たのだ。その後バーゲン中のスーパーに行っ。食材の買い物をしたが、中々いい具材が手に入りやすかったけど競争率とんでもなく高かったなあ。で色々あっ。12時を過ぎたので昼飯を食べる為、俺がバイトで来ていたあるレストランに来たのだが、

「オイオイ、喋るか食うかどちらにしろよ。それだと…」

手元にあるステーキを切っていた俺は七海の食事態度に注意をしている時、

「う、うつつつつうううう」

顔色を真っ青になり、何やら呻き声を出して咽喉のどに手をやり、更には胸を叩いて苦しむ七海。

「って、言っている側から咽喉に詰まっているじゃないか！水、水！！」

そう言っただけ俺は、水の入ったコップを七海に渡して水を一気に飲み込んだ。

「ぷはあああああ、死ぬかと思ったあ」

息を吹き返した七海はそう言ったのだ。

「七海ちゃん、御飯は味わって食べる、美味しいからって早く食べると胃に悪いし、肥る原因になるんだって剣二が言っていたよ」

光は上品にステーキを切りながら七海に俺の教えを言った。

「うう、そういえば、この頃体重増えたなあって思ったんですがそれが原因だったんだ、勉強になります（汗）。それにしても光さん、ステーキ切るの上手いですねえ、まるで何処かのお姫様ですねえ」

七海が最近肥ってきた原因が分かって反省と勉強の学んだ後、光の

姿を見てそう感想を述べたのだった。

「え、ええ、そうなのよねえ、何でかなって私も疑問に思っていたの」

光は多少焦っていたが、何とか誤魔化した。

「へえ、そうのですか。けどいいなあ、お姫様って女の子の憧れですよええ。光さんは子供の頃の夢は何だったんですかあ」

「ええつとそれは…」

光は俺に「助けて」と目で語っているが、光には悪いが女同士の話に発展して男の俺が邪魔になるため、耳で聞きながらステーキを食べたのだ（ひでえよ剣二by作者）。

「おつ、美味<sup>うま</sup>くなっているなあ。俺が来なくなった後も頑張っている様だな」

味を確かめながらこのレストランは何時かは繁盛すると、俺は確信した。

それから数時間後…

とある通り 14:00

「それじゃあ、私はここで。今日はありがとうございました」

そう言って手元に何個かの袋を両手で持っている七海。あの後、七海は服を買って言って、ついでに光の服も買う事となり近くの服屋で買う事になったが、店を出てきたのは一時間後だった（女の人

って何で大量の服を買うのか、また服を買うのに時間が掛かるのかは作者には理解できません。因みに俺も服を強制的買わされた。

「剣二さん、色々ありがとうございます。光さんも何時か私のお奨めな所に一緒に行こうね」

「ええ、いいわよ…」

そんな会話をしていたが、光の顔にはさっきの質問攻めがまだあるのかと、ゲンナリと肩を落としていた。

「まあ頑張りなよ、じゃあな、また学校でなあ」

「ま、また学校でえ」

右手に俺用の服を持っているので左手で光の肩を叩いた後、別れの言葉を言って俺達は七海と別れた。遠くで七海が「おにいの馬あ鹿ああああ」と叫んでいたが…（汗）

一方その頃…

とあるシヨップ 同時刻

（巧巳サイド）

「へえええくしゅん！」

本日何回目となるくしゅみをした僕。うう、何で今日に限ってくしゅみが出るんだろうかなあ。花粉症かなあ。それとも風邪？

『いいや、さつきサーチしたがこの辺り一帯は花粉率0%、また巧巳の体温に異常は無い。この事から推測すると多分だが誰かがお前

の事を噂をしているんじゃないのか？」

頭の中に聞こえてきた蓮龍拳がこの辺りをサーチして分析した結果を教えてくれた。まあ噂はおそらくだけれども七海辺りかな。

「西条くううん、こっちに来てくださあい。ブラチューの新刊が出ていますよあ、しかも初回限定版で…」

「何っ、ここに初回限定版があつたのかああああ、うおおおお、今日の僕は猛烈に感動しているうううう」

他の人たちがいるけど気にしない。なぜならココには初回限定版があるからねえ。それには限定の星来たん（本名天之河<sup>あまのがわ</sup>星来<sup>せいらい</sup>）のフイギア（制服バージョン）が付いているんだよねえ♪

『なあ巧巳、お前のくしゃみの原因を調べようとした時に分かった事なんだが…あの優愛という女のバックの中に何やら資料があるんだ。しかも大量にな』

心から喜んでいた僕に蓮龍拳からの報告に僕は驚いた。しかしココで声を出したら怪しませるので心で会話した。

（な、何の資料なの。其処まで分かる？）

『いや、其処までは判らなかった。ただ俺が言えるのは、優愛という女、絶対何かを隠しているかもな』

ま、まさか僕の正体がばれたんじゃないよね。そんなたった一昨日で調べるはずが…、あ、けど変身した時に見られたとか、

「西条君？何かありましたか？」

そう考えていた僕に優愛さんが声をかけたのだけど、何か隠しているって分かったら何か不気味だねえ。よ、よし、こうなったら、

「あ、あのう、優愛さん少し聞きたいことがあるんだけど、いいですか？」

意を決して僕は優愛さんに話を聞くことにしたのだ。因みに出る時にはブラチューの本を買ったけどね。

それから約30分後…

代々木公園…

「で、話というのは何ですか？」

そう言いながら前の方で歩いている優愛さん。うう、やっぱり話しづらい、けど…

（今のお前のままでいいのか？勇気を出せ、一歩前に踏み出せ、その一歩が新しいお前を創る）

不意に思い出した剣二の言葉、確かに最初会ったときにこの言葉がなかったら今の僕はいなかった。だから僕は、その一歩を踏み出す。

「先輩、一昨日の事で話があります」

さつきまで歩いた先輩はふと止まったのだ。続けて僕は、

「僕はあの時には剣二と一緒にコンビニにいました。けれども貴女は何故あそこにいたんですか？誰かを待っていたんですか？それと

も…」

僕は一昨日の自分のアリバイを言った後、僕の考えを優愛さんに言いその答えを待っていた。

「ふううん、その事ねえ。やっぱり気なるんだあ。

ただどあなただって隠してることあるよね？、本当はもっと時間をかけて調べたかったんだけど、バレちゃったからしょうがないよね。あなたに聞いてほしい話があるの。

聞いてくれるよね？聞かないなんていわないよね？あなたは聞くべきよ。

聞いて？、聞くでしょ？、聞かないなら…」

ひいいひいいひいいひいい、ふたを開けたら何かでたあああああああ。病んでる、病んでるよこの人おおおお。はっ、これはぞくに言う「ヤンデレ」ではないのか？

『いや、ただ単に病んでるじゃないのか？ん、この反応は…』

蓮龍拳のツツコミ（？）に耳を聞いていたけどあえて無視、だって目の前には…って、

「優愛さん！危ない！！」

そう駆け出し優愛さんを抱えそのまま滑り込んで奴の股の下をくぐった。

「な、なななななな何ですかあれええええええええええ！！」

優愛さんがそれに指を指して絶叫した。まあ普通驚くよねえ、人間

の様に二本足で立っているカマキリ蟷螂は。

「まああれですよ、世間が騒いでいるっている化け物ですよ。さあ逃げましょう」

僕は優愛さんをお姫様抱っこして立ち上がり全速力で逃げた。

「巧巳さん、あれを見て何で驚かないのよ！普通驚くでしょ！？それに何で速いのよ！？あなた本当に人間なの？  
答えて、答えなさいよおおおおおおお！？」

軽くパニック状態になっている優愛さんは僕についての疑問を立て続けに言っている。

「ああ、その事ですか。あれはゲームでも見た事ありますし、まあ慣れですよ慣れ。それと足が速いのは剣二に鍛えた結果です。人間鍛えるとかめはめ波も撃てますよ。それよりも優愛さん少し重いですよ、これ始めてやりましたけど少し痩せた方がいいですよ」  
「納得いきませんよ！？それに要らん事を言うなああああああああああ」

優愛さん、殴らないでよ、痛いし走るのに邪魔になるから。そう考えていたら…

「巧巳君、何で走っているの？ってアレが原因かあ」

気付いたら隣で自転車を走らせている赤いロングの髪の女性が僕に話しかけてきたのだ。

「葵さんこそ、何やっているんですか？。あ、この前やっていた花

屋がさつそく潰れたんですかぁ」

「ち・が・う！、花の宅配をやっているその帰り道！剣二といいあんなといい、ム力つく事を言うのね（怒）」

「失敬な、僕は剣二と違って…ってそれよりも僕はあいつを引き付けますから彼女を頼みましたよ」

「それはいいけど、如何するつもり、このまま走っていてもらちが明かないわよ」

「それは、こうするんですよ！！」

そう会話をして近くの木を使って反転し、その勢いを利用した飛び蹴りを蠅螂の顔面に叩き込んだのだ。

「なるほどね、ヤッパリ剣二と同じ思考を持つてるねえ（汗）…。じゃあ私はこの子を連れて逃げるね」

そう言いそのままどこかに逃げる葵さん（自転車は置いて）と、それに手を引っ張って何か叫んでいる優愛さん。

「さてと…」

完全に逃げたのを確認した後、僕は右手を前につけ出しこう叫んだ。

「僕達の初陣だよ、蓮龍拳！」

その瞬間光を放ち右手を覆う手甲になった。けどこれって龍騎の召喚機に似ているな（汗）。まあ気にしたら負けか（開き直った）。

『イデヨ、ワガチュウジツナルツカイマドモ！』

そう言っただけからジャマイマが出てきたのだ。って蠅螂が喋った

あゝ（。んゝ）、そう思った読者のみなさん。まだまだだね（  
ーゝ）。」

『はいはい、早く変身だぜ相棒。さっきからうずうずしているからなあ！』

そう頭の中で叫んでいる蓮龍拳、分かっているさ、そんな事はあ。

「リュウレンキー、発動！」

ズボンの中に入っていた鍵を取り出し蓮龍拳の口の辺りに差し込み、回して押し込んだ。

『チェンジ、リュウレンドー』

蓮龍拳がそう言うのと拳に光が集まりだして僕は叫んだ！

「蓮龍、変身！！」

そう言うて僕は蓮龍拳を上に掲げた時、光が天に登り…その光が龍の形になった！！…ってやっぱり剣二とは違うなあ龍の形…そしてその光の龍は僕に向かって行って、僕の中に入って行った。その瞬間光が放ち僕の姿は…、黒いボディースーツに赤い鎧、左手と両足に龍の模った籠手とレガールがついて、肩に鎧と同じく赤い円状の肩のアーマーが付いた。顔には赤い複眼に龍を模った兜が、そして赤いマフラーが首に巻いていた。そして僕はこう言った。

「睡蓮すいれんの花言葉は、「優しさ」と「信頼」。これらを侵す者は許しはしない！リュウレンドー！来・陣！！」

そうこの姿は僕の新たな姿、リュウレンドーだ！っておかしいかなこれって？

『アラタナマダンセンシノヨウダナ。カマワンヤレ、ワレラガイダイナルダイマオウサマノフツカツラジヤマスルモノドモハミナゴロシダ！』

そう蠅螂怪人が言った後、ジャマイマが突っ込んできた。けどね、そんなのはワンパターンだよ！

『ギジャアアアアアアア』

ジャマイマが持っている短剣をかわして後頭部に回し蹴りを叩き込んだのだ。

「それじゃあ、続けていくよ」

僕は左腰にあるマダンホルダーを回してそのマダンキーを取り出した。

「ソードキー、発動！」

そのキーを蓮龍拳に差し込み、回して押し込んだのだ。

『チェンジ、ソードモード』

蓮龍拳がそう言ったのを確認した後、僕は首に巻かれているマフラーを右手で持った時、マフラーが炎に包まれてその炎を払うと、鰐つばが付いていなく、黒い柄つかに炎の紋章が描かれている日本刀を手に持っていた。これがさっきのマフラーに変化した刀「炎牙えんが」である。

『ナ、ナンダソレハア』

螳螂怪人が驚いていたが僕は聞いていなかった。何故ならすでにジヤマイマに切りかかっていたからだ。体術と剣術であつという間にジヤマイマは全滅したのだ。

「残るのはお前だけだ」

僕は螳螂怪人を睨み付けて言ったのだ。くうううう、言いかつたんだよねえこの言葉。しかも前に変身した時よりもパワーが上がっているし♪

『フ、フザケルナアアアアア』

つて有頂天うちようつてんになっていたら突進してきたよ、あの螳螂怪人。けどね、剣二曰く「冷静さを失ったら負け」だよっ！

「はあっ」

と気合一閃、両手の鎌を切り落としたのだ。

『ソ、ソナバカナア…、グハアッ』

唯一ゆいの武器であろう鎌を切り落とされて啞然あぜんとしている螳螂怪人に対して、腹に蹴りを叩き込んで無理やり距離をとらせたのだ。

『止めといこうぜえ、相棒っ』

蓮龍拳が言ったけど僕は既に、左腰にあるマダンホルダーを回して



「ええっと、葵さんと優愛さんは何処にいるんだろう」

あの後変身を解除した僕は、葵さん達を探しに公園を自転車を押しながら歩いていた。と、

「だ・か・ら、貴女は誰なんですか。巧巳さんと知り合いだと思いますけど、私は知る権利があると思いますけど」

ってこの声は優愛さんだ。もしかして葵さんと言いつ争っているのかあ。うう、何か出にくいなあ。

「まあ、元カーレーサーでファッションモデルが、花屋の店長をやっているって言っても信じないだろうからなあ」

そうそう、その通り…はっ、こ、この声は…

「よう、久しぶりだな、巧巳」

もしかしてと思い首を回してみると、茶髪に首にカメラを左手に持っていて逆の手で挨拶をしている人は僕の知っている人で…

「朔哉さん、如何してここにいるんですか、っていうか一体何処から現れたんですか!？」

そうこの人は加門かもん さくぢ朔哉しんしゅつきほつでフリーのカメラマンや記者をやっている人なんだけど、神出鬼没でネタがある所、火の中、水の中、草の中、森の中っていう感じで何処からでも現れる人なんだよねえ。

「まあ俺のキャチフレーズは「謎の記者&amp;カメラマン」だから教えるわけにはいかないけど、まあお前と俺の関係だ特別に教

えるぜ。たまたま歩いていたらお前が戦っているのを見てな、一応写真に撮った後お前を尾行おっこうしたって事だ。それにしても葵の隣にいる子は、楠 優愛かあ、あの事件を調査するって聞いていたけど、何か掴んだのか？」

戦っている時に逃げなかったあなたの根性は称えます。けど朔哉さんが言った言葉が気になった。優愛さんが何かの事件を調べているって。

「ああ、ここ最近発生している、渋谷二ユーージェネレーションの狂気だ。最初の事件「集団ダイブ」で彼女の双子の妹、楠 美愛くすのき みあが被害者の1人だったんだ。俺もその事件を書く時に知り合ったんだが、その後も度々俺の方へ来る様になって、自分で調べてるって言うていたな」

…僕は彼女のつらい過去を垣間見た。けど何で僕の事を調べるって思ったんだろう？その事を聞き出すために僕は彼女に聞こうとした。

「？、あ、巧巳君…何でアンタまでいるのよ」

葵さんは僕の姿を見た後隣についてきた朔哉さんの顔を見てげんなりとした。

「何だよ、俺がいたら何かが起きるわけじゃないだろ。それよりも優愛、何か掴んだか？」

朔哉さん、アンタ本当に肝が据わっていますねえ。

「あ、朔哉さん、その前にこの人は…」

優愛さんが疑問に思っていた葵さんについての事を聞こうとした。

「何だ知らないのか、かつてカーレースで連戦連勝を誇り、かつフアッションモデルとして活躍していた飛鷹ひだか あおい 葵その人だよ」

ああ、言っちゃたよこの人…、おそろくこの後は、

「え、 えええええええええええええええええええええええ  
ええええええええつつつつつつつ！？」」

優愛さんは驚いて大声を出した。その声は木に止まっていた鳥さえも驚いて飛び立ったほどに。因みに僕や葵さんに朔哉さんの3名は耳を両手でふさいでいました。余談ですがこの時、この辺り一帯に震度1が観測されたのが明日の新聞の端に乗っていた。

数分後:

同場所

「すいませんでしたあああああ」

で、土下座しそうな位頭を下げている優愛さん。そりゃあしょうがないよ、目の前には大物有名人がいて、さっきまで言い争っていたからねえ。

「いや、あのねえ……これは慣れているから、つて巧巳君に朔哉！あ  
んな達もなんかフオーしなさいよ（怒）」

うう、こっちに飛び火が移っちゃたよう。

「まあ、それはおいとこうぜ。それよりも何か掴んじゃなかったのか？」

おお、朔哉さん、ナイスフォロー。

「ああ、そうでした。西条君、あなたには予知能力がありますか？」

え、何でそんな事言うの。僕にはそういう能力は無いんですけど。

「ええ、私もさっき思いましたが、どうやら私の思い過ごしでした。実はここに予知能力がないと納得いかない画像データがあるんです。それはあなたも持っているものです」

そう鞆から取り出したものは…三日前、「將軍」から送られてきたあの画像だった。

「ええ、これは一昨日私とあなたが見た殺人現場です。この画像はあなたが前に使っていた@カフェのroom37で拾ったものです」  
僕は先輩が言った言葉が信じられなかった。@カフェのroom37は僕がたまにいる場所で、一ヶ月前ぐらいから使われない所だった。

「そしてこれがその時に使用したチャットです」

そしてそのチャットを見た、隣で葵さんと朔哉さんも見ている。

「っていつか、どうやって入手したの？これ？？」

「ん、これって…」

葵さん、そこに突っ込むですか（汗）。けど朔哉さんが何かを見つけたようだ。特に変わったところは…そう思った時僕はある事に気が付いた。

「このログ、変ですよ。ナイトハルトと將軍の発言時間が前々かみあってないですよ。それに気が付いて一応西条君のメールを確認したらナイトハルトが西条君って分かったんですよ。けどその時間帯で西条君は鳴神君と一緒にコンビニにいたことですから白でしたけどね」

そうこの時間帯は僕はコンビニにいた時間だ。なるほどメールを交換ってこの事だったんだ。

「事件当日、私はこの事に気が付いて犯行現場に来たんです。そこなら犯人に会える。そう思っていたら…」

「すでに殺されていたと…そういう事ね」

うう、何か剣二と同じことを考えたんですね、優愛さん。

「その第3の事件「張り付け」の被害者のことなんだが、半年前から渋谷のG E レートが大きく変化しているって主張していた太田教授であることが分かったんだ」  
おおた

朔哉さん、ホント何処から仕入れてきたのそのネタ（汗）。けど、

「あ、あの朔哉、そのG E レートって何？」

葵さんナイス、何だろうそのG E レートって。

「ああ、G E レートっていうのは、「Gravitation E

r r o r R e t e」、訳は「局所的な重力異常の値」。世界中に点在する重力値が異常を示すスポットで、渋谷もその一つなんだ」

その話を聞いていた僕はある事を思い出した。

『巧巳の思っている通りだ。G E レートは俺達の言葉で言うところ「パワースポット」だ。魔法の事を認識していない一般人にはこの言葉で誤魔化しているからな』

頭の中で蓮龍拳が僕の考えを確信したのだ。

「それでその、G E レートが変化するとどうなるんですか？」

優愛さんが朔哉さんに質問した。僕もそれを知りたかったし、

「ああ、コイツは厄介だな、コイツが上下するとそこにいる人達のバイオリズムが急激に変動する。もしそれを操作したら人為的に暴動を引き起こすことも可能だ」

朔哉さんの説明に僕は愕然とした。もしこれを奴らが意図的にやったとしたら、厄介この上ないよ。

「おまけに事件の前日、その教授が出演する予定のテレビ番組が何者かの圧力で急遽差し替えたんだ。しかも最後に言った言葉が「その目、だれの目？」って言うって…」

なあっ、何だつてえええ、それって、

「ちょ、ちょっと待ってください！、「その目、だれの目？」って美愛が事件の前日、日記に書き残した言葉じゃないですか！！」

… どういう事なんだ…、この事件は一体何だっていうんだよ。僕は  
優愛さんの言葉に愕然としながらもそう考えたのだ。

続く…

## 第7話 謎が謎を呼ぶ（後書き）

いかがでしょうか？

そう???は「獣装機攻ダンクーガノヴァ」でした。もともとこの話に出てくる剣二達はダンクーガノヴァの1年後の世界で暴れる予定だったキャラでした。

今回スーパーロボット大戦Ⅲにその作品が出ることになったので載せました。

さてここでお知らせですが、明日と明後日は家族で奈良に行く予定です。その為小説の書くのが遅れる事があるのでそこところは気を付けてください。

またお気に入りが増えて本当にうれしいです。感想で一般開放しましたので感想のほどよろしく願います。

それではまた、感想を待っています。

## 第8話 歌と剣と謎と（前書き）

どうもセイワです！

本当に申し訳ありません、一カ月以上かかってしまいました。  
それと名前は公表しませんがあるキャラが出てきます。

それではどうぞ…

## 第8話 歌と剣と謎と

それから数時間後…

剣二の家 18:00

(剣二サイド)

「そうか…、そんな事があったのか」

俺は巧巳が今日得られた情報を聞いて内心驚いていた。優愛の双子の妹が第1の事件の被害者である事、第3の被害者がGEレートの異常を知っていた事、そして一番驚いたのは2人の被害者が事件の前日に「その目、だれの目？」の言葉を言っていた事。

「巧巳、この事件は俺の予想だが裏で何かが陰謀いんぼうが渦巻いているかもしれない。とりあえず明日、俺は警察庁に行つて事件の資料を貰いに行く。お前は將軍の画像データを調べてくれ。もし優愛の言う通り事件当日に撮ったのなら、俺達の姿が写っているからな」

「うへえ、またあの画像を見なきゃならないのかあ」

「そついうなよ、それが將軍に残された唯一の手がかりでもあり証拠品でもあるだからな。それとニュージエネを取り上げているチャットがあればそこも調べてくるんだ。ついでに一昨日言っていた数式の事も調べろよ。もし何か分かったら明日の正午に俺ん家に来てくれ、そこで情報交換だ。なら切るぞ」

「横暴だああああああああ」

巧巳の悲鳴を聞いていたが俺は無視して受話器を下ろして切ったのだ。

「で、お前の意見は如何なんだ、激龍剣」

俺はさっきから考えていた激龍剣にそう言ったのだ。

『うむ、GEレート、我等の言葉で言うとなパワースポットが異常に変化していたのは解っていたが、何故それを発表する前に消されたのが気になってな。奴等はそんなことをしない、むしろほつとしてその時に発生したマイナスエネルギーを狙うのが普通だからな。しかし、それと同時に奴等が活動再開したのも気になる。もしかしたら奴等はこの騒動を利用して何かを企んでいるかもしれん』

成る程、確かに激龍剣の言う通りかも知れないな。となるともしかしたら葵さん達や炎火達、今は任務でココを離れているあの部隊に協力を要請しなくてはならない状態になるかも知れないか。

「~~~~~」

そう考えていたら俺の携帯に着信音が聞こえてきたのだ。この曲がなったのはおそらく、

「もしもし？」

「三住だ、昨日磔やら十字架が何か引つかかるって言っていただろそれが解ったんだ」

三住からの電話だった。そういえばそんな事を言っていたな。

「剣二、ファンタズムって知っているか？」

「いや、知らないな」

「ああ、お前がそういう系に弱いつて風太が言っていたからな。一応説明しておく。ファンタズムはここ最近出来たバンドで渋谷限定

で活動しているけど、その高い演奏力が凄くてな風太や俺もそのライプでよく来るんだ。特にそのボーカルの「FES<sup>フェス</sup>」がめっちゃくちゃ俺好みでなあ」

「お前の趣味を聞くために電話したわけじゃないだろうな、もしそうなら切るぞ」

話が脱線してきかけたので脅した俺である。コイツの性格は死んでも直らないな。

「冗談だよ、冗談。そのバンドが出した曲に「磔のミサ」があるんだが、その曲のサビに第3の犯行と同じ状態があるんだよ。明日の3時頃にそのライブがあるんだがお前も来いよ」

確かに興味深いな。午後にはどこかに行く予定があつたかがそれに決定だ。

「分かった、明日巧巳が正午に俺の家に来るから誘っておく」

「そうか、俺達に手伝うことがあれば何でも言ってくれ。それじゃあ明日正午に剣二の家で」

そう言つた後電話を切つたのだ。

「さあつて、明日から忙しくなるな」

そう言つて俺は台所へ行つたのだ。今夜の御飯は何にしようかな？

翌日 4月14日

警視庁前 10:00

「で、やってきたのはいいけど、誰に資料を借りるんだ。ヤッパリここは爺ちゃんに頼むしかないかも…」

俺は警視庁の玄関を入ったものの、資料を誰かに貰うかって考えていなかったのだ。それについて考え事に没頭していた時に、

「だから、ここに配属になったって言っているんでしょ。こここの責任者出しなさい（怒）」

ん、この声は、そう思って声の方を見ると青いショートヘアで小柄な女の人が、確か判警部補に諏訪刑事だったわけ？、その人達に言い争っていた。女の人は俺の知っている人で、

「何やっているのかねえ、判君、諏訪君」

うわ、しかも祖父ちゃんも出てきたよ、何か話をしようとしたのが聞こえなかった。というよりおそらく説教だろうからな。

「ん、ってこっちに来た」

女の人がゲンナリして聞いていたが俺の存在に気がついて来たのだ。そして俺は、

「久しぶりです、館華さん」

そうこの女の人は館華たけなくらはである。

「今日は如何したんですか？さっき転属とか言っていなかったが…、もしかして麻薬捜査官クビになったか？」

そうからかってみたが目の前に拳銃が出てきて今にも撃ちそうな雰囲気  
の館華さんである。

「冗談は好きな方？」

「イ、イエ、ソウジャナイデス。ジョウダンイッテスイマセン…」

こ、怖えええ。絶対この人の前で冗談言わないでおこう。本気<sup>マジ</sup>で殺  
させる。

「ふふ、冗談よ。私がここにいる理由はね、調べたいのよ、ここで  
おきている事件を。渋谷二ユーージェネレーションの狂気、連続して  
起きる謎の怪奇事件。この事件を私も調査してみたいって前から思  
っていたのよ。で、昨日葵からあなた達が…」

銃を下ろして話したくらはが何かに気が付いて視線を動かしたのだ。  
俺もそれを見ると…

「いやいやしませんねえ。館華　くらら捜査官殿。なぜ貴女ほど  
の人がここに転属になったのですか？それに剣二君と顔なじみのよ  
うですが、どういった関係ですか」

どうやら祖父ちゃんの説教が終わったようで、後ろでゲンナリして  
いる諏訪刑事を残して判警部補が話しかけてきたのだ。

「別に、この事件に興味を持っただけ。彼は前の捜査に協力した関  
係よ。以上」

館華さん、本当に初対面な人に容赦しないな（汗）。

「いやいや、それだけじゃあ「判君？」ま、まだいたんですか。つてちよつと何処へ連れて行くんですかああああ」

哀れ判警部補。未練残さずあの世に逝ってください。あ、諏訪刑事も巻き込まれた。

「あなたのお祖父さん、あの2人に何かあったんじゃないの？」

「さあ、俺は祖父ちゃんの仕事はあまり係わっていないからねえ。それはおいといて、さっきの続きだけど」

さっき言いかけたことが気になって聞いてみたのだ。

「そうだったね、昨日葵から電話があつてあなた達2人、巧巳とあなたが事件を調べるって聞いたのよ。その後、あなたのお祖父さんから電話があつて転属の願いが出たのよ。表向きは優秀な能力を持っている私をこの事件に一课と共に調査したいけど、本当はあなた達のサポートを頼まれたのよ。もちろん葵達にもお願いしたらしいわ」

祖父ちゃん早速先手を打ってきたな。確かに葵達の協力したいと思つたけど、こんなに早く動くって事は、

「ええ、おそらくこの事件は何か裏があるって事よ。おまけに奴らも動いている時点で怪しさ全開よ」

館華さんはため息をついたのだ。と、

「そういう事だ、剣二よ。お前が警視庁「コ」に来たのはこれが目当てじゃないのか？」

声を聞いて振り向くと祖父ちゃんがそこに立っていて、大きめの封筒が2つ持っていた。おそらく入っているのは事件の資料だけど、

「祖父ちゃん何時からそこに居たんだ。けど何で資料が2つもあるんだ？」

「何時からって、あの判にお灸を据えた後、お前にこれを渡すのを忘れて戻ってきたんだ。それと資料これが2つ有るのはお前のと、そこに居る館華捜査官の分だ」

俺の質問に答えた祖父ちゃんは資料を俺と館華さんに渡したのだ。

「剣二よ、この事件は言われなくても危険だ。本来ならワシ達が動くべきだが、内通者がいる以上目立った行動が出来ない。おまけに奴らが動いている以上尚更だ」

な、内通者が居るのかよ。確かにやばいな。

「その内通者は誰かわからないんですか？」

「館華よ、それが判れば苦労はないから動かないんだ」

もつとも意見ですね、祖父ちゃん。

「そろそろ会議の時間だ、館華捜査官の紹介もあるしここでお別れだ、頑張れよ剣二」

そう言つて背を向けて歩き出す祖父ちゃん。

「じゃあ私もいくわ、内通者は私のほうで調べるけど身の危険を感じたらしばらく身を隠すのよ。じゃあ」

忠告<sup>へいご</sup>を言<sup>い</sup>つて祖父ちゃんの後を追<sup>お</sup>う館華さん。

「内通者、か…」

俺はそうつぶやいて警視庁を後にしたのだ。

それから数時間後…

剣二の家 12:00

「じゃあ、第1回、渋谷ニュージェネレーションの狂気の会議を行なうぞ。まずは第1から第3の事件のおさらいからだ」

俺は祖父ちゃんから貰った資料を手にとってそう切り出した。因みにココにいるのは俺と巧巳、風太に三住、そして光の5人だ。俺は第1から第3の事件のおさらいを述べた後、本題に移った。

「第1の事件「集団ダイブ」は5人に共通な事はない。だが、被害者の1人が妙な事を言ったのが昨日巧巳が確認した。巧巳、頼む」

俺は巧巳にそう言った。

(巧巳サイド)

「うん、これはここにいる皆が目にした言葉なんだ。それは「その目、だれの目?」。そう、事件のあった日教室で書かれていた言葉なんだ。そしてこの言葉はじつの所僕しか知らないんだ」

僕はそこで言葉を切った。そして覚悟を決めた。

「それは僕が小学生の時、作文で書いたタイトルなんだ。おまけに事件のあった翌日、將軍とのチャットでもその言葉が出てきたんだ」  
そう確かに知らないんだよ、僕しか…

「それだけじゃない、昨日朔哉さんからの情報で第3の被害者も同じ言葉を言っていた事が分かったんだ。となるともしかしたら第2の被害者も…」

「言っていたって事が」

僕が言う前に三住君が言葉の続きを言った。

「しかも祖父ちゃんが言っていたんだが、警視庁に内通者がいるって噂だ。だから祖父ちゃんも動かないって事だ」

「って剣二がとんでもない事を言ったのだ。ああ、だから僕達に調査をしてくれって言ったんだ。」

「うん、恐らく政治関係者が絡んでいると僕は思っているんだ。第3の被害者は番組に出ていたんだけど圧力がかかってその番組が放送しなかったんだって朔哉さんが言っていたんだ」

僕が言った後、しばらく沈黙が続いた。

「それで巧巳、俺が昨日言っていた事は調べたか？」

剣二が昨日僕に仕事を押し付けた事を言ったのだ。あの後大変だったんだよ。

「ああ、アレね。まず数式だけどこれなんだけど…」

そう言っ僕はその数式を出したけど、

「な、何なんの、この数式は？」

光ちゃんが目を丸くしてその数式を凝視したのだ。

「この数式、つまり「 $f_{un} \wedge 10 \times i_{nt} \wedge 40 \parallel I_r 2$ 」はミレニアム7の8つ目の問題の答えであるとされている公式なんだ。しかもこれ僕の作文の後ろに書いていたんだよ」

そつ、これについて僕は驚いたのだ。

「ううううん、もしかして巧巳、かいりせいどういつせいしょうがい解離性同一性障害じゃないの？」

と風太がそう言った来た。な、何その何とか障害って？

「まあ簡単にいえば二重人格だけど、まあ恐らく違うと思うけどね」  
簡単だけど説明したけど、なんか嫌なあ。

「それと風太達に話したけど、將軍から送られてきた画像を調べていたら僕達の姿があったんだ。それがこの写真」

そう言っ出出した写真に僕達の姿があったけど、

「ここまで一緒だと何か不気味だな。それでニュージェネの扱っているサイトは？」

「それも調べたよ、あとで剣二に渡すね」

そう言った後、僕は喋り終えた。

「まあ何にせよ、現在調査する事は2つ。一つは巧巳<sup>いま</sup>の状態だ。もしもの時もある。巧巳、学校休んでもいいから病院に行ってくれ。俺は2つ目の被害者の身元を調査する」

剣二はそう言ったけど心配だなあ。それに僕は病院行き決定ですか。

「もしかして剣二、この事あの人達に話したわけじゃあ…」

「それはない。もし話したらお前も分かっているだろ？あの人達の行動ぐらい」

うん、そうだね、任務で別の所に行っているけどその事を聞いたならすぐにこっちに向かうからねあの人達。

「けどな」~~~~~「…言っているそばからあの人達かよ、もしもし」

剣二、何かごめんね。

(剣二サイド)

「はっはっは、久しぶりだな剣二よ。どうだそっちの状況は？」

はあ、携帯越しに聞こえるこの高笑いは、やっぱり…、

「お久しぶりですね、・・・さん。如何したんですか、急な電話をかけて」

そう電話の向こうにいる人物は俺の知っている人で、今は任務で出かけている部隊の人である。

「うむ、お前たちの任務についてだ」

しかも最悪なタイミングですけど…

「安心しろ。こっちに戻るのはまだ先だ。しかし私達が任務で出ていった時に起こった事件を担当するとはな。これも運命か」

確かに運命を感じますね。

「こっちの事はこっちで進めるとして、そっちの任務は忘れていませんよね？」

「ふむその事なら安心しろ、現在輸送中だ。今こっち行きの船に乗ったばかりだからな。だが極秘任務だからな、遠回りをしなくてはいけない。む、そうか、なら変わるぞ」

相変わらず豪快ですね…、そう思っていたら。

「久しぶりね、剣二君。こっちの状況はどうなの？」

この人も俺の知っている人で、

「・・・隊長、何の用ですか？」

まあ簡単にいえばあっちの隊長である。

「ええ、リュウケンドーについての文が見つかって調べたら、面白

い文が見つけたの。「短剣を息を吹き込まん、さすれば雷の鷹が降臨する」、何だけど、そっちで短剣のキーが見つかってな」というより、判別する方法が1つしかないからな、下手に使うと何かが起きるから分からのだからな。はっはっは」…そう言う事、如何そっちで手に入った？」

何だろう？暗号なのか？

「いえ、今の所そんなキーがカノンの書に表れていないんです、もしかしたらそっちで回収したキーがそれかもしれません」

まあ確かにこっちに着くまで判別できる人が一人しか居ないからなあ。まあ出たとこ勝負って事だな。

「そう、じゃあこっちの状況は？」

「まだ始めたばかりですが、これは複雑な事件ですね」

「そう、私達も早く戻るけどくれぐれも無茶はだめよ。じゃあ、切るわね」

「ええ、こっちこそ気を付けてください」

そう言って切れたのだ。逆探知を察知しての事だな。

『ふ、さすがのお前もあいつ等にはタジタジの用だな』

言うな相棒、余計恥ずかしくなる。

「それよりも激龍剣、雷の鷹って何だ？一獣王・・・の一匹なのか」

『む、奴か。あいつは気性が荒くてな、とある場所に封印している。そのカギとなるのが魔弾短剣だ』

ダガー…短剣。確かにあっている、けど息を吹き込むって…

「剣二。少し早いけどライブに行くよ」

と風太が話をかけてきたのだ。

「…、そうだな。光、留守番を頼む」

「えええええええ、またあああああ」

俺ん家に光の叫びが聞こえたが、無視だ無視。何か視線が痛い、それは気のせいだ。

「ガガガ、（訳：最悪だな、兄貴）」

シロンも何か言っているけど無視だ。

それから数時間後…

とあるライブ会場の中 14：55

「で来たのはいいのだけど、多いねこれ（汗）」

巧巳の言つとおり、本当に多いぜこれ。

「な、早めに来て正解だったたる？」

まあ確かに三住の言つと通り早めに来て正解だったな。それにしても光、留守番で怒っていたからなあ、後で何か買っていくか。

「あ、もうすぐ始まるよ」

そうやってみたら青の髪にショートヘアをした女の子が現れた。つてあれって、

「なあ、あれって2・D組の岸本きしもと あやせじゃないのか？」

そう、あいつは確かに俺達が通っている学園の生徒だ。

「おお、剣二覚えていたのかあ。そうなんだよ、この『ファンタズム』のボーカル『FES』の正体は、謎の美少女兼電波的で知られる岸本 あやせなんだよ……」

三住の解説は無視して俺はある事を思い出していた。

(回想 一昨日 翠明学園 放課後)

それは俺が巧巳を待っている時だった。

「剣二」

そう女の声がしたと思って声の振り向いていたらそこに立っていたのが、

「あの、誰でしょうか？」

まあ、その時は俺も出会ってなかったから名前が分からなかったけど、俺はある意味有名人だから大部分の生徒が知っていていいもおかしくないのだが、

「あやせよ、岸本 あやせ」

自己紹介されて思い出したのだ。 まあ三住の下らん情報だけだな。

「巧巳は？」

？、如何やら巧巳に用があるようだな、けど最近多いよなあいつが女に係わるの。

「そう、いないのね。けどこれだけは言っというてね」

巧巳がいなことが分かると俺に伝言を頼んだのだ。 どんな事なのか聞いてみたが、

「この世に破滅を齎す邪神王・グラジオール。それを倒すのは七つの妄想の剣をもつ戦士と十の龍の魂を持つ戦士。五つの獣の魂の持つ戦士に十二の天空を舞う戦士と、7つの重力を操る戦士」

その言葉を聞いて俺は思った。 電波だ、こいつは何かおかしいと。しかし何か引つかかるなあ。

「じゃあ、伝えたわよ」

そう言っ俺に背を向けて帰って行った。 何だったんだ。 因みに伝言は届けたが巧巳も「電波だよそれ」と言われたのだった。 俺だっ  
てそう思っぞ。

（回想終わり）

そう思い出していたら大きな歓声が響いて来たのだ。どうやらライブが始まったらしい。その歌声を聴いて…。

「凄えな、これ」

思わず聞き入ってしまった。ううむ、これならプロに入れるのじゃないのかって思うほどの歌である。後であいつに電話するか。そう思っただけで聞いてみたら問題のサビに入る所だった。

「。。。…」

…、確かに第3の事件と一致しているが、それだけで何か係わっているとは思えんが、そう思っただけで隣にいた巧巳の方を向いたら何かに驚いた顔をしていたのだ。

「何があるのか？」

そう聞いてみてはっをしたのか俺の方を向いたのだ。

「…彼女の手を持っている剣、見えないのか、剣二」

なるほど、そういうことか。

（巧巳サイド）

始まってまもなく僕の顔を見た岸本さんの手に夢で見た剣が見えたのだ。形はそう、直線的な部分の無い流線型の剣。何で僕に見えて剣二達には見えないってどういうことなんだろう。おまけに僕も同

じ剣を持っているのにそれに気が付かないってどういうことなんだろう。やっぱり剣二の誕生日から始まった事になんか関係しているのかな？

そう思っていたら、一曲歌い終わった岸本さんが小さく、しかしはつきりと言ったのだ。

「その目、だれの目？」

それから数時間後…

18:00 とある通り

「一体何なっているんだ？、岸本もあの言葉を知っていたみたいだし、訳分からなくなってきたな」

そう愚痴をこぼして歩いている剣二。まあ確かにそうだけどねえ。

「全くだぜ。ん、あそこにいるのは…」

三住君が剣二に同意すると如何やら誰かを見つけたようだ。

「あそこにいるのは、確か…3年の蒼井あおい セナじゃないのか？」

そう風太が言ったのだ。確か蒼井…セナさんでいいや。学園にはほとんど登校せず、ほぼ毎日渋谷の街を徘徊しているって噂があるって聞いたけど、本当の事だったんだ。って肩に担いでいるのって夢で見た二股の剣じゃないか。けど他の人たちも見えていないみたいだし、って何で来たの。

「お前」

そう言つて手に持っていた剣が輝くと透き通つた青い刀身になった。

「「「なあああ！！！」「」「」

剣二達がスットンキョな声を上げたのだ、って見えているのこの剣  
！？

「これが、デイスードがさっき見えているのか！答える！！」

本当にどうなっているんだ。だけど1つだけ言えるのは…僕たちは、  
何時の間にか事件の中心にいる事になっているっていう現実だった。

続く…

## 第8話 歌と剣と謎と（後書き）

いかがでしょうか？

新たなキャラ、新たな謎が出てきました。

それはそうと、この作品本当に人気があるのかそうか気になります。だから感想を送ってください。

それではまた、感想を待っています…

## 第9話 記憶と覚悟（前書き）

どうもセイワです！

どうやら小説の方は1ヶ月かかるようですので気楽に待ってください。

それではどうぞ…

## 第9話 記憶と覚悟

い、今起こっていることをありのまま話すぜ…。第3の事件と同じ状況を歌っている『ファンタズム』のライプの帰り道に剣二達とライプで判明した謎を考えていたら不登校の少女、蒼井 セナさんに出会った。その手には夢に出てきた2股の剣が握られていておまけに変な事を聞きやがる。

「これが、ディソードがさっき見えているのか！答える！！」

その剣が実体化しているみたいで今僕の首先に突き付けている。因みに剣二達はあまりの事態に驚いている。驚いていないで助けてよ…

「あ、あのセナさん。落ち着いてください、それよりも聞きたい事があるんですが」

僕はこの状況を打開するため、まず気になっていた事を聞きだす事、セナさんに聞いてみた。

「…何だ、早くしろ」

如何やら話を聞いてくれそうだけど、首に切っ先は突き付けているままだけど（汗）。

「じ、じゃあ…………ディソードって、何？」

しばしの沈黙…

な、長い……。通り過ぎる人々の声しか聞こえない。

「はあ？、お前も持……っているはずだろ？、さっさと出したら……、ん？」

最初呆れていたが、何かに気付いたのだろうか、よく見るように僕の方をジイイと見たのだ。

「なあ、ないだとお！？馬鹿な、あり得んぞ。貴様本当に人間かあ！？」

そう驚いているセナさん。

「って、それはどうゆう意味だよ（怒）。それにその台詞は剣二だよ（怒）！！」

そう怒ってる僕に「お、落ち着け……」と宥めるセナさん……、後ろの方で、「まあ、確かに剣二は化物レベルだな」と三住君が言ったもんだから、剣二の鉄拳制裁を受ける音が聞こえた。

「まあいい。如何やらディソードは知らないみたいだからあいつとは関わりが無いようだし、しかし何故……」

僕を落ち着きさせ手から何か考えているセナさん、

（どうゆう事だろう。あいつって？）

そう考えていたら、

「すまなかったな。どうやら私の勘違いだったようだ。しかし何故私の名前を知っている？」

どうやらセナさんが考えていたことが外れていたと解ると、首に突きつけていた切っ先をやめて肩に担ぐようにした。

「ああ、それは三住君が言ったんだよ。セナさんは不登校で渋谷を歩き回っているって言ったから」

そつ三住君の方を見た僕がみたのは、

「あ、ああ。一応知っている。だけどどうして歩き回っているのが気になって、なあ？」

見事にたんこぶが出来ている三住君がそう言って隣にいた剣二や風太に同意を求めたのだ。巻き込まないでよね、風太は頷いたけど。

「まあ俺はどうでもいいが、ここ最近物騒だからな1人でウロウロするのはよくないぞ」

剣二はああ言っているけど本当は心配しているんだ。

（俗に言うツンデレ何だよねえ）

「まあそうだな、…人を探している」

僕がそう思うとセナさんがウロウロする事が解った。どうやら誰かを探しているみたいで、フウウンと三住君が言って何やらメモをとっている。風太は意外と驚いていた。けど剣二は違った反応をした。

「そいつを見つけてどうするんだ。お前の目は殺気がある」

剣二のその言葉に改めてセナさんの目を見た。まるで人を殺す気である。

「さすが警視庁鳴神警視官のお孫さんだな、まあ確かにそうだな。私はそいつを見つけて、

殺すからな」

そう言つて後ろを向いて人込みに隠れていくセナさん。な、何かやばい。剣二のおじいちゃんの事も知っていたし。

『巧巳、あいつの持っていた剣、あれに見覚えがあるぜ。あれは妄想の剣『デイスード』、それを持つ事で覚醒する者の名は…『ギガロマニアックス』。けど確かあれは…』

蓮龍拳が思い出して言つた後、また考えたけど…

（もしかして僕も…）

僕はそう考えながらも、剣二の提案でここで解散をしてそれぞれの家に帰った。

翌日 翠明学院 2 - B 10 : 15

(剣二サイド)

「ねえ剣二君、タツクンは何で休んだの？」

1時間目の授業を終えて休憩時間になった教室。俺はこのまま寝ようとした時に梨深が話しかけて来た。

(コイツも巧巳しか見えない剣『ディソード』を持っている。なら、下手な小細工は通用しない。なら…)

「ああ、巧巳はちょっと体調崩してな。今病院の方に行っているはずだ」

病院に言ったのは本当で、昔病院の知り合いの先生の所へ行くって言っていたからな。

「そうなんだ、良くなるといいね」

そう言って話を切り上げる梨深。俺は昼休みになるまで寝続けた。

それから数時間後…

同場所 屋上 13 : 30

「はああああ！？、担当の先生がお前のことを覚えていないだとおお！？」

俺は昼飯を食った後、巧巳からの電話を待つて授業をサボリ（おっさんには言っている）屋上でトレーニングをして暇を潰していた。そして電話に出てみると驚愕の事実が判明したのだ。

「そうなんだよ。僕の方はどうやら異常も見られないって言うんだけど、僕から言わせたら先生の方が異常だって言いたいよ。本当におかしいよ全く」

巧巳もそれについて愚痴を言っていた。

「巧巳、一応あの先生を見張っておけ。何か裏がありそうだからな」「分かっているよ。それにセナさんが言っていた事も気になるし、もし会ったらそれを聞き出すよ」

頼むというと俺は携帯を切り空を見たのだ。

同時刻 とある通り

（巧巳サイド）

フウとため息をついた僕は公衆電話を出てそのままブラブラと歩いていた。そしてさっき剣二の会話の事を思い出していた。

（回想 とある総合病院）

「西条 巧巳君だったね。始めまして、たかしな 高科です」

そう言つて薄い青の髪をした男の先生が言つただけで、

（先生、僕のこと覚えていない！？）

そう心の中で驚いたのだ。どういふ事なのと思つていたけどココに  
来た目的を思い出して頭を切り替えたのだ。

「実は僕、よく覚えていないことが幼い頃にあつたんです。今まで  
は抑えていましたけど、ココ最近なつてまた再発したみたいなんで  
すよ。これつてもしかしたら夢遊病じゃないのですか？」

僕は考えられる病気を言つてその反応を待った。

「夢遊病、つまり睡眠時遊行症すいみんじゆうぎょうしやうの原因は興奮状態のまま眠りに付く  
か、精神のストレスによるものが多いですね。夢遊病かどうかを判  
明するには3時間寝ることですね。就眠後1時間から3時間のノン  
レム睡眠時に発生することが多いんです。では隣のベッドで寝てく  
ださい」

そう言つて隣の部屋に行つてそこで寝ることになつたけど、何か腑ふ  
に落ちない気分で寝たのだ。

三時間後：

「はい、巧巳さん三時間経ちましたけど、どうやら今回は症状は出  
なかつたみたいですね。しかしまた症状が出るのかは分かりません。

なので一週間様子を見て改善しなかったらもう1度診断に来てください」

どうやら剣二の読みは外れたみたいで、蓮龍拳も『確かに熟睡したな』と言っている事から夢遊病ではない事は分かった。けど…、

（どうして先生は、僕の事覚えていないのだろう？）

そう考えたけど目の前にいた看護師さんにその事は言わず、

「分かりました。では一週間後にココに来ればいいですね？」

僕はそう言っていると看護師さんは「ええ」と言ったので僕は病室から出て行ったのだった。

（回想終わり）

「とはいえ、どこに行けばいいのかな？」

『ま、セナあの子が渋谷を回っているのは確かだから、その内出会うだろうぜ』

「そうは言っけど蓮龍拳…、ん、あの人達は？」

蓮龍拳と会話（？）しながら歩いていたら目の前に、金髪で短髪、そして眼鏡をかけている青年に、同じく金髪でツインテールでサングラスで変装している女の子が何やら話をしていたのだ。

「あれって、ジョニーさんにエーダさん？」

そうそこに居たのは今人気急上昇中のアイドルのエイダさんとそのマネージャーのジョニー・バーネットさんである。けどあの2人が何で渋谷ニッパにいるんだろ。そう思って僕が取った行動は、

「すみません、ジョニーさん」

そうジョニーさんの近くまで来て声をかけたのだ。

「ん？ああ、巧巳君か。どうしたんだい？今日は学校に行っていないのか？」

僕の声に気が付いたのか振り返り、「何故僕がココにいるのか？」という疑問を言った。

「それはこっちのセリフですよ、どうしてココに…、アレあそこにいるのは…？」

僕も疑問に思っていた事を言おうとした時に、視線にはセナさん居た、けど何か様子が…ってアレは！

『っちい、奴らだ！まったくどうしてこう絡むんだお前は！？』

蓮龍拳がそう愚痴をこぼすけどここは無視！早く変身しないとヤバイよ！！

（セナサイド）

くっ、奴らを探していたら、何だこの気持ち悪い連中は！！おまけに近くにいる人達を襲い始めている。

『『『ジャマンガアアアア!!!』』』

紫の怪人は数が多いが強さが弱いとして、なんだあのデブ猫の怪物はっ!?!さつきから斬っているが脂肪がジャマしてうまく斬れん。おまけに、

『ニヤアアアアアアアア』

「うわあああああああああああ」

くう、まただ。コイツさつきから人を一飲みしている。それにその周りから紫の塊が出て来ている。それが空に上っている、そして私に気が付いた。

(もしかしたらあいつの腹にいる人達から発しているのか?だとしたら早くあいつの中にいる人を助けないと胃液で溶かされるぞ!)

そう思った私に衝撃が走った。

「ぐうう」

飛ばされて電柱に激突した私は衝撃の元を見たのだ。おそらくあのデブ猫がああ腹で体当たりをしたのだが、なんてダメージだこれは、体が動かん…

『ニヤアアアアアアアア』

くう、ここまでか…、私は迫り来るデブ猫に飲み込まれる事に直感して目をつぶりながら思った…

(…母さん、ごめんなさい…、仇、取れなかったよ…)

「させるかあああああ」

『二”ヤアアア!?”』

その声が聞こえたと同時にデブ猫の悲鳴が聞こえたのは同時だった。恐る恐る目を開けると、そこに居たのは…赤いスカーフを巻いて、赤い鎧に身を纏っている人だった。

「だ、だれだ？お前は？」

私はその人に向かって何者が聞いたのだ。

「僕か？僕の名は…睡蓮の花言葉は「優しさ」と「信頼」。それらを犯す者は許しはしない！リュウレンドー！来・陣！！」

そう、そこに居たのはテレビに出ている空想の産物。人はそれを「ヒーロー」と呼んだ。だが、その声は最近聞いた事があるような…

「なんとか間に合った、後は僕達に任せるんだ」

考えに没頭していた私であったが、彼が発した言葉にハッと我に歸り、

「お、おい、お前！あの怪物の腹には何人もの人が…」

「分かっている。それこそが僕の仕事だ。君はそこでじっとしているんだ」

「だが、それをするにはあの…」

そう言おうとした私だったが、そこで繰り広げている戦いに啞然とした。そこには…

「エレファントアックス！」

『『『ギジャアアアアアアアアアア！！！』』』

片斧を持って振り回し紫の怪人を吹き飛ばす黒き戦士に、

「ダンプレード！！」

『『『ギジャジャアアアアアアアア！！！』』』

一対の剣をそれぞれ両手に持って同じく紫の怪人を斬りまくる赤き戦士が戦っていたのだ。もしかしてこいつの仲間なのか？

「分かっただろ。だから君は安心するんだ、後は僕達に任せるんだ」

そう言って彼…確かリュウレンドーは腰にあるホルダーを回しその中の鍵を取り出した。

「スプラッシュキー、発動！」

そう叫びながらその鍵を龍の顔の手甲に差し込み、回して押し込んだ。

『チェンジ・スプラッシュフォーム』

そう機械音がするとリュウレンドーのいる所から水流が出てきたのだ。そして彼の姿が水流で見えなくなりそれが晴れるとそこに居たのは…

「超变身！！」

そう叫んだ声からリュウレンドーだと思う、しかし赤い鎧が青の鎧に、赤い眼は青の眼に、そして炎のような赤いスカーフは水のような青のスカーフに変わっていたのだ。啞然としている私だったがリュウレンドーはそんな事を気にしなく、腰にあるホルダーを回しその中の別の鍵を取り出した。

「ロッドキー、発動！」

そう叫びながらその鍵をまた龍の顔の手甲に差し込み、回して押し込んだ。

『チェンジ・ロードモード』

また機械音がするとリュウレンドーが巻いていたスカーフを持つと、水がスカーフを巻きついて、それが晴れると青く長い棒が現れた。

「水撃多棍棒!!、さてと、少しはダイエツトをしないとなあ」

そうリュウレンドーが言い肩に棒を叩いた後、物凄いスピードでデブ猫に接近してその長い棒で殴ったのだ。しかも1度や2度ではな

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

私の目、いや恐らく他の人にはその棒のスピードには到底目で見え

ない位連撃を繰り出していたのだ。しかし何か知っている台詞を言っているが、気のせいかな？

『“ニ” ヤアアアアアアアアアアアア』

その証拠にあのデブ猫の怪人の腹にダメージが蓄積されて行き、そして…

『ニ、ニヤアアアアアアア…』

吐いたのだ…（食事中のみなさん、大変失礼な事をしましたby作者）、そのおかげで今までため込んでいた人全員を吐き出した。だが、

（変わらず肥っているのはどういうことなのか？）

いくらか痩せているのだが肥っているデブ猫を見て思った…（汗）。

「んじゃあ、止めと行くか。ファイナルキー、発動！！」

そう言っただけで何時も手に持っていた鍵をまた龍の顔の手甲に差し込み、回して押し込んだ。

『ファイナルブレイク』

また機械音が聞こえたと思っていたら手に持っていた棒の先端に刃が展開したのだ。おそらく元々収納されていたのだらうか。

「イグニッションスプラッシュクラッシュュ！！」



（あの姿といいあの強さといい、まさか噂の龍の騎士なのか？それにあの2人はおそらく獣の戦士。そしておそらくあのデブ猫は魔物……。くっ……。間違いなく渋谷で何かが起ころうとしている。そしてあいつの他に暗躍している奴もいる……）

私はぬぐいきれない不安の中にいた……

（巧巳サイド）  
とある通り

リュウレンドーから変身を解いた僕は周りを気にしながら考えている。

（イヤー、今回も中々大変だったなー、だが楽勝だったけどね（笑）。……。けど腹の中に人を入れてそのままマイナスエネルギーを発生、そして自身もパワーアップする魔物が現れるなんて思わなかったな、奴等何を考えているんだろう？）

「何かの実験、もしくは全く別の行動。どちらにしてもわからないですね」

おそらく声に出ていたのだろう、その問いに答えたのは、

「足止めの件、ありがとうございました、ジョニーさん、エイダさん」

そうさつき会ったばかりの2人だったのだ。何故彼ら2人がこの事を知っているのは、そこに至る経緯が長すぎる為別の機会で（↑B y作者）。

「いえいえ、久しぶりにあいつらをぶっ飛ばすことで、溜まっていたストレスを発散しましたから♪」

こ、怖い事を言うなあジョニーさん…、マネージャーの仕事も大変ですね…

「それはそうと、さっきなんであそこに居たのですか？」

僕は話題を変えて疑問に思った事を言ったのだ。

「ああ、それね。実は渋谷<sup>ヨコバ</sup>最近噂になっている『ファンタズム』のライブを見に行こうとしたのよ。で、そのライブを聴いて良いと思ったら彼らをスカウトをしようとした…」

その説明をエイダさんがしたのだ。まあ確かにいいライブだったし、歌声も良いし…、けどなあ…

「それはそうと巧巳君。君は学校どうしたんですか？」

僕はその事（ボーカルが電波）について話そうかなと思ったたら、先にジョニーさんが疑問に思っていた事を言った。

「それはですね…」

僕はその事を含めてこれまでの事を話す事にした…

数時間後…

とある料理店 14:00

「なるほど、そうだったのですか…、葵さんから聞いたとはいえそんな事が…」

エイダさんがそう言った後、コップに入った水を飲んだ。あの後現場の近くにいたら怪しまれるのとお忍びで来ている2人だがそれがばれると不味い<sup>まず</sup>為、そこから離れた場所の料理店で注文を頼みながら話をしている。

「おまけにその先生が巧巳君のことを憶えていないという時点でおかしいですね。監視するのは僕も賛成です」

そう言いながらジョニーさんは周辺を見渡している。おそらく周辺で記者が居ないかどうか探しているのだろう。何かがきっかけでスキャンダルになる可能性も高いしね。

「しかし、問題は『ファンタズム』ですね。聞いた話によればそのボーカルが巧巳君の学校の生徒で、その事件と何かが絡んでいる…、まったくあなたはこう何かに巻き込まれる性質<sup>たち</sup>ですか？」

そういいながらため息をついたジョニーさん、こっちだったため息がつきたいですよ…

「だったら、そのあやせさんに問いただしたらどうなんですか？」

運ばれてきた料理を食べながらエイダさんが言うけどそれが出来たら苦勞が無いよ。だいたい…

「まあ問いたですにしても、今日はライブをやっていないみたいですし…、僕達は今日はこれで帰りますが、捜査には出来る限り協力をしますので…」

そんな僕に助け舟を出してくれたのはジョニーさんだ。

（まあ確かに毎日ライブをやっていたら疲れると思うし、もしかしたら学校で会えるかもしれないかもしれないからね。だけど一週間学校には行かないけど…）

心の中で突っ込みを入れながら僕は思いながら食べる僕であった。  
因みに昼飯のお支払いはジョニーさんが払ったのは言うまでも無い  
（すいません）…

それから数時間後…  
とある通り 17:00

（剣二サイド）

俺は今第1の事件現場に向かっている。普段の俺ならその時間帯は部活をやっているのだがその理由は、

（まったく氷牙の奴、「部活のことは僕と三住が仕切りますので、剣二は事件の事だけに集中して下さい」って言ったけど大丈夫か？、まあ三住は兎も角氷牙は真面目だから大丈夫だろう。それじゃあお言葉に甘えて事件を調べるとするか。まずは第1の現場に言ってその後被害者の身内に聞きに行くか…）

「ガ？ガガガ！！」

そう考えていた俺に肩に乗っていたシロンが何かを見つけたみたいだ。シロンが指さした先にいたのは…

「何だ梨深か。一体どうしたんだ？」

そこにいたのは梨深だが、俺はこの時ふと疑問に思った。

（まるで俺がこの道に行くことを待っていた様だな）

そう、梨深が俺を待っていたように立っていたのだ。

「剣二君、ちよつといいかな？」

何やら話があるような雰囲気だ。なら、

「歩きながらいいか？」

まあ巧巳がこの場にいたら「フラグが立ったああああああ」っていいそうだけどな（汗）

「タツクン、そう言いそうだね…。そのタツクンに話があるんだよ（！？、コイツ俺の心の中を読んだのか！？）」

梨深が俺の心の中を読んだ事に対して驚いていると梨深は、

「忠告しておくね、…タツクンに『ニュージェネ』の事を調べないで…」

そう悲しげな表情を見せた梨深。その表情を見て驚いた俺であったが、

「何か知っているのだな、『將軍』の事や色々な、けどな…」

だが俺は…、いや俺達は決めた事だ。

「これ以上事件に突っ込むな、って言いたい事だろ。だがもう既に巻き込まれてそれを調べるなって言われてもな、それは無理な話だ」

何故なら俺達は知ってしまったのだ、渋谷で起こっている事を。

「多分巧巳も同じ事を言うと思う」

平和  
表の裏で蠢うごめいているう闇くらの存在を…

「そんな事は分かって首を突っ込んだ、今更引く訳にはいかねえつてな。だから…」

奴らをほっ弱き者といていたら人々が犠牲になる、なら…

「俺達を止めようとするならなあ、死ぬ気で止める！覚悟を決めた奴を止めたいなら、こっちも覚悟を決めて止める！！それが出来ねえ奴はすっこんでいろ！！！」

俺達はその弱き者の盾となり、刃になって戦う事だ！！！

「…だけど、その先に知らない方がましな真実があつたらどうするの？」

もし、その先に絶望が待っているのなら…、それを乗り越えてまた一歩踏み出す！！！！

「それを背負い進むさ、俺も巧巳あいつもな…」

（梨深サイド）

私は剣二君の言った決意の固さに驚いている。まさかここまで信念が固いとは思っていなかったからだ。タツクンがもしニュージエネ

を調べるうちに覚醒をしてしまったら彼の命が…。そうならない為に剣二君に説得しようとしたけど、

（彼は、私が知らない、何か重大な何かを知っている？だからそう言えるのかな。もしそうならあの覚悟は本物だ。とてもじゃないけど入り込めない…。それに別の何かが私を見ている感じがする…）

私はそう考えると同時に誰かが見ている感じに不安になった。

「…分かった、けどこれだけは憶えておいて。この事件はタツクンの過去が絡んでいるって事を」

私は警告をするとそのまま剣二君と別れた。彼にこの事を言うために…

### （剣二サイド）

「で、何であいつと話している時に黙っていたんだ？相棒」

俺は梨深が見えなくなると同時に激龍剣に何故黙っていたのかを問いただした。

『うむ、梨深という女が『ギガロマニアックス』だという確信が無かったが、今のやり取りで分かった。お前が心を読まれたのはその能力の1つ『思考盗聴』だ。他人の思考や記録を自分の妄想として読み取る能力で、もし剣二と我が会話をしたらすぐに分かっ  
てしまつて警戒されてしまふからな』

なるほどと納得する一方、

「なあ激龍劍、さっき妄想つて言わなかったか？」

「鋭いな。まあそうなのだがどうしたんだ？」

「それだと前の巧巳もその能力を使っていたのか？」

「ふむ、それはありえん。昨日蓮龍劍が言う通り『ギガロマニアックス』は『ディソード』を持つことで覚醒するって言うていたからな。我とお主達が最初に出会った頃に巧巳は覚醒したからな。まあそれはあやつに聞かんと分らんがな、だがどうしたんだ？」

「何かそれって…プライバシーの侵害だなんて思ってたな…」

激龍剣との会話の後、もしかして考えていた事を覗かしていた事に少し凹んだ俺であつた……

「ガガガ…（訳：兄貴、がんばれ…）」

シロンに励ましてもらってもな……

「ん、剣二じゃないか？どうしたのさ？剣二が落ち込むなんて……」

その声の方を見ると、その原因となった巧巳がいた。もちろんする事は…

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!」

憂さ晴らしにキン。バスターやキン。ドライバーなどのプロレス技

を巧巳に炸裂した。

「不幸だああああああああああああ！！！」

人、それを八つ当たりというb y作者……

[illegible]

因みに巧巳の叫び声を聞きつけに来たおっさんが助けに入るまで30分間、その状態は続いたという…

次回に続く…

## 第9話 記憶と覚悟（後書き）

いかかでしょうか…

さて今回の話で謎がまた増えましたね。その答えがまだ明らかにさせていませんがそれを知っている人はわかると思いますね。

それではまた…本当に感想待っています…（涙）

## 第10話 検証と調査と発覚（前書き）

どうもセイワです。

まずは一言、更新遅れてすいませんでした！！！！

それと話を3人称に変えました。何かあれば指摘をお願いします。

それでは、始まります。

## 第10話 検証と調査と発覚

前の話から1時間後：

渋谷ニュージエーション第1の事件現場周辺 18：00

「で、どうなんだ？前にそういう事はなかったのか？」

あの後、本当に命の危険を回避した巧巳は剣二に質問を受けていた。質問の内容は、「前に思考盗聴が使えたか？」って事だ。それを知らなかった巧巳はその説明を剣二はしたが、「何故その事を聞くんだ？」と聞こうとしたがそんなの聞いたらまた剣二にプロレス技を炸裂させられる雰囲気だから心の中にしまっておいた。その剣二の隣には不動のおっさんもいて、もう1度剣二の暴走の時に止める人として念には念をとっている。因みに先程第1の現場を見に行った後である。

「うん、それについては確かに前から使っていないから大丈夫だけど、って言うか今さっき知ったばかりだし」

そう巧巳が剣二にビビりながらも答えて心の中で、

（確かに剣二に会った後から使っていないかったけど…。もしかしたらこれは、今後の調査や戦いに役に立つのじゃないのかな？）

巧巳はそう思い出して、そして閃いた。これを使えばもしかして高科先生の頭の中を調べる事が出来るかもしれない、と。

「だが気をつけろ、おそらく梨深やセナ、それにあやせも同じ能力ちからを使うかもしれない。あの3人の前はその能力を使うな、と言うよ

りも日常も使うなよ」

しかし剣二がそう注意し、巧巳がハツとした。剣二の言うとおり、明らかに怪しい梨深と、誰かを殺すとやばい感じのセナ、それに電波で何かを知ってそうなあやせの前で使ったら怪しまれるかもしれない、それに裏の事まで知られてしまう可能性も出てくる。それに今まで使っていなかったからかどうかは分からないがその能力を<sup>ちから</sup>依存してしまう事を指摘された。

「どちらにしても、この事件は確実に何か裏がある。そのことで別の任務でここ扶桑<sup>ふそう</sup>皇国にはいないあの部隊に話したら急いで戻ることになった。同じく別の任務でその部隊から別行動をとっていた2人もすぐに帰還するが…一週間近くかかるらしい」

それまで聞いていた不動のおっさんは、事件の裏には何か陰謀があると確定し、剣二が一昨日に電話した2人のいる部隊とその部隊で別行動をとった2人が近日中に帰ってくる事を2人に教えたら、

「オイオイ、おっさん。あいつらが持っているマダンキー<sup>マダンキー</sup>はどうなるんだ？それに今現在護衛中の石版はどうなるんだ？」

そう剣二が話した通り、携帯電話でマダンキーと石版の輸送を護衛しているあの部隊が一週間で帰ってくるにはその任務を中断して扶桑<sup>ふそう</sup>皇国に帰ってくるしかない。隣にいた巧巳も頷いたが、

「安心しろ、マダンキーは直接持ってくる事って言うていたし、石版もちゃんと別の所に移して調査する事になった。それにお前らは忘れていないか？奴等はアレを所持している事を」

不動のおっさんは剣二達の質問を予想したらしく答えた後、厳しい

表情を剣二達に向けたままある事実を言った。

「…確かに、あの戦いの後見かけていないな。奴等が何かを企んでいるかが解らないけど、アレを出していないのは確かに何かあるな。もしかして出せない理由があるのか？」

剣二の言うとおり、一ヶ月前の戦いで彼らが手こずっていた例のアレがここ最近出ていない事に巧巳と共に考えていた。

「もしかして…剣二が大暴れした時のダメージがまだ残っているのかな？」

巧巳は考えられるある可能性を言った後…

「『ありえるな、あんなに大暴れしたらな…』」

『その仮説、80%の可能性あり』

「なっ、それはどういうことだ！それだと俺のせいじゃないのかよ！！つつかそれだと褒めろよ俺を！！（激怒）」

巧巳の言った事を考えて、その事が可能性だと結論に達した不動のおっさんと剣二の腰にある激龍剣、そして不動のおっさんの腰にある龍の小物、剛龍銃ゴウリュウガンが言い、何やら冷たい視線で剣二を見た。その剣二はその事で逆ギレを起こし不動のおっさんに口喧嘩を始めた。

『そんなに大暴れしていたのか？当時のリュウケンドーは？』

そして当時調整中だった蓮龍拳はその事について、自身を右手首に装着している巧巳に聞いてきたのだ。

「そつだよ、まあ当時サンダーキーの制御に手こずっていてね、一

か八かの賭けでその戦いで使ったんだ。まあいくつかの妨害が遭ったけど無事に制御できて雷鳴武装したんだけど…」

そう区切りをつけ巧巳は剣二達の方を見たが、

「大体おっさんだつて、俺と同じく大暴れしまくったじゃないのかよ！ほかにも炎火達や葵さん達、それにあの人も大暴れしたじゃないのかよ（怒）！！」

「確かに俺達も大暴れしたがお前は度が過ぎたんだ（怒）！！」

まだ言い争っている2人である（汗）…

「けどその戦いの前に徹夜でサンダーキ―を制御を試みようとしておまけにあの戦いで大暴れをした結果、1週間の重傷を負っちゃったって訳。因みに原因は疲労と全身筋肉痛だけだね」

「…剣二の無茶に呆れるか、その程度で済んだ剣二の体に褒めるのか迷っているけど…」

2人のやり取りを見た巧巳は蓮龍拳にその後の事を話したが、巧巳の説明でどう反応すればいいのか迷っている蓮龍拳であった。が、

「そう言わないでくれよ、僕達も同じ反応したのだから…、それよりも止める、アレ？」

「止めない方がいいのじゃないのか？確か『触らぬ神に祟りなし』ってことわざにもなっているし」

「まったくだ」

『同感』

その当時に巧巳も同じ気持ちであったのである。と剣二と不動のおっさんの口喧嘩を止めようとしようか迷っていた巧巳と蓮龍拳であ

つたが、激龍剣と剛龍銃は呆れていたのを聞いて剣二達の方を見ると、

「やんのかおっさん!!」

「上等だ!!!」

（まだ言い争っているよあの2人…、少しは周りの人の迷惑も考えてよね…（汗））

今にも喧嘩しそうなやり取りを見て巧巳はそう思い、本当に何回目となるため息をついたのだ。因みにその行動は周りの人たちが冷たい視線を感じ始めた時に慌ててその場を後にしたのはそれから30分後だった…

それから数十分後…

さつきいた所から離れた場所      18：40

「で、第1の事件の現場を見てお前達は如何思う?」

あれからだいぶ落ち着いてきた不動のおっさんは剣二と巧巳に第1の現場を見ての感想を問いかけた。

「ああ、正面玄関から屋上まで監視カメラがあるのはさつき確認したが、それに映らず、かつ誰かに気が付かずにそこまで行くのは不可能に近い。おまけに屋上のドアは常に閉まっていた。それにそこを開けるのに誰かが鍵を持っているはずが…」

「だれも持っていないかった…、ピッキングという手もあるけどそういう類の物も誰も持っていないかったって現場資料に書いていたし。ますます謎だよねえ」

そう言い、頭を抱える剣二と巧巳。考えれば考えるほど混沌<sup>カオス</sup>になっていく現状に頭を抱えたい気分である。

「それはそうだが、まず『何故あの5人は集まったか?』、そこから解明しないといけないかも知れないな」

考えに没頭している剣二と巧巳に、不動のおっさんは最初に考える疑問に的確に言い、

「確かに、巧巳。お前は第1の被害者の遺族を回れ。もしよければ部屋の中身も見せてそこから情報を引き出してくれ」

不動のおっさんに言われ剣二は考えた後、巧巳に調査を依頼した。一週間高科を見張ると言っても大体は病院にいる事と、毎回見に行ったら逆に怪しまれる可能性も出てくる。その事を踏まえての案である。

「俺は優愛の方に直接聞いてくる。もしかしたら協力できる可能性もあるかもな」

剣二の方は優愛さんに話を聞く事になったのだが…

「大丈夫？優愛さんは本当に病<sup>...</sup>んでいるよ」

「……………大丈夫だ」

巧巳にそう言われて剣二はしばし考えた後、巧巳にそう答えたが顔色がさつきよりも良くなかった。

「さっきの間は何って言うの無いけど、まあ一応<sup>...</sup>気をつけてね」

巧巳はそうフォローするしか無く、心の中で「剣二がんばれ…」と  
いうしか無かった…

「それももう1つ、この事件とは関係ないとは言えんが少し気になる  
情報を掴んだ」

少し気の毒な剣二の事を気づかっているのか如何か知らないが、不  
動のおっさんは何か真剣な顔で剣二と巧巳を見たのだ。

「とあるサイトで献血を<sup>けんけつ</sup>求める書き込みがあつた。だが、そもそも  
献血を求めるのは路上でやる方がいい。しかもB型の血液を求める  
とそう書いていた。もしかしたら…」

「何か裏がある、そう言いたいですね？」

不動のおっさんの説明に剣二がそう答え、不動のおっさんは頷き、

「もしかして…第4の犯行予告じゃないですか!？」

「その可能性も高い…、それも並行して調べてくれ」

「了解」

巧巳は考えられる最悪な答えに、不動のおっさんはその可能性を考  
え彼らにそれも調査すると言い、巧巳と剣二はそう言つてここで解  
散となった。

翌日… 4月16日

翠明学園 3階廊下 10:20

「なるほど、それでまず第1の事件の被害者を調べる事になったのですね」

そして翌日になり剣二は優愛に情報収集のため協力を求めるために彼女を訪れた。一応「ニユージエネに巻き込まれてこのままでは済まないという事で調べる事」と事実を隠しながら言い、それにはまず最初の被害者の共通点を探すために妹の部屋を見せてくれと頼んでいる途中である。

（もし俺達の裏の事を知ったら仰天してそれどころじゃないからな…）

剣二は優愛の反応を見ながら心の中で思い、その答えを待っていた。

「まあ加門さんと何故か知り合いである西条君と、その友達である鳴神君もこの事件を調べていますし、いいですよ」

優愛は少し考えた後、剣二に妹の部屋を見せる事を許可してくれた。

「でも一応私もそこを見ますので変な事をしないでくださいね」

しかしまだ剣二のことを疑っているのか、自分も見に行くと釘を刺されたが、

「そんな事はしませんよ」

剣二は呆れながら違うと断言した。

同時刻

とある家…

「…では彼は本当に自殺する様子はなかったのですね？」

そう言ったのは朔哉で、彼は手に持ったメモ帳を手に持ち目の前にいる被害者の遺族の人に質問していた。その隣に巧巳も交えて…、

で何故朔哉が巧巳と共にここにいるのかと言うと…

それは1時間くらいにさかのぼる…  
とある通り… 9：20くらい

「とは言ったけど、どうやって会えばいいのかなあ」

そう言いながら巧巳は歩いていった。それは被害者の遺族に会おうにもただ家に入れば怪しまれるからである。

「簡単にお友達って言えば良いけどかえって怪しまれるし…、かといって流石に泥棒行為はアウトだしなあ。はあこんな時に朔哉さんがいてくれたら…」

「俺がどうかしたんだ？」

「あなたが居たら…って一体何処から湧いて来たのですかあ！？」

アレコレ考えていた巧巳はため息をつきそうになり、その場にいない朔哉に愚痴を言ったら、その本人の声を聞いて声のした方を見たら、いつの間にか隣にいた朔哉がいたのに驚きながら何故ここにいるのかと質問した。

「ああ、昨日ジョニーから電話があつてな。」「1週間ぐらい学校休む巧巳君をサポートしてください」って言われてな。今朝からお前の家から尾行してもらった」

（さ、最悪だ、この人。プライバシーの侵害で何時か訴えつてやる…）

サラリとその理由を述べた朔哉であつたのだが、今朝から尾行させられた巧巳はそんな事を平然とやってのける朔哉のスキルにただ啞然とすると同時に、何時か裁判に訴えを起こすと心に誓うのである。

「それはそうだが、あの医者<sup>い</sup>者の監視はどうしたんだ？」

そんな事を知っているか知らないかは本人しか分からないが、朔哉は巧巳に昨日ジョニーが言っていた医者を見張っているはずなのにどうしてブラブラしているのかと尋ねた。

「うん、あの後第1の現場に行つてそこで不動のおっさんが「被害者の5人は何故集まつたか？」という疑問を言つたんです。でその疑問を解決するために被害者の遺族に事件当日の話をしてくれって事になつたんですけど、どうやってその話をしようかなって思つて」

巧巳は先ほどの怒りを納めて昨日の夕方の事を朔哉に簡単に説明し、

「なるほどな、まあ確かにそうだな。…よし俺もその事で記事にする予定だったからな、付き合つぜ」

その話を聞いた後、しばらく考えていた朔哉は巧巳と一緒に調査する事を申し込んできた。

「ええ、宜しく願いします…、それでは何処から行きます？」

で話は現在<sup>今</sup>に戻る…

「ええ、その日は「友達に会いに行く」って言ったきりそのまま行つて…、それがあんな事に…」

その被害者の母親はその事を思い出して口に手を当て嗚咽<sup>おえつ</sup>をし泣き出した。よほど当時の事がトラウマになっている様である。

「あの、失礼なのは分かりますが…よろしければ彼の部屋を見せてはくれませんか？」

朔哉は、ある程度被害者の行動を聞いたので、被害者の部屋を見せてはくれないかと聞いてみた。

「あの、どうしてあの子の部屋を見せなきゃいけないのですか？」

当然部屋を見せる事に疑問に思った母親は質問してきた。

「その理由は、さっきあなたが「友達に会いに行く」と言ったからです。もしそれが本当だったら文通やメールが彼の部屋にあるはずですよ」

その理由を朔哉は答え、その隣にいた巧巳も口が動いて、

「この後僕達は他の被害者の家にも行く事になります。もしかしたら同じ「友達」に会いに行くと言うかも知れません。その手がかりになるかもしれない証拠を探すと言う事で許可できませんか？」

この後の予定も言い、その被害者の部屋を調べてくださいと頼む巧巳に、

「…分かりました…、警察の方も流石にあの子の部屋を調べていませんが、あの子の死の真相を必ず暴いてくださるのなら…」

2人の意思を察した母親は深く頭を下げた。

数分後…

被害者の部屋

「さてと、まずは何処から調べる？」

部屋に入り朔哉は巧巳に対してそう言い、自分は手に医療用ゴム手袋をはめていて、もう1つ持っていたゴム手袋を巧巳に渡した。

「そうですねえ、じゃあ朔哉さんはこの部屋を撮影してくれませんか？僕はまずパソコンの方を調べますね」

そう言いながら巧巳は手袋を手にはめて、机の上に置いているパソコンを起動した。その後ろの方で朔哉は被害者の部屋の写真を撮っている。

「しかし、この部屋の状況とさっきの親の話を合わせると自殺の点はなさそうだな。…ん、日記？被害者が書いたのか？。どれどれ…」

写真を撮り終えた朔哉は部屋を見ての感想を自殺をするわけではないと確信を持ち、ふと床に置いてある一冊の日記を見つけそれを手

に持ち、ある程度読んでいると気になるページを見つけ、

「巧巳、ヤッパリこの事件。お前が何か絡んでいるかもしれないな」

朔哉は巧巳に向って言い、そのページを書かれていた文字を見せた。そうそこに書いていたのは…「その目、だれの目？」

「はあ、予想はしていましたが…こつちも見つけましたよ。まさかこんな所に繋がっていたんですねえ」

巧巳は自分が抱いていたいやな予感が当たってため息をつき、パソコンの画面を朔哉に見せた。

それから数時間後…

優愛の家 美愛の部屋 17:00

「成程なあ、まさかこれをやっていたのかあ」

それから優愛の家にやってきた剣二は優愛の立会いの下美愛の部屋の搜索に当たっていた。そこで剣二は美愛のパソコンを立ち上げて操作し其処であるものを優愛に見せたのだ。

「もしかして美愛はこれのオフ会に行つて巻き込まれたんですね」

優愛はそのパソコンに映っているものを見て自分の推理を剣二に言った。そのパソコンの画面に映っていたのは…、エンパイア・スウィーパー・オンライン、つまりエンスーである。

「巧巳に進められてプレイしたが中々面白くてな、…そういえば最

近見かけない奴もいたがまさか美愛達だったか」

剣二は巧巳に進められてエンスーをプレイしたらしく、ここ最近のプレイ内容を優愛に言った直後、剣二の携帯が鳴り剣二はそれに出た。

「もしもし？」

『剣二か？』

電話の声は朔哉である。

「どうしたんですか朔哉さん？あなたが俺に電話をする事自体が珍しいですが…？」

『ああ、そのわけは…、すまんが合流したい。今いる所は巧巳が言っていた所で間違いないか？』

朔哉は盗聴される危険があるため、剣二今いる場所が優愛の家かどうか言った。

「巧巳と一緒にいるんですかぁ。ええ、合っています、それでは後ほど…」

そう言い電話を切り、優愛に向かいさっきの会話の内容を話したのだった。

次回に続く…

## 第10話 検証と調査と発覚（後書き）

いかがでしょうか？

主人公たちがいる国が分かったと思いますが、まあそれは彼女たちが登場してからですね。

それではまた…、本当に感想を待っています。

## 第11話 遭遇と戦闘（前書き）

どうもセイワです。

本っ当にすいません！！時間がかかってしまいすいませんでしたあ  
ああああ！！！！

そ、それで始まります…

## 第11話 遭遇と戦闘

前の話から30分後：

優愛の家 優愛の部屋 17：30

「以上が僕達の調べた結果だけど…」

優愛の部屋で巧巳は自分達が調べた結果を、優愛のベッドで座っている剣二に話しをしていた。あの後巧巳と朔哉が優愛の家に来たのだが、剣二は最初「何故一緒にいるか？」と言う疑問を巧巳に質問しそれ答えた後、お互いが今日分かった情報を交換し合って、今さつき巧巳達が集めた情報を説明終わった所である。

「…話をまとめますと、美愛や他の被害者はエンスーのプレイヤーだった事と、美愛を含める被害者達の日記に『その目、だれの目？』と書かれていた事。この2つですね？」

そして今まで聞いていた優愛は巧巳と朔哉が掴んだ情報をまとめた。

「ああ、それにしても…何故被害者達は『その目、だれの目？』って知っていたんだ？それとチャットを調べて判った事だが、この五人はパーティを組んだことはあったが全員ではない。パーティは基本的に4人1組でプレイするって書いてあったからな」

朔哉は頷いて自分達が調べた事の疑問点を剣二や優愛に説明した。そして続けて、

「それともう1つ、被害者達のパソコンを調べていたら謎のメールが送られていてね、そのメールの差出人の名前は『ドラゴンブレイ

カー』。ハンドルネームだがこいつは何か知っていそうなんだ。それがその『ドラゴンブレイカー』の文章」

そう言い朔哉はメモを懐から取りその紙をを剣二と優愛に見せた。そこに書かれていたのは「すいません、私が開催しますオフ会に参加していただきませんか？詳しい開催日は返答して頂ければいいです。それではよい返事を待っています」と。

「『ドラゴンブレイカー』？、聞いた事があるな。俺達がやっているエンスーの中じゃ有名なプレイヤーだからな。その有名なプレイヤーがオフ会に誘われたら誰でもOKするだろう。でその返答のメールは？」

剣二は巧巳と朔哉にその返答のメールがあるのか聞いてみたのだが、「それが、どうやら見た後消してくれて書かれていたみたくてね、なかったんだよその返答のメールが」

剣二の質問に朔哉は困った顔をして、朔哉の代わりに答えたのは巧巳であるが、その彼も答えた後ため息をついた。と優愛は何か思いついた。

「もしかすると、美愛のパソコンもそのメールが来ているかも知れません！」

そついい、そのまま美愛の部屋に走って行ったのだ。

「あ、優愛さん！、まったくなんで僕の周りにはこういう人たちが多いんだろうかなあ…（汗）」

「…それってどうゆう意味だあ？」

「……………あ」

呼び止めようとした巧巳であったが、もうすでに優愛は部屋から出て行っており愚痴をこぼしていたら、凄く迫力ある声に振り向いて見たら、剣二が青筋を立てて何やらオーラを体中に漂わせていて、朔哉はすでにこの場から離れているのだろうかこの部屋にはいなくなっていた。そして剣二の肩に乗っているシロンの手に持っている看板にはこう書かれていた。

『お前、いつぺん死んでみる？』

数秒後、巧巳の悲鳴が聞こえたのは言うまでもない…

5分後…

同場所 美愛の部屋 17:35

「…やはり問題のメールがありました、しかも同じ文です。それよりも……………大丈夫ですか西条君？」

巧巳達の話聞くために美愛のパソコンの電源を切っていたが、優愛はまた起動したパソコンを操作してメールの項目を見ると、例のメールがあることを朔哉達に教えた。若干引き気味の朔哉とぼろぼろ状態の巧巳に彼の頭の上で噛み付いているシロン、そして腕まくりをしている剣二。…まあこの状況は説明しなくても分かりますね…ハイ…

「だ、大丈夫です。こういう事には慣れていますから…」

優愛の問いに頭から血が出ているのも関わらずそう答える巧巳。どう見ても大丈夫ではない。  
シロンが囁んだ所

「そ、そうですね…、それよりもやはり返答のメールは見つかりませんでした。せめてこのメールアドレスが誰かが分かれば…」

若干引き気味の優愛であったが美愛のパソコンを調べた結果を巧巳達に報告した。またその『ドラゴンブレイカー』のメールアドレスを見つけたが、何処の誰かが分からない以上調べる事が出来ないとため息をつきながら言った。

「ああ、それは俺達が調べる、こういう事なら得意からな」

剣二の殺気がある程度慣れた朔哉はソレの調査を申し込んだのだ。  
ドラゴンブレイカーのメールアドレス

「あ、じゃあお願いして…、あれ？そういえば西条君と鳴神君は？」

優愛はそう答え、さっきまでここにいたはずの巧巳と剣二がいないことに気が付いた。

「ああ、あの2人は先に帰らせた。剣二は夕食作りで巧巳が何か番組の予約を見るって言うってな」

「そ、そうでしたか…」

鳴神君は兎も角、西条君は如何なのか？と言う疑問があるが言えない優愛であった。

同時刻

優愛の家付近

「あの…シロン様？いい加減噛むの止めてくれませんか？意識が朦朧<sup>もろう</sup>してきたんだけど…」

その巧巳は今にも逝きそうな（あの世に）感じになってシロンに問いかけていた。

「流石にやり過ぎだな。シロンもいい、放してやれ」

剣二そう言つると同時に、シロンは噛むのを止めて剣二の肩に乗るのを確認した剣二は巧巳が回復するのを待っていた。

「それにしてもだ。あの『ドラゴンブレイカー』が事件に関与しているとは思っていなかった。そいつから聞き出せば何か分かるかもしれない」

剣二はその「ドラゴンブレイカー」が少なくとも何か知っているかもしれない。そう思い言う剣二であるが、

「そうなんだけど…。そういえば高科先生の事なんだけど、あの後病院の所に何回も行ったけど、特に変わらなくてね。何人かの患者さんを診ていたよ」

一応回復した巧巳は優愛に話していない事を剣二に報告したら、

「そうか。まあそう最初で何があるとは考えられないからな、引き続いて監視を続けてくれ。俺は献血の事を調査する」

そう言い、剣二は今日の出来事を思い出して、今日あった事を巧巳に話した…

回想

翠明学園 2 - B 教室 14 : 35

「謎の献血募集？ああ、確かこれに書いてあるよ。ほらこれ」

あの後授業に出ていた剣二（寝ていたが）は授業が終わった後風太に例の献血の事に聞いてみたのだ。そして風太が見せた紙には赤い背景に白文字で「B型の血液が不足しています！」と書かれていたのだ。

「これは渋谷駅でポケットティッシュに挟まっていた紙だけど、どうしたの？」

風太は当然の疑問を剣二に問いかけた時、

「後で話す、…ソレよりも気になるのがあるんだが、大輔…如何したんだ？あんなにやつれて？」

そう視線を向けると、なぜか痩せている大輔の姿があった。

「ハハ…、巧巳の魔弾龍が完成したから、今度は自分の魔弾龍を作れって白波さんに言われたらしくて昨日まで徹夜でがんばって何とか完成したんだけど…」

「ちょい待て、1日で完成したのか！？魔弾<sup>アレ</sup>龍の制作には何日も掛かるって聞いたが？」

風太は苦笑いで事の真相を剣二に説明したが、剣二は何故短時間に

魔弾龍が出来たのかを風太に聞いたら、

「まあ、基本的のフレームには巧巳の魔弾龍を作っている時にコツコツと作っていたって本人が言っていましたからね。後は魔弾核をセツトやその微調整などで疲れたんでしょう」

その答えに答えたのは氷牙で、恐らく本人が前に話していたのだろ  
う。

「しかも聞いた話じゃあ多段変形を積んでいるらしいからな」

「マジ！！…天才じゃないか？あいつ…」

炎火の一言で剣二は驚き、三住の隠された才能を見たのだ（しかし  
その本人は疲れているが…）。

回想終わり…

「三住君…、マジパネエ…」

剣二からその事を聞いた巧巳の一言は大輔の隠された才能を驚いて  
いる。

「まあ、それともう一つ。明日は炎火や氷牙、風太に雷丸、それに  
大輔が調査に参加するって言っていたし、学校にはおっさんが何と  
かする事になった」

剣二から明日の予定を聞いていた巧巳はある疑問がよぎった、それ  
は、

「…三住君、大丈夫なの？」

「大丈夫だ、たぶん…」

巧巳の素朴の疑問にそう曖昧な返事をする剣二であった。

そして翌日… 4月17日

剣二の家 道場 9:00

「よし、全員集まったようだな」

昨日の夜、剣二は炎火達に電話（巧巳は直接話した）をし集合場所を自分の家の道場にした。そして剣二は道場を見渡し全員（炎火、氷牙、風太、雷丸、巧巳、大輔、朔哉）が居る事を確認し、

「今日やる事は3つ、1つは昨日調べて分かった第1の事件に関わっていると思われる「ドラゴンブレイカー」のメールアドレスを調べる事。2つは昔、巧巳の医者であった高科先生を見張る事。そして3つは謎の献血を調べる事の3つだ」

剣二はこれから調べる事を話した後、

「で、誰がどれを担当するんだ？まさかそこまで考えてなかったってオチじゃないだろう？」

そう言ったのは炎火で、今回は大勢いるのだが役割分担する方がいいのだが、

「もちろん考えている。朔哉さんと風太は「ドラゴンブレイカー」のメールアドレスを調べてくれ。雷丸と巧巳は高科先生を交代でもいいから見張ってくれ。俺と炎火、氷牙と大輔は謎の献血の募集を調べる。他に質問は？」

そう剣二は全員に役割分担を言った後、質問は数回ありそれに答えてそのまま解散する事になった。

数時間後…

渋谷駅付近 13:00

剣二達は昨日風太から聞いた情報を元に単独行動で情報を集めていたが、

「収穫無しか…」

集合場所で炎火達の報告を聞いた剣二はあまりの情報不足な現状にため息をつき、ふと無精ひげの男のホールレスがスケッチを持ってこちらを見ていることに気が付いた。そしてそこに書かれていたのは…、

「その目、だれの目？」

「つう!!」

その書かれている言葉に気が付いた剣二はそのホールレスの男に近づいた。

「おいあんた、何でそんな言葉を知っているんだ？何か知っているのか？」

静かに、しかし重く言う剣二にそのホームレスの男は、スケッチのページをめくり次のページを見せた。「第4の事件はもうすぐ起こる」と。

「あんた、一体…？」

何者だと言おうとした時、「な、何打アレは！？」と悲鳴に近い声が聞こえてきたため声のした方向を見ると、15メートルぐらいか巨大な飛蝗<sup>バッタ</sup>が町中を壊しまくっていた。

「んなあ！？アレはまさか…、おいあんた早く避難、つて逃げ足はやっ…！」

剣二はあの巨大バッタがやつらの仕業だと思いホームレスの男に避難しろと男のいた方向を見ると居なくなっていた。おそらく巨大なバッタから逃げたのか、何か重大な何かを知っていて剣二から逃げたのか、その両方の理由かどうかはそのホームレスの男の心の中にあると思う。

「ちい、あのホームレス、何か手がかりを知っていそうだな」

『剣二、それよりもあいつ等を』

「分かっているさ」

剣二は腰にある激龍剣にそう答え、今はホームレスの事よりもやつらの対策をするのが先決だと思い腰にある激龍剣を持ち、

「ゲキリュウケン！」

そついい激龍剣を剣に変えて激龍剣の柄を上げ、

「リュウケンキー、発動！」

そう言いながら鍵穴にリュウケンキーを差し込み回し柄を下げた。

『チェンジ、リュウケンドー』

激龍剣の声と共に剣先に光が集まり、

「激龍、変身！！」

そう叫ぶと同時に光の龍が天に昇り、そして剣二の中へと入っていき剣二の体が光に包まれた。そして、

「地球と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を砕く！リュウケンドー、来・陣！！」

そして名乗りと共に剣二はリュウケンドーに変身した。

「よっしゃあ、俺達も行くぜ！！炎龍丸！」

『ああ、久しぶりのバトルだぜ！！』

炎火は自分の右手首にある龍の小物、えんりゅうまる炎龍丸に言い、その炎龍丸も  
そつ答え、

「エンリュウマル！」

炎火は炎龍拳を前に突き出しながら叫び、右腕が光に包まれてそれ

が晴れると蓮龍拳と同じ籠手だが蓮龍拳は少し明るい赤色に対し、炎龍丸は深紅一色になっていた。

「リュウエンキー、発動！」

炎火は懷から鍵を出し、炎龍丸の龍の口の所に鍵を差し込み回し、押し込んだ。

『チェンジ、リュウエンドー』

炎龍丸の声と共に先端部分に光が集まり、

「炎龍、変身！！」

炎龍丸を天に向け炎火が叫ぶと同時に光の龍が、しかしリュウケンダーに変身した時とは別の姿の龍が天に昇り、そして炎火の中へと入っていき炎火の体が光に包まれた。そして、

「炎と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を焼き尽くす！リュウエンドー、来・陣！！」

そこに居たのは赤き鎧を身に纏った拳闘士、リュウエンドーである。

「それでは僕たちも行きますよ水龍刀！」

『ああ、そうだな』

氷牙は腰にある龍の小物水龍刀すいりゅうとうに言い、水龍刀も答え、

「スイリュウトウ！」

氷牙は水龍刀を持ちながら叫ぶと水龍刀が光に包まれてそれが晴れると1本の青の鞘に収めていて鐔が無い日本刀が現れた。

「リュウスイキー、発動！」

氷牙は懷から鍵を出し、水龍刀の柄の後ろ部分、頭にかしら鍵を差し込み回し、押し込んだ。

『チェンジ、リュウスイドー』

水龍刀の声を確認した氷牙は抜刀し、その刀身に光が集まり、

「水龍、変身！！」

切っ先を天に向けて叫ぶと同時に、前の2人とは違う姿の光の龍が天に昇り、そして氷牙の中へと入っていき氷牙の体が光に包まれた。そして、

「水と共に生まれし龍が、闇に蠢く間を凍て尽くす！リュウスイドー、来・陣！！」

そこに居たのは蒼き鎧を身に纏った剣士、リュウスイドーである。

「よっしゃあ、俺達の初舞台だぜ双龍牙！」

『ええ、そうですね。けど油断しないで下さいね』

大輔は左手首にある龍の小物双龍牙ふりゅうがにいい、双龍牙も答え、

「ソウリュウガ！」

大輔は双龍牙を突き出しながら叫ぶと双龍牙が光に包まれ、その光の中から光が飛び出して大輔の右手に付いたのだ。それが晴れると両手には青緑色の龍の姿をした一對の片手剣《イメージは柄のない小太刀》が握られていた。

「リュウソウキー、発動！」

大輔は右手に握られていた双龍牙を地面に突き刺して、懷から取り出した鍵を左手に握っている双龍牙の柄の頭に鍵を差し込み回し、押し込んだ。

『チェンジ、リュウソウドー』

双龍牙の声を確認し、地面に突き刺していた双龍牙を再び掴み、2つの剣の刀身に光が集まり、

「双龍、変身！」

2つの切っ先を天に向けて叫ぶと同時に、2つの光が1つになりこれまた別の姿の光の龍が天に昇り、そして大輔の中に入っていき大輔の体が光に包まれた。そして、

「2つの龍が生まれし時、その牙を持って闇に蠢く魔を切り裂かん！リュウソウドー、来・陣！！」

そこに居たのは青緑の鎧を身に纏った双騎士、リュウソウドーである。

「如何やらあちらさんもやる気みたいだぜ……」

リュウケンドーの声に他の3人はその方向を見ると地面からジャマイマが大量に出てきたのだ。

「うわぁ、初めて見たけど気持ち悪いな、あれ…」

「まあ、いつ見ても気持ち悪いですけど…」

「へっ、どこからでもかかってきやがれ！」

上からリュウソウドー、リュウスイドー、リュウエンドーの順に三人の反応を見た後、リュウケンドーは宣言した。

「よし、行くぞー!!」

「」「応!!!!」「」「」

その言葉と共に4人はジャマイマの大群に突っ込んだ!

次回に続く…

## 第11話 遭遇と戦闘（後書き）

いかかでしょうか？

ラストでバトルに突入したのは実はある理由があるのです。

それを考えながら次回にお会いしましょう。それではまた…

PS いつの間にか総合評価20、お気に入り登録が7、さらには  
PV1万突破となりました。まだまだ面白くなるこの『CHAOS  
DRAGON SWORD』。これからもよろしく願います  
！！

## 第12話 炎上と驚愕と発生（前書き）

どうもセイワです！

一か月掛ってしまいました。短いかもしれませんが見てください。

それでは始まります…

## 第12話 炎上と驚愕と発生

同時刻

とある病院周辺…

その頃、巧巳と雷丸は高科先生を見張るため近くのマンションの屋上で監視を続けていた。と、

『む、巧巳、どうやら剣二達の周辺に魔物の反応を探知した』

雷丸と交代で見張る事になっていた巧巳に蓮龍拳が報告した。

「え、そうなの？けど剣二達が居るから大丈夫じゃないの？」

望遠鏡で高科先生を観察していた巧巳は、蓮龍拳の報告に驚いたが心配はしなかった。その理由は、剣二達の秘められた力である。

『まあ、そうだな。さっき剣二達の居る方に変身した波動をキャッチした。恐らく大丈夫だろう』

蓮龍拳もよほど心配していなく、先程感知した情報を巧巳に報告した。

「なら安心だね」

巧巳はそう言い、高科先生の監視を続行した。

「…けど、三住君大丈夫かな？」

しかしどこかで心配をする巧巳であった。

その剣二達はというと…

「どりゃああああ!!」

その咆哮と共にジャマイマの群れに突っ込んでいくリュウエンドー、  
勿論ジャマイマも彼を迎撃するために動いたが、

「そんな事で俺を止められるかあ!!」

そんな事お構いなく、先頭に行くジャマイマの顔面に正拳突きを炸裂し、更に後ろに居たジャマイマに顔面にめり込んでいるジャマイマを起点にし、正拳突きの勢いをそのまま前転し、ジャマイマの頭上<sup>かかと</sup>に踵落としし、拳や蹴りのコンボをジャマイマの群れに炸裂させていくリュウエンドー。

「やれやれ炎火は、相変わらずの突撃ぶりですね…、剣二の方がおとなしい位ですね」

リュウエンドーの暴れぶりにリュウスイドーは半分呆れてその光景を見ていた。

「オイオイ、あいつばかり任せきりにする気か？俺たちも行くぞ!!」

リュウケンドーは他の2人に言うと駆け出し、

「あ、待ってください!」

「そうだった、待ってくれよお!」

リュウスイードとリュウソウドーもその後を追った。

「おりゃあ!」

先にジャマイマの群れに着いたリュウケンドーはその内の一体を激龍剣で斬り裂き、

「やいやいワイドン（九州弁でお前たち）、真昼間まっひるまからの悪行、たとえお天道様が許してもこのオイ、リュウケンドーが許さねえ!!」

そうリュウケンドーは高々に言い、其のままジャマイマに斬り込んだ。

「はあ!」

「せいりゃあ!」

遅れてやって来たリュウスイードは水龍刀を抜刀しそのまま切り、リュウソウドーは手にした双龍牙で×ばうの字でジャマイマを切り裂いた。

「やれやれあの2人は…、仕方ありません。リュウソウドー、あなたは私と一緒に敵の中央深くに行ってかく乱し、其のまま敵の殲滅します。初めての戦いですが頑張ってください」

「ああ、任せてくれ!」

リュウスイードはリュウソウドーに自分の作戦を説明し、リュウソ

ウドーはそれに同意し、2人は敵陣深くに切り込んだ。

「はあああああ!!」

リュウスイドーは気合いと共に一筋の閃光が走ると、ジャマイマは数匹切り裂かれた。さっきの光は抜刀した水龍刀の刀身であるのだ。しかしそれよりも凄いのはそのすさまじき速さ、抜くと同時に切る「居合い」、そして鞘に戻すスピードはもはや神速を超えているのだ。

「凄いな…、氷牙も剣道の稽古も強かったし…けど俺だつて行くぜ  
! 双龍牙! 銃モード!!」

リュウソウドーは感心し、そして自分も負けていないと意気込むと双龍牙に向かつて叫び、双龍牙は通常の牙モードから柄を峰の方に折り刀身が後ろに少しスライドし銃口が見え、簡易的な2丁の銃に変形し、

「いつけええええ!!」

リュウソウドーはそう言いながら柄にあるトリガーを引き、ジャマイマを撃ち続ける。その射撃にむらがあるが数を減っていく。

「続けて、双龍牙、ランサー銃モード!」

そうリュウソウドーは双龍牙を銃モードから牙モードに戻し、それらを峰の所を合し両刃にし、その柄が自分と同じ背丈に伸びると一振りの槍に変わり、

「発っ!!」

気合一線、槍に変わった双龍牙をリュウソウドーは振り回し、自分の周りにいたジャマイマを薙ぎ倒した。

「うつひゃあ…、大輔、新入りなのに大立ち回りを演じているなあ。まあ、俺も似たような事をやったからな…」

『お前もそう言えるのか？まあ自覚があるみたいだな…』

それを遠くで見ていたのはリュウケンドーである。その手に握っている激龍剣は呆れながらツツコミを入れると、

『しかしどうする？あの魔物を倒すにも足止めするにも力が足りんぞ』

今現在の自分たちの戦力を分析しての答えを言った激龍剣だが、

「足りない力はこれを使うしかない、だろ」

しかしリュウケンドーは意図が判っていて激龍剣の柄を上げ鍵穴を現し、腰にあるマダンホルダーを回しその内の一本を取り出し、

「ファイヤーキー、発動！」

そう言いながら鍵穴にファイヤーキーを差し込み回し柄を下げた。

『チェンジ、ファイヤーリュウケンドー』

激龍剣の声と共に剣先に光…ではなく赤い炎が集まり、

「火炎、武装！！」

リュウケンドーは叫び、剣先に集まった炎は彼の周りを囲みながら飛び、その姿を赤い炎の龍に変わり、リュウケンドーの中に入っていた。そしてその体を炎に包まれ、それが晴れるとリュウケンドーの肩、肘、膝、頭に炎を模った細部が付き、胸のクリスタルの部分（通常は白い）が赤い姿に変わっていたのだ。この姿は、

「ファイヤーリュウケンドー、来・陣！！」

リュウケンドーが炎の力を取り込み、その力を自在に操るために変えた姿。ファイヤーリュウケンドーだ！！

「今日は熱く行くぜ！オラア！！」

ファイヤーリュウケンドー（以下Fリュウケンドー）は左腰に小さくした激龍剣を装着（小さくした時はモバイルモードと言う）し、近くにいたジャマイマの一体をつかみ、そして豪快に投げ飛ばした！！

『『『ギジャアアアアア』』』

投げた先にいたジャマイマの何人かをボーリングのピンのごとく倒しそのまま消滅させた。この形態になると力が上がるみたいである。

「オラア、もう一丁！！」

ともう1度ジャマイマを捕まえ、ボーリング投げを繰り返すFリュウケンドーだったが、

「あり？もうオランな。じゃあ…こうだあああああああああ！

！  
」

如何やら自分が掴んでいるジャマイマが最後の一体みたく動きが止まったフリユウケンドーであったが、すぐに行動を起こし掴んだジャマイマをバツタ魔物目掛けて投げたのである。

『グギヤアアアア！！』

しかしバツタ魔物は効いていなく逆に怒りを買い、地面に落ちたジャマイマを踏みつけ、投げたフリユウケンドーを睨みつけた！しかし、そこには誰もいなく、

「はああああ！」

「うおおおりゃあああ！！」

「ぜりいやあああ！！」

その声はバツタ魔物の上から聞こえた。そこには各々の武器を下に構えたフリユウケンドー、リュウスイドー、リュウソウドー（双龍牙は槍モードであった（上からリュウスイドー、リュウソウドー、フリユウケンドーの順）。おそらくバツタ魔物がジャマイマを踏みつける間にジャンプしたのだろう。そしてそのまま落下して、

『グギヤアアアアアアアアアアア！！』

バツタ魔物の背中に各々の武器を突き刺した！しかし、ダメージは与えたが背中がうつとうしく感じたか振り落そうと動き出した。しかし、目の前には、

「俺を忘れるんじゃないやねええええぜ！！」

右腕を振りかぶり、突っ込んできたリュウエンドーが映り、バツタ魔物の左側の複眼に正拳を叩き込んだ。

『グギャヤヤヤヤヤアアアアアアアア！?!?!?!?!  
?』

その威力は凄まじく、リュウエンドーの右腕が左の複眼にめり込んでいて、そこから紫の液体が所々に出てきていて、リュウエンドーはそこから自分の右腕を引っかくとそこから大量の紫の液体が流れ出た。おそらく紫の液体は魔物の血だろう。おそらく激痛がバツタ魔物を襲い、倒れて何か悲鳴を上げている。

「うげえ…、後でクリーニングに出した方がいいのか？」

『それはいいと思うぜ、血はほって置くと固まって取れないし』

バツタ魔物の返り血を浴び、いつの間にか地面に着地していたリュウエンドーは自分に付いた血を見て嫌そうにいい、炎龍丸は何処で知ったか定かではないがそれに同意した。

「よし、一気に決めるぞ！」

いつの間にかフリーウケンドーがリュウエンドーの近くにいる。おそらくはバツタ魔物が倒れる前に離脱したのだろう。同じく遠くでリュウスイドーとリュウソウドーがいるのを確認できる。

「では僕から…」

先に動いたのはリュウスイドーで、右腰にあるマダンホルダーを回しその内の一本を取り出し、





そう言いながら左手に握っている双龍牙の柄の頭に鍵を差し込み回し、押し込んだ。

『ファイナルブレイク』

双龍牙の声を確認したリュウソードは地面に突き刺していた双龍牙を再び掴み、柄の頭同士を繋ぐと刃が輝き、

「双龍牙、飛来閃<sup>ひらいせん</sup>！！」

そう言い双龍牙を投げ、回りながら飛来していき正面からバツタ魔物を右上から左下に斬り裂き、魔物の後ろで軌道を変えて戻って後ろから左上から右下に切り裂き、リュウソードのもとに戻っていき彼の足もとに突き刺さり、

「龍の牙に切り裂かれて、眠れ……」

×の字に切り裂かれたバツタ魔物は光の粒子になり、マダンキーを残して消えた。そのマダンキーをリュウソードが掴むが、ゆっくりと倒れたのだ。

「あっちゃあ、ヤッパリこうなったか。炎火、氷牙、人が戻って来ない内に逃げるぞ」

こうなるのを予測していたフリーウケンドーはリュウエンドーとリュウスイドーに言うと、リュウソードを担ぎこの場所から離脱した。

それから数時間後…

とある花屋付近 15:00

「ラ～ラララ、ラ～ラ ララ、ララララ

ラララ、ラララ ララララ

ララ、ララ、ラ、ラ～～～」

ラ～ラララ、 ララララララ

ラララ ララララララ

ラララ ラララララ～～～」

花屋「イーグルウイング」の店長である葵（赤いエプロンに白い服、  
紅いロングスカート）は、どこかで聞いて様な曲を歌いながら花に  
水を与えていた。と、

「こんにちは葵さん。店の景気どうですか？」

声がしたので歌うのを止めてその方を見た葵は、声をかけたのが剣  
二（三住を担いでいる）で、後から炎火、氷牙がいる事に気が付い  
た。

「ま、何とかがんばっているわ。それよりもどうしたの？」

葵はこのところの状態を話をして、何故剣二は三住を担いでいるの  
が疑問に思い質問してきた。

「あ、実はその事なんです…「久しぶりね、剣二君。それに葵も」  
…くららさん！？どうしてここにいますか！？」

質問に答えようとする剣二であったが、突然声をかけられその方を見  
ると、そこには剣二が前に警視庁に行った時と同じ服を着ている

くららが立っていた。何故ここにいるかと聞くが、その答えは彼女の後ろの人物を見たとき納得した。その人物は…

「い、いやあ…」

申し訳ないような声を出している朔哉と風太である。

事の起こりは数時間前…

とある喫茶店 10:00

「さてと、あいつが素直に来ると良いんだけど…」

そういいながらメニューを選んでいる朔哉と、その隣でノートパソコンで何かを調べている風太がいた。何故彼らがここにいる理由は、彼女に協力を求めているからだ。

「お待たせ。で、私に何か用なの？」

とそこに現れたのはくららである。しかし彼女はなぜか不機嫌であった。

「おお、来たか。ま、一応座れよ」

しかし、そんなくららとは対照的に誘う朔哉である。

「あんたが私に頼む時は、いつともろくでもない事がないからね。もしも「プライベートの取材がしたい」って言ったら撃つわよ」

そついいながら上着の下にあるホルスターの中にある銃を掴んでいつでも抜けるように朔哉を睨むくら。

「あ、いや、そんな事じゃ無くてな…、ニュージエネの件って言うたらどうだ？」

一瞬ひるんだ朔哉だったが、小声で用件を言った。

「！、何か掴んだの？」

すぐに掴んだ銃を離し小声で質問するくら。たとえ人ごみの中にいても誰かが見ているとは限らないし、もし内部に裏切り者がいたらそれこそ洒落しゃれにならないからだ。

「ああ、一応これを見てくれ」

そついいながら、朔哉は自分のメモ帳をくららに渡したのだ。

「…、なるほどね…。けどまさか第1の被害者達に共通点があったなんてね。けどその「ドラゴンブレイカー」のメールアドレスを調べるとはいえどうやって…」

メモ帳を読んだくららは第1の被害者の共通点を見つけた朔哉達を感心する一方、それを調べる方法を聞こうとした時に嫌な予感を感じていたのだ。

「まあ、そついうこと。宜しく願いしますねくららさん」

その予感ハ的中し、笑顔で答える朔哉。そつくららの権限を利用して調査をしようとする魂胆である。

「…ヤッパリあんと関わるとろくでもない事になるのね…」

諦めているのか、ため息をつくくららであった。

で現在

花屋「イーグルウイング」店の奥の部屋

「で、ついでだから情報を整理したいし、あなた達と話すためにここに来たってわけ」

くららは説明しながら手元にあるコーヒーを飲んだ。この部屋は葵が寝ている部屋でもあり三住を寝かせる為と情報を交換するための部屋として選んだのである。この部屋には葵やくららの他、剣二、炎火、氷牙、風太、朔哉に、後から合流した巧巳と雷丸がいる。

「で、そつちで掴んだ情報は何なんだ？」

剣二はくらら達が調べた事を聞こうとした。しかし、くららの表情はなぜか暗い。

「…単刀直入に言うわ。『ドラゴンブレイカー』は…もうこの世にはいない」

重く閉ざされていたくららの口から衝撃の事実が判明した。

「え？それってどういう事？」

葵はこの場にいる全員を代表としていった。

“ 真実に近づく事を言った時に…”

「『ドラゴンブレイカー』は、第2の事件の被害者だと、分かったからよ」

くらはらは続けて衝撃的な事実を言ったのだ。つまり『ドラゴンブレイカー』は第2の事件『妊娠男』の被害者という事実であるのならば…

「…口封じか…、くそっ」

「けどこれである事は分かったわ。犯人はある目的がある、しかも大掛かりな…ね」

剣二が舌打ちをしたが、くらはらはそれを逆手に取り第2の事件と第3の事件は同じ目的で殺されたという事を推測したのだ。

“ 偶然がどうかは分からないが…”

「？、ちょっと待って、はいもしも…、！！分かったわすぐに行く！！…どうやら、犯人は次の段階に入ったわ。『狂気』地味な事件としてね…」

突然の着信音が聞こえて、それが自分の携帯であることに気が付いたくらはらは応答したら、とんでもない事が起きたと連絡が入った。

それをくらら本人はすぐに向かうと電話を切って、剣二達に向かつて電話の内容を言ったのだ。つまりは…

“ 第4の事件が発生した瞬間だった。”

次回に続く…

## 第12話 炎上と驚愕と発生（後書き）

いかかだったでしょうか？

まさかの展開に驚いた方も居るでしょう。

次回は、なんと新たに参加する作品を出します。ヒントは「ダンク  
ーガノヴァ」と共演した作品です。ゲームだけど

それではまた…

見て来た人は1万2千突破！ありがとうございます！！

### 第13話 再会（前書き）

どうもセイワです！

これから25日に更新できるように頑張ります。

それではどうぞ…

## 第13話 再会

前回の話から30分後：

井乃頭線渋谷駅構内のトイレ付近 15：30

「ここ井乃頭線渋谷駅で今日午後三時頃、男性トイレ内で男性の死体が発見されました。警察側はまだ発表はしませんが『渋谷ニユージエネレーションの狂気』の関連性が高いと見られ、調査を進めています」

あの後現場についたくらは、現場の前でニュースキャスターの解説を聞いて改めて現場に入り、青いビニールを被せている遺体に近づきそのビニールを取り遺体を確認した。

「！！、…『百聞は一見に如かず』って言うけどね…」

そう言ったが顔色が悪くなり遺体をビニールに被り直した。

「どうだ、麻薬中毒者はそういう状態にならないか？」

その後ろで判刑事がくららに對して言ったが、

「ならないわ、第一“緑色に変色していて血を全て抜かれてミイラ状態”になる麻薬は私の耳に入っていないし、それにこの状況、これは他殺ね」

自分が経験した麻薬症状には無い事と、異常なまでの現状にくらは殺人と仮定した。

「まあ、確かにこれは他殺だな。おまけに何やら変なメッセージもあるし……」

「変なメッセージ？」

頭をかきながら判は気になった事を言ったのでくらは質問した。

「ああ、遺体のあった個室で血文字で『その目だれの目？』って書かれていてな。俺の勘じゃ犯人が書いたんじゃないかって思うんだが……」

判が言うと同時にくらがその遺体があった個室のドアを開けるとそこには確かに血文字で『その目だれの目？』と書かれていた。

（やっぱり、犯人は巧巳の過去を知っている可能性が出てきたって事ね）

くらはそう思いながら判に顔を向け、

「……それで、被害者の身元は？」

「現在の所調査中だ、ったく余計な仕事増やすなってっの」

被害者の身元を聞こうとしたくらはであつたがまだ不明であり、その調査に怒れる判であつた。

「せ、先輩iiiiiiii！た、大変っす！！」

そう言いながら、くらは達の所に諏訪が慌てて来たのだ。

「ん、諏訪？どうした？何か情報が……其れ処じゃないっす！、ついさっき取材の1人が『インターネットオークションに謎の遺体

の写真が出品された”」って妙な事を言っていたっす！！で気にな  
って調べていたらこれが映っていたっす！！」…どれどれ、！！こ  
こりゃあ…」

何か情報が手に入ったのかと判が尋ねたが、諏訪は其れ処ではなく  
自分がつかんだ情報を話し、携帯を取り出しある写真を判たちに見  
せる。そう先ほど自分達が見た、“血液を全て抜かれて全身が緑色  
に変色して、ミイラのような状態”の遺体がそこに映っていた。

「出品者は…『vampaiYA』？ヴァンパイアの“ア”の  
部分が“ヤ”になっているなんておかしいわね」

くらは出品者の名前が吸血鬼の英名である事に気が付いたが最後  
の文字だけが間違っているにもかかわらず大文字を使っている所に  
気が付いた。

「もしかしたら、『ヴァンパイ“屋”』かも知れんな。諏訪、こい  
つを調べる。何か分かるかもしれないぞ」

判は自分の考えを言うと言つと諏訪にオークションに出したものの調べる  
と命令したのだ。

（それだけじゃない、朔哉が見せたあのメモに書かれていた“文章  
”がここにも書いてあるなんてね。これで何か分かるといいんだけ  
れど）

くらはそう思いながら遺体写真につけてある出品者の見出しを思  
い出していた。

「B型の血液が不足しています!」と。

その頃剣二達は…

同時刻 イーグルウイング店内

『今入った情報によりますと事件発生の数分前、インターネットオークションに遺体写真が出品されたとの情報が入りました。警察の発表はまだですが当番組はこれは犯人が…』

「大変な事になってきたわね…っていつもの事だけど」

テレビを見ていた葵はいつもの事だとため息をついた。

「で、話を戻すけど『ドラゴンブレイカー』が第2の事件の被害者って本当なの?」

巧巳は朔哉に向けて質問してきたのだ。

「ああ、間違いない。確認した後、直接その本人の自宅に行ってパソコンのメールを確認したら、本人だと分かった。が、返答用のメールが見つからなかったが、データだけを持ってきて今風太がその修復に取り掛かっている」

朔哉はそう頷き、視線を風太に移した。そこにはもの凄いスピードでキーを打ち込む風太の姿があつた。

「まったく、なんて事をしてくれたんだ『ドラゴンブレイカー』は…。自分のパソコンにウィルスを感染させるなんて狂気の定かじゃないよ」

しかし、思ったよりも復旧に時間が掛かるみたたく、風太は頭を悩ましていた。

「“ウイルス”？なあ巧巳、お前パソコン得意だから聞くけど、パソコンに病気が罹<sup>かか</sup>るのか？」

炎火は分からない事があつたらしく巧巳に聞いてみた。

「いや、そうじゃないんだよ炎火、せつかくだから教えるけど、“コンピュータウイルス”が正式名なんだ。具体的に言うと感染先のファイル、この場合宿主って言うけどその一部を書き換えて自分のコピーを追加、これは感染したって言うんだ。で、感染した宿主のプログラムを実行すると増殖していくんだ」

巧巳は炎火にコンピュータウイルスを簡単に説明した。

「その自分がコピーしたプログラムが厄介で、おそらく『ドラゴンブレイカー』が使ったのはパソコンのデータを破壊するプログラムだと思うんだ。中には盗撮するプログラムや色々あって其れを防ぐ“ワクチン”も在るけど、そのウイルスの種類は数万に上っていて今も新しいウイルスが出来ているんだよ」

「ウゲ…、じゃあまさにインフルエンザや癌<sup>ガン</sup>と同じじゃないかよ、それ…」

「まあそうなるね、感染したファイルを知らないで複製することで広がっていくさまが、炎火が知っているウイルスに似ているからそう名付けたんだ」

巧巳の説明を聞いていた炎火はまさに病原菌だと思っていて言った後、巧巳もそれに同意しその名前の意味も教えた。

「因みに言うけどな、もしこんな事したら電子計算機損壊等業務妨害罪、偽計業務妨害罪、器物損壊罪、電磁的記録毀棄罪、信用毀棄罪、業務妨害罪等の規定が適用されて、電子計算機損壊等業務妨害罪の場合だと5年以下の懲役又は100万以下の罰金に処せられるんだ。この小説を見ている皆もこれはやっては駄目だぞ」

「いや、それを言っても分からないと思いますけど…?」

朔哉はもしこのコンピュータウイルスをした時の刑法を言ったが、巧巳は呆れてツツコミを言ったのだ。

「で、話を戻すが、風太、復旧できるのか?」

剣二は話を戻して『ドラゴンブレイカー』のパソコンのデータを復旧できるか聞いてみたが、

「結論から言うけど、駄目だね。一通り見たけど、どうやら復旧するとまた破壊するプログラムが入っていて、それを全て無効化するのに時間が掛かり過ぎるんだ。今だってアンチウイルスプログラムを作動しないと僕のパソコンが駄目になっちゃうんだよ。けど…」

「?けど、どうした?」

風太は剣二の問いに答えたが思ったよりも復旧は難しいのと、もしそんな事したらそのパソコンが破壊するプログラムが積んでいたことで難儀していたが風太はそんな事よりも何かおかしいところに気が付いている見たく、そこに気が付いた氷牙はその事を聞いてみたのだ。

「うん、このプログラム、唯の一人のゲーマーが組んだにはやけに手を込んでいると思うんだ。ウイルスを組むだけなら18歳でも出

来るんだけど、ここまで強力で、更には修復をさせないプログラムを組むなんて、無理に等しいんだよ」

「つまり、後ろには大掛かりな組織がいる、ってことでござるか？」

風太はこのプログラム自体、1人の人間がやったのではシステム自体組む事に無理に等しくそんな手の込んだ手口を考えるのは裏で何か組織的だと推測して、雷丸はその事に気が付いて聞いてみたのだ。

「確かにそうかもしれないな、こりゃあ第2の事件の被害者も調べる必要も出てきたか。とりあえず『ドラゴンブレイカー』のデータは“あいつ”の所に持っていく。“あいつ”の腕ならそんなウィルスも撃退できるし、何か知っていそうだしな」

朔哉は今までの経緯をまとめると、そのデータを知り合いのところを持っていくといった。

「では頼みます。ああ、そうそう高科先生の事だけど、あんまり変わったところはなかったよ」

と巧巳は高科先生の見張りについて剣二に報告した。

「そうか…、しかし第4の事件が発生した今じゃ「すいませ〜」ん」こ、この声は、まさか…」

剣二はこれからの事について話そうとした時、店の外から女の声が聞こえてきたのだ。しかも剣二達は何か知っているようで、

「あ、そういえばさつきジョニーから電話が来てな「今日“グランナイツ”のメンバー以下“サンドマン”伯爵一行が扶桑に滞在する」って言っていてそれを言うのを忘れていたな。あはははははははは」

と今まで忘れていたものを思い出した朔哉は笑いながら剣二達にそう言った。

「朔哉、あんた最初に言いなさいよ…」

葵は頭を抱えながら呆れたように言うのであった。

その店の外では…

「すいませ〜ん、誰かいませんか〜？…おかしいですねえ、ジョニー様の話じゃ剣二様達もここにいて話でしたけど」

そう言ったのは髪はピンクのショートヘヤーの上に眼鏡、しかし着ている服がメイドと、どこか奇抜な格好をしている女の人である。

「まあ、ここで待っていたら出てくるんじゃないの？けど、久しぶりに飲み仲間と飲めるからねえ」

そう言ったのは金髪のポニーテールで胸が以上にでかい女性でおまけに着ている服もやばいやつであった。

「まあ、確かにお姉さまと飲める人って限られているけど、ほどほどにしてくださいよ」

とため息をついているのは空色の髪にショートポニーをしていて先ほどの2人とはまともな服を着た女性である。

「そうそう、飲みすぎて被害が来るのは私達なのよ、この前だって酒を飲みすぎて私達に酒を無理やり飲まされて後で大変だったから」

金髪の女性に注意したのは赤毛のツインテールでこれまた赤が目立つ服を着たの女の子である。

「そんな事があつたの？」

今のやり取りから疑問に思っただけ聞いてきたのは銀色の長髪をしているが、白を基本とした俗にゴスロリの服を着た少女だ。

「ああ、大変だったなあ。俺も危く飲まされそうになるし、“トウガ”は飲んで怒り上戸になるし、“フエイ”も泣き上戸になるし、“ルナ”は笑い上戸になるし、大変だったんだからな…」

思い出しながらため息をついたのは赤くツンツン頭に白い服を着た男の子である。

「え…、“エイジ”…僕どのくらい怒っていたの？」

そう驚いていたのは髪は青色の短髪で青い服を着ていて先ほど“トウガ”と呼ばれた男の子である。

「そりゃあ…、ん、あそこにいるのは…。光に地可じゃないか？後は確か巧巳の妹の七海に…後だれだ？」

その時の事を話そうとした“エイジ”であつたがふと店の所に歩いていく複数の女性を見て呟いた。

「あんたたち、帰ってきたの！？、来ていたら知らせてもいいのに

…」

最初に気が付いたのは地可で、驚いて駆け出して話をした。どうやら知り合いのようである。

「あの〱地可さん、知り合いなんですか？」

その後から光、七海、梨深の3人が来て彼らを知らない梨深は地可に聞いてきた。

「え、ああそうか。咲畑さんは今月中に転校したから知らないか。じゃあ紹介をするわね。一見おとなしそうな感じの男の子は天空<sup>てんくう</sup>侍斗牙<sup>とつが</sup>」

「初めまして」

地可の紹介を受けた斗牙はお辞儀をした。

「もう1人の男の子は紅<sup>しぐれ</sup> 永侍<sup>えいじ</sup>」  
「よろしくな！」

そう言いながら手を上げた。

「で、こつちの赤毛の女の子は城<sup>ぐすく</sup> 琉菜<sup>るな</sup>、沖縄の出身なのよ」

「ええ、よろしくね。でこのおとなしそうなこの子はリイル・クレスよ」

「こ、こんにちは。あ、この子はロロットっていうの、よ、よろしく」

説明を受けた琉菜は続けてリイルの紹介をし、リイルは少し緊張したが自分の肩に乗っていたフェレットを手に置きその紹介をしたの

だ。

「では、後の紹介は私がします。私はエイナと申します。で金髪の女性は立花<sup>たちばな</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>様でその隣にいるのがフェイ・シンルー様です」

「よろしく」

「同じく、それはそうとあなたの名前を覚えてくれないしら？」

最後にメイド服を着ているエイナが地可の紹介を引き継ぎ、自分の紹介をしてから瑞希とフェイの紹介をし瑞希は軽く挨拶をし、フェイは梨深のことを知りたいみたいく話を聞こうとした。

「え、あ、はい。私の名前は咲畑 梨深<sup>りふみ</sup>です。よろしくお願いします！ビシッ！」

と自分の名前を言った梨深は口癖の後に敬礼をした、のだが…

「え？何それ？見たところ僕と同じ歳だけど…恥ずかしくないの？」

斗牙は笑顔（悪意0）でそう質問したのだ。それからしばらく葵が店から出てくるまで、気まずい雰囲気が続いた…

それから数分後…

「…それで咲畑のやつがあんなふうになっているのか…」

そういいながらエイナが淹れてくれたコーヒー（ブラック）を飲んでいる剣二は永侍から聞いてその視線を向けた。その先には、

「いじいじ、いじいじ…」

部屋の隅で体育座りをして地面にのの字を書いている梨深の姿があった。

「いいじゃん、いいじゃん、どうせ私は、どうせ私は…」

しかも落ち込みが凄く途中から涙声になっている。

「…、まああいつの事はほっとくとして…」

剣二はその事は後で斗牙に謝らせる事にして、その視線をある人物に向けた。

「…、でねそのショップで可愛い服があったから光ちゃんの分も買ったから後で着てね♪」

「ええ、後で着るから“あそこ”の話をしてよ」

「わあ、私も私も聞きます！！」

「そうね、どういった所なのか聞きたいしね」

「うん、じゃあ私たちが別れた後の話からです…」

そこには琉菜とリイルが、光、地可、七海に“あそこ”にいった話をしていた。

「で、こっちでの商売はどうなっているんですか？」

「まあ、ぼちぼちって所ね」

「まあ、後で酒でも飲みながら話しましょうよ」

また別の所では、葵、フェイ、瑞希の3人で話をしている。

「まあ、せつかくの再会に水をさすのはよくないな。俺達も俺達ではなしをしようじゃないか」

そう言つて剣二は、斗牙、永侍と一緒に男性陣と共に話をしたのだつた。

そうして時間が過ぎていき氣が付くと日が沈むごろになっていた。

一方その頃…

(ここからは音声だけで楽しんでください)

「では、そちらでも“やつら”が出現したんですね？」

「ああ、だがあちらでは“幹部クラス”が現れなかったのが氣になつてな、それを報告するのとそつちで抱えている問題を手伝つたために長期滞在する事にしたのだ」

「それは私も賛成だ“サンドマン”伯爵、この事件は何かとてつもない事が起きる前触れでないのかと私が考えている」

「すでに“ストライカーズ”の帰還を始めている。これでやつらが何かしら行動を起こすかもしれん」

「だが…、資料で見た限りこの事件は何か“おかしい”とは思いませんが“F・S・”。まるで何かが別の力が働いたように思えるのだが…」

「ええ、その事はおそらく彼らも気付くでしょう。そして力の正体も知ることになるかもしれん」

「うむ、“表”と“裏”の世界を守るために、彼らの活躍に期待しよう」

「そうですね」

「あの〜〜、 “天地” 総司令官、サンドマン伯爵、F・S・さん。いい加減にお風呂からあがりませんか？ 長話は後でもいけますし…」

「む。 “田中” 君か？ そうだな。では後の話は後にしようか…」

「そうですね…」

「同意見だ…」

次回に続く…

### 第13話 再会（後書き）

いかがでしょうか？

答えは「超重神グラヴィオン」でした。まあなぜ名前に当て字が多いのは「この世界の彼ら」だと言っておきましょうか。

しかし、最後の方で何やら怪しげな話がありますが、ここは一応覚えてもらった方がいいと思います。

おかげさまでアクセス数1万3千突破！ありがとうございます。

それではまた…次回も待っています…

## 第14話 失踪と運命の出会い（前書き）

どうもセイワです。

今回は何とか出来ました。

そしてまたしてもある作品が名前ですが出ます。

それでは始まります…

## 第14話 失踪と運命の出会い

前回の話から翌日…

4月18日 翠明学園 2 - B教室 8 : 30

第4の事件から翌日。クラスでは昨日の事件もありその事で話題となっていた。

「オイオイ聞いたか？今回の事件で犯人が残した「その目、だれの目？」は第1から第3までの被害者が言っていた言葉らしいぞ？」  
「へえ、そうなんだ。それよりも知っているか？IS学園に男子生徒が入っている噂」

「ああ、知っている。確かクラス代表を決めるために“ブリタリア”の代表候補生との模擬戦をやっていた時に正体不明のISが乱入して噂の男子のISと合体。ブリタリアの代表候補に勝ったそうだな」

「いいや、実の所その時に男子もエネルギー切れで引き分けみたいだぜ…、って不動のおっさんが来たみたいだ」

「お前ら、席につけー…、よし今日は剣二は起きているようだな。今日はこのクラスに新しい仲間を紹介する。しかも今回は4人で副担任も就く事になった」

とそこに不動のおっさんが現れてクラス全員に席に着くように言っ  
て、重大な事を言った。すなわち、クラスに転校生が来るのだ。し  
かも4人。それに副担任も来るようである。

「では入っていいぞー」

と不動のおっさんの言葉で入ってきたのは…

「初めまして、天空侍 斗牙です」

「よう、俺は紅 永侍だ」

「私は、城 琉菜よ」

「今日からこのクラスの副担任になる立花 瑞希よ。よろしく」

そこに現れたのは、昨日剣二達とあった4人である。が、

「不動先生、後1人は？」

クラスの学級委員である地可の言葉通り後1人いなかったのだ。と、

「…」

前のドアから様子を見ている髪は金髪でツインテールをした小柄な女子がいるのだった。

「ねえねえ、あなたの名前は…」

と琉菜はその女子に近づいて名前を聞こうとしたのだが…、

「彼女の名前は折原 梢<sup>おりはら しょう</sup>、実はある事情から言葉を話せなくなっているんだ。まあ仲良くしてくれ。それともう1つ、昨日事件があったて早めに帰したが今回は昨日の分も含めて勉強する。特に昨日休んだ剣二、炎火、氷牙、風太、雷丸、三住の6人には放課後、補習授業をする！」

不動は梢が話せないと補足をした。また昨日の事件で学園側は早めに帰したが今日はその分の授業をすると共に剣二達に放課後に補習

授業をする事を宣言した。

「そりゃないぜ、おっさあああああぁん」

と炎火がため息を漏らしていた。

「炎火…、特にお前は成績が悪いからしっかり勉強するんだぞ。それによく見る、他のやつらは黙って…」

不動は炎火に注意し、他の5人は黙って聞いている事を言いかけたが、

「ZZZZZZ…」

不動の目に入ってきたのは、すでに寝ている剣二であった…

数時間後…

同場所 10:20

「エッ、じゃあ斗牙君は学校は初めて来たの？」

ホームルームと1時間目が終わり、休み時間になると転校生である斗牙の周りには他の女子が集まっていて、質問をしていた。

「うん、幼い頃に親を亡くしていてね、孤児院で育ったんだ。で、引き取った所で永侍達と出会ったんだ」

「ま、俺はその時姉ちゃんの紹介で来たんだけれどな」

斗牙は質問に答え、その隣にいた永侍も当時の事を思い出しながら

はなしていた。

「で、私もその時の腐れ縁だね。まあ簡単に言えば“血の繋がらない家族”なのよ」

「へええ、そうなんだ…」

横から琉菜も彼らの関係を言い、それに理解する女子。

「…」

しかし同じ転校生である梢はなぜか話の輪に入ろうとしなかったのだ。

「どうしたの、梢ちゃん？」

それに気が付いた琉菜は梢に聞こうとしたら、梢は何かを見ていることに気付いてその先にいたものを見ると、

「ガガア…、ガガア…」

その視線にいたのは剣二と共に寝ているシロン（鼻ちようちんしている）であった。

「ああ、シロンね…、もしかして梢はシロンのことが気になるの？」

光は梢はシロンのがいること自体が珍しいと思ったのか、そう聞いてみた。

「…（コクッ、コクッ）」

どうやらそうらしく梢は縦に首を振りほほを赤くしていたのだ。

「…まあ、後で剣二に聞いてみたら？多分起きるの昼ぐらいから…」  
地可は梢が話しに入らないのは「シロンを見ていた」という事に呆れながらもそう言ったのだった。

一方その頃…

警視庁 特別捜査室 同時刻

「被害者の身元は確認できませんでした。今現在DNAを採取して調べています」

「次に被害者の解剖結果ですが、死因は血液を抜かれた事によるショック死だと思われます。それともひとつ、事件のあった日に大量の輸血が届けられたという情報があります」

ここは「渋谷連続怪奇事件」に設立した対策本部で、次々と本部に報告する部下の情報の中、それを無言で聞いていたくらは考え事をしていた。

（スパイの事も気になるけど、あの死体はやはり変だわ。第一、私が見たときには“争った形跡”が無いのはおかしい。自分の血を抜かれていく時に被害者は何かしらアクションをとったはず、それに仮に暴れていたら拘束しようとしたはずだけどその跡も無い。眠らされて血を抜いたって考えれば納得がいくと思うけど、資料には“眠らされた痕跡が無い”と書かれているし、私もさつき鑑識の方に行って確認したから本当だと思うわ。何かが…）

そう考えに耽<sup>ふけ</sup>っていた時にある刑事が、

「その運ばれた病院は“AH東京総合病院”です。そしてこれはあくまで聞き込み程度ですが、それを手配したのは……」

「精神科の……“高科 史男”です」

一方そんな事を知らない巧巳は……

「えっと……『ナイトハルトさん、知っていますか？第4のニューヨークでオークションの最初の値段は4万で、落札価格は……』マジ……？」

そう言いながらノートパソコンでチャットをしていた巧巳は『グリム（ハンドルネーム）』の書き込みを見て、昨日の事件の時のオークションの金額に唖然としていた。

『まったく、そんな大金で買うもの好きな奴もいたもんだな。けど、そんなものどうするつもりだったんだ？』

「さあ？おそらく観賞用だと思っけど？金持ちの考える事は分からないからねえ……」

蓮龍拳は不思議そうに考え、巧巳は蓮龍拳に自分の推測を言いながら、そのチャットのページを消したのだ。

『で、何で家の中にいるんだ？あの高科を監視するのじゃなかったのか？』

蓮龍拳は自分が思っている最大の疑問を巧巳に言ったのだ。今現在巧巳は自分の住んでいる基地に居る。その理由は…

「いや、せつかくの休みだから一日位丸々アニメの観賞しようかなって…」

（駄目だコイツ、何とかしないと…）

なんともくだらない理由に蓮龍拳は心の中でため息をついた。

「ん、新着メールだ。差出人は…『將軍』！？」

と巧巳の元に一軒のメールが届いたのだ。その差出人を見て驚愕した巧巳はそのメールの内容を見た。

『調査の方は進んでいるのかい？僕がくれたヒントは役に立っているようだね。君達の調査に役に立てばいいけど、昨日事件のあった数時間前、A H 東京総合病院で大量のB型の血液が運ばれたんだ。それを手配したのは高科先生なんだけど先生自身はそんな事は憶えていないと言っているそうだ。それともう1つ、この事件を解く鍵はもう君達の前に現れているよ。またメールをするけど、恐らく敵は動き出すと思うよ。気をつけてね 將軍』

「…、これではつきりしたね」

『ああ、おそらくこの事件を起こしているやつらは何かをしようとしている。その鍵は巧巳<sup>お前</sup>だ。けど何で將軍<sup>コイツ</sup>はそんな事を知っているんだ？』

將軍から来たメールを見た巧巳と蓮龍拳は、自分達が抱いていた疑問を解決と共に新たな疑問に考えていたのだ。

「…、まあ高科先生の監視は恐らく警察がやってくれるかもしれないけど一応見ていく?」

『だな』

そついいながら出かける準備をする巧巳である。

で、それから数時間後…

AH東京総合病院近く 11:50

「うわ…、すでに警察が動いていたね。一体中でどうなっているんだろう」

昨日の場所に来た巧巳はすぐに双眼鏡を覗いて病院の方を見た。そこに映っていたのは外にはパトカーや啓作間、中には刑事がいる光景だった。

「あっちゃあ、これは流石に調べられそうじゃないなあ、外も野次馬ができているし…ん?あれって…蒼井さん!?何であそこにいるんだ!？」

巧巳は双眼鏡を動かすと、そこに映っていたセナに驚きを隠せなかった。

『そついえばあいつ、確か『誰かを殺す』言っていたな…、まさか殺す相手って…』

巧巳からセナがいることを聞いた蓮龍拳はセナが言ったことを思い

出しながら最悪の事態を想像した。

「あ、いや違うみたいだね、なんか病院や野次馬を見渡すだけだよ」

しかし、その想像は外れていたみたいく、病院や来ていた野次馬を見ているだけである。

「蓮龍拳、蒼井さんは何か知っているのかもしれない。こっちから接触しようよ」

『そうだな、もしかしたら一気に真相を見れるかもしれないが、大丈夫か？いきなり斬りかかって来ないか心配でもあるのだが…』

「大丈夫じゃないのかな？もしそんな事をしたら病院の周りにいる警察が黙っていないと思うし…」

『ファーストコンタクトでいきなり刃先を向けられたけどな』

「…」

巧巳はセナに接触する事を蓮龍拳に話したが、その蓮龍拳は心配そうにいい、巧巳は大丈夫だと言ったのだが最初にあったことを思い出していた蓮龍拳の言葉に黙った巧巳はそのまま黙ったままその場を離れ、セナのいる方に向かって行った。その心の中は、

（大丈夫、だよ…）

そう自分に言い聞かせていたのだ。

場所を移して…

AH東京総合病院の周り 同時刻

「…、やはり違うのか。何処にいる？」

セナはそういいながら辺りを見渡すが目的の人は見つからなかった。

（この前あったあの戦士、それより前にあったディソードを見た男。この2人は何か知っているのか？もしかしたらあの男も知っているかもしれないし…）

そう考えてこの場を離れようとした時、

「ワン、ワン！！」

と足元に可愛いチワワが居たのだ。

「！！、ヒヤアアア！！」

しかしなぜか驚き尻餅しりもちをついてしまったセナは、

「く、くるなああ！あ、あっちいつてろおお！！」

手で追い払おうとするもその目は涙ぐんでいた。しかし彼女の抵抗もむなしく迫るチワワ。

「あ、ああ、ああ…」

動こうとするも腰が抜けて動けないでいた。あまりの恐怖（本人にとって）に一瞬目をつぶるセナ。

「…？」

しかし時間がたっても接触の感触が無いので目を開けると…、

「？おいどうしたんだ、首輪があるってことは飼い犬だけど、お前の主人はどこ…」

「ああ、マルうう、何処に行っていたのー、探したわよ。お兄ちゃんありがとう」

そこにはチワワを抱えている巧巳は首輪を見てそう言いかけるとそこに走りこむ女の子が来たのだ。どうやら女の子が飼い主であるようだ。

（な、何でコイツが病院にいるんだ？、もしかしてこいつは何かを調べていたのか？）

セナはあまりの出来事に驚いていた。そんな事は知らない巧巳は抱えているチワワを下ろして首輪についている紐を女の子に持たせた。

「ちゃんと犬を離さずに帰るんだぞ。じゃあな」

「うん、バイバイお兄ちゃん」

そう言っただけの子は巧巳に礼を言い、チワワと共に走っていった。

「お兄ちゃんか…」

そっぴいながらポケットの中にある紅い携帯電話を取り出す巧巳。この携帯は七海が貰った物で勿論剣二達のアドレスも入っている。

「…、パンツは青か…」

ふとセナの方を見た巧巳はそう言っただけで携帯を開けボタンの操作をし、

それをセナに向け「カシャ」と音を立てたのだ。

「!!、ま、まさかお前…、消せ!!今すぐそれを消せ!!」

セナは今自分の格好がパンツが丸見えだとうやく気が付き、立ち上がろうとするが…

「ギャフィン!!は、鼻が…」

足に力が入らなく、前のみになって地面とキスする羽目になり、鼻も強打して、鼻をこすったのだ。

「くくくくく、お、面白い。これは後で剣二たちに教えないと。あ証拠写真、証拠写真」

笑いをこらえる巧巳であつたがすぐに携帯の写真を撮ったのだ。

「~~~~~!!!」

目つきは鋭いが恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にさせていたセナはこう思った。

（さ、最悪だ…。あ、悪魔が、目の前に悪魔がいる…）

なぜか巧巳の頭に角が、背中には蝙蝠こつもじの羽が、尻には尻尾が生えて笑っている姿が、セナには見えた。

で、場所を移して…

とある料理店 12:15

「いやア、こんな所にマールボーカレーが食べられるなんて僕はラッキーだなああ」

そういうながら食べている巧巳の前には、

「おい、3日間お前の言うことを聞いたら消すって本当だな。嘘だったら…」

不機嫌そうに言いながら巧巳と同じものを食べているセナの姿があった。あの後その場を去ろうとした巧巳を引き止められなかったセナは「何でも言う事を聞く」と言ってしまい、巧巳はその交換条件として3日間言う事を聞いたら消すと言ったのだ。

「まあ、約束は守るよ。そう言えば蒼井さん、前に僕が見えた剣の事なんだけど…」

巧巳は食べながら話を自分が聞きたいほうに持ち込んだ。

「?ああ、ディソードか。一般的には目に見えない“妄想の剣”だ」  
確かに今現在テーブルの所に置いているにもかかわらずだれもその事には気が付かないのだ。

「この剣を見るには“ギガロマニックス”の能力が無いと見れないのだが…、もう一度聞くがお前は本当に人間か？」

「さて、剣二にメールを…」

「すいませんでした、それだけは止めてください」

セナは巧巳に対し失礼な事を言ったため、あの恥ずかしい写真を貼ったメールを送ろうとするのを察知して土下座をしたのだった。

「まあ、この小説だからそれだけでいいけど、ギャルゲーか「ノクターンノベルズ」だったらだったら「奴隷」か「ペット」ぐらいだと思うよ」

（良かった、この小説が18禁じゃなくて本当に良かった！！）

なにやらメタ的なことを言った巧巳とそう思ったセナであった。

「で、話を戻すが…、すまん、ちょっと外を見てくれないか？」

セナは自分の席に戻り話の続きをしようとしたら外にあるものを見たので巧巳に外にあるものを見てくれといった。

「ん？何だ、何人かが通信機を背負っているけど…、ってアレは！？」

そこに映っていたのは巨人が街中を歩いていたのだ！！

「って言うかあれって「進。の。人」の巨。？」  
「…」

巧巳の言う通りその体のあちこちに筋肉の筋が見えておりなにやら不気味な存在である。（その隣で「何で知っているんだ…」と哑然としているセナの姿がいたが…）

「まあ、そんな事は兎も角、あの装置を破壊すればいいんだ、分かっただらさっさと…」

「まずは背負っている人を気絶させてっ」と

「はア！？お、おいちよつと待て…」

セナはそんな現状をさておき、対策を言ったのだが巧巳はそんな事はお構いなく店を飛び出したのを見てセナは慌てて止めよう店を飛び出したのだが、店を出た後の光景を見て驚愕したのだった。

「ふっ、いい汗かいたな」

額の汗を拭いた巧巳の足元には、何人もの気絶した人たちがいる。そのほとんどが装置を背負った者達であつた。恐らく首に手刀を叩き込んで気絶したのだらう。

（何なんだ、この圧倒的な強さは…、まさか、前にあつた戦士は西条じゃないのか？）

セナはあまりの光景に唖然とするがひとつの仮説を立てたのだ。そして巧巳に近づいて、

「…流石に強いな“リュウレンドー”は」

ブラクをかましたのだ。

「…何の事だかさっぱりだな。それに“リュウレンドー”は誰のことなんだか…」

が巧巳は首を横に振り彼女の質問に否定する。

「ふっ、だが私には他人の施行を読む事が…、あ、あれ？確かに持っていた…」

しかしのその反応は予想していたらしく思考盗聴を実行するが、それを実行するための“あるもの”がなくあわてていたのだ。

「デイスードならさっきの店に置いてあるよ。あ、それと食事代は払ってね。僕はこの人たちを人気のない所に持って行くから、後で電話を入れるから来てね」

そう言いながら何人かを抱えて何処かへ行った巧巳。後には啞然と立ち尽くしているセナと…

「ちょっとお客さん。連れの人は食べ終わったのにあなたはまだ食べている最中でしょう!!。あとお金、ちゃんと払わないと警察に通報しますからね!!」

セナに文句を言う店の定員だけであった。

それから数十分後…  
とある通り

「しかし、如何するんだろう。あの時（さっきの会話）はああ言つて誤魔化したけどこれから先、思考盗聴されたらこつちの考えがばれればじゃないか…はア、不幸だなあ」

『お前はどこかの幻想殺しか。それについては安心しろ。俺達魔弾龍には自分のパートナーの思考を自分達にしか聞かない力があつてな、それを使えばいいんだ』

「へえ、何でそんな機能を今まで使つてなかったの？」

『ああ、“思考を読む”こと自体珍しい能力だからな。それに、“ギガロマニアックス”自体は本当に珍しいレアな能力だからな。何

せ…、つてあの黒髪女が来たみたいだな、じゃあ早速はじめるとするぜ」

巧巳と蓮龍拳は足元に気絶した不審者を移動してセナにここに来るように電話をかけた後、これからの事についての会話をしていた。そして解決策を言い、何かを言おうとした蓮龍拳であったがセナが来ている事を察知してその機能を起動させたのだ。

「遅くなつたな…」

そついいながら来たセナの顔には何か疲れた顔であった。恐らくは店の店員に色々と言を聞かれたのだろう。

「こいつら一体何者なんですか？背負っているのつて何かを受信する機械なのですか？」

「まずはこいつらをよく見る」

巧巳の質問に答える前に、セナに機械を背負っている男の顔を見るように言われた巧巳。

「？、そついえば気絶させる前に何やらブツブツ言っていなかったけ？後一応機械の方は壊しておいたから」

巧巳は思い出しながら言ったのだ。それにセナがここに来る前にあらかた機械を破壊したといった。よく見ると所々に黒い煙が上がっているのが分かる。

「因みにどうやって壊した？」

「背負っている機械をはずして壁に激突」

セナの問いに即答した巧巳に対し、セナは額に頭を当てて考え込んだ。

「…、まあそれは兎も角だ。こいつらはある教団の人間だ。そして操られた哀れな人だ」

「操られた？ どういう…」  
「あぁ、ごめん。もしもし…」

復活したセナは意味深な言葉を言い、それを聞こうとした巧巳であったが突然携帯が鳴ったためそれに出た。

『巧巳君ね、私よ』

「くららさん！？ どうしたんですか！？」

掛けてきたのはくららでなにやら急ぎの状態の電話だった。

『さっき、A H 東京総合病院の高科先生に事情を聞きに行ったんだけど… やられたわ…、今朝から病院に来ていないのよ』

「え、それって、自宅に居なかったんですか？」

『ええ、そう思った何人もの刑事が高科先生の自宅に行っただけ、その連絡で居ない事が分かったのよ』

「それって…」

『ええ、警察は彼を重要参考人として捜索に乗り出したわ』

「わざわざありがとうございます、それでそっちの調査は？」

『難しいわね、一応警視庁のデータを調べている所よ。それじゃあ気をつけてね』

「はい、それでは…、高科先生が居なくなっただけ、何も起きないといいけど」

くららの連絡で高科先生は行方不明と知った巧巳はなぜ高科先生が行方不明になった原因を考えていたのだが、

「高科っていう奴がどうしたんだ？」

セナの言葉に考えを止めて、

「あ、ああ。僕がお世話になった先生だよ。そうだ！蒼井さんに聞きたいことがあるんだ！聞いてもいい！？」

「ちよって待て！落ち着け！！」

巧巳はそう説明し、突然聞きたいことがあったため聞いてみたのだ。セナは慌てていたのだが巧巳からの話を聞いたあと、

「それについては私の方は分からないな。“アイツ”なら分かるかもしれないが…」

“アイツ”？」

その事については知らない事だった、しかしそれを知っている人に心当たりがあるらしい。

「お前には関係ない人物だ。装置を破壊したのならここにいる必要はない、ここを離れるぞ」

「あ…」

だが、巧巳に関係ないといい、話を終わらせると1人歩き出すセナ。

「何を隠しているんだ？蒼井さん…」

1人つぶやいた巧巳はその後を追い、走り出した。

同時刻

翠明学院 屋上

「はああ！？、高科先生が行方不明だつて！？それって本当かよ！？」

そうすつとんきよな声を上げた剣二は電話をしてきた相手に真意を問いただした。

『うむ、本当だ。今現在搜索を出して探しているのだが…、結果は恐らく無いだろう』

その電話をかけてきたのは剣二の祖父、総一郎である。声からにしては結果はあまり期待はできないみたいだ。

「で、祖父ちゃん。その探す理由になった輸血の事で何か分かった事は？」

『それなんだが同じく同席した医者の話によると、突然送られてきたそうさ。最初高科先生本人も覚えがないと言っていたのだが、それを発注したのは彼自身だったそうで、その証拠にその資料から彼の名前があつたそうさ。勿論鑑識に回すが、何か判るかもしれん』  
「それっておかしいな。前に巧巳が自分のことを憶えていないって言っていたが、その鑑識で何か解ればいいが…」

『それともう一つ、この事件とは関係ないが剣二の弟子にしたやつのことだが…、検査の結果、“適正”があつたことが分かった』

「そうか…、それで魔弾核はどうしたの？」

『まあそこは抜かりない。すでにその核は組み込まれておるし、カモフラージュは万全、よっぽどの事がない限りばれないし、おまけに“護衛”にはなるかもな』

「…因みにそれを造った人は？」

『それは秘密だ。公式ではある科学者が作ったと表向きには言っているがな』

総一郎の話だと最初半信半疑だった高科先生だったがその証拠が出たためそうだと認めたらしい。それとある事についての報告をして剣二は祖父の言葉にため息をついたのだ。

「で、アイツの事だ。俺達の事は話したのか？」

『勿論だ、まあ本人は驚いていたがなあ。もしあちらでやつらが現れたら１人では厳しいががんばってもらうしかないがな』

「まあ、そうだろうな。後であいつのところに電話をするわ。じゃ」

そう言つて電話を切った剣二。そしてある方向に目を向けると…

「ガガアア…」

離れた所で食事をしている面々（新たに斗牙、永侍、琉菜、梢が仲間入り）に中にいる、嫌がつているシロンに頬をスリスリする梢の姿を見て、ため息をついた剣二である。

それから数時間後…

とあるメイド喫茶 15:00

「お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様♪」

そんな事は知らない巧巳は、先ほどいた場所を離れて別の所に時間をかけて移動し、話をするために巧巳が選んだ場所はメイド喫茶で

ある。

「……」

始めて来たのかは定かではないが「開いた口が塞がない」<sup>ふさ</sup>状態のセナである。

「お、おいここはやばいぞ。こことは別の所がなかったのか？」

何か嫌な予感を感じたセナは巧巳を説得し、別の所で話をしようとするが、

「じゃあ、コーヒーで」

（ここで話をする気満々かあああああああああああああ  
あ）

すでに座っている巧巳を見て、手に床をつけて愕然とするセナであった。

「うっ、何かもの凄く恥かしいな……」

そっぴいながらも巧巳の向かい側に座るセナである。

「そうか？中々良いと思うけど、蒼井さんも着てみれば？」

「断固拒否します」

巧巳の質問に即刻断るセナである。先ほどとは違い丁寧な言葉になっているのは脅し（写真）が効いている証拠である。

「まあそれは兎も角だ、お前に忠告しておく。今後さっきのやつら

に関わるな、あいつらは目的のためなら手段は選ばないからな」

「？それはどういうこと」

「そのままの意味だ。3日間はお前の手伝いをする。が、その間は私のことに首を突っ込まないで貰おうか」

セナは巧巳に対して忠告を言ったのだ。それは“今日あった連中を調べるな”と言っているのだ。その理由を聞こうとした巧巳であったが、セナは巧巳の手伝いはするが、自分の事は自分ですと言ったのだ。その目には先ほどとは違い厳しさが秘められていた。

「…分かった。じゃあ高科先生の行方を追う。この3日間でそれしようよ」

「ああ」

巧巳はこれ以上話しても無駄と考え、今後の日程を言ってセナはそれに承諾したのであった。

数十分後

とある通り 15:15

『で、あのセナって言う女は本当にほつといてよかったのか？』

あの後お互いの情報を交換した後、喫茶店を出た巧巳はセナと分かれて一人ブラブラと歩いていて、ふと蓮龍拳が思った事を言ったのだ。

「多分だけど、蒼井さんが追っている組織は僕たちに少なからず関わっていると思うよ。それに…」

『？、それになんだよ？』

「『將軍』のメッセージに書かれていたんじゃないか、『事件を解く鍵はもう君たちの前にいるよ』って。それって“ギガロマニアックス”じゃないのかなって思うんだ」

巧巳は勘だが“セナが追っている人物と自分達が追っている犯人は同じではないのか？”という仮説を立てたのだ。それともう1つに今日送られてきたメールの内容を考えてみて事件の鍵は“ギガロマニアックス”ではないのか？と考えたのだ。

『…そうかもしれないな。あの能力が事件の鍵なら、全て辻褄が在るんだよな』

「？それってどうゆう事？」

『ギガロマニアックスはな…、ん？これってまさか…』

蓮龍拳は巧巳が立てた仮説を考え、そして納得したのだ。巧巳はその理由を聞こうと蓮龍拳に言い、それに答えようとしたその時、何か異変に気が付いた。

『どうやら答えを解く鍵が見つかったようだね』

突然、巧巳の頭の中に少年の声が響いたのだ。それだけではない、今まで路地だった場所が真っ白な風景に変わっていて、巧巳の目の前には車椅子に乗った老人が居たのだ。

「蓮龍拳、これって…」

『いや、これは違う。これは“妄想シンクロ”だな。自分の妄想を相手の妄想に同調させ、妄想の世界に介入する能力だな。しかも俺

達より遠くにいるのにそれをやるのはかなりの使い手だな』

巧巳は最初思想盗聴されたと考えたが、蓮龍拳はそれを否定し、自分達は相手の妄想の世界に入ったと説明した。それをやってのけた相手は相当の使い手だと付け加えて…

『そう、この事件に関わっているのは“妄想”を“現実”に変える力を持つ者、“ギガロマニアックス”なんだよ。勿論君や僕もその能力を秘めている。けど…君の場合は“特別”だけだね』

「“妄想”を“現実”にする…」

『ああ、それがギガロマニアックスの最大の能力、“リアルブード”だ。“デイソード”や“思考盗聴”、“妄想シンクロ”の能力を使うのにはそれが必要になる。まあお前が“特別”な理由は見当がついているけどな』

巧巳は目の前に居る老人だが、声は少年で、説明を聞き、蓮龍拳はそれを補足した。しかも、巧巳は特別な理由も知っているらしい。

『気をつけて、君がさっき出会った彼らの裏に居る組織に目をつけられたはずだよ。十分に注意して』

「待ってくれ、君は一体…」

老人は巧巳に対してそう言うと、その姿が光りだしたため、何者かと聞こうとする巧巳であったが、

『近いうちに分かるよ…』

その言葉と共に巧巳の目の前は白くなった…

「今は一体…」

巧巳が気が付くとさっきまでいた路地に居たのであった。

「あの人…『將軍』、なのか…？」

その問いに答えるものはいなかった…

同時刻

ある場所

「気をつけてね。“僕とのつながりが切れてしまった”今でも、僕は君を見守るしかないんだよ。“もう1人の僕”」

次回に続く…

## 第14話 失踪と運命の出会い（後書き）

どうだったでしょうか？

今回の話で新たに登場したのは“インフィニット・ストラトス”でしたが、まだ彼らは出しません、ていうか外伝を書こうかなと思うところ…

今回でなんと1万5千アクセス数突破！ありがとうございます。

それではまた…

## 第15話 闘いの幕開け（前書き）

どうもセイワです。

さて、今回の話で？の場所が分かります。

それではどうぞ…

## 第15話 闘いの幕開け

それから4日後…

4月22日 翠明学園 2-B教室

それから4日後の朝、巧巳は久しぶりに学校に来ていた。3日間の間、高科先生の行方を追っていたが見つからず、その間に検査は先生が見つかったからと病院側にも言われていたのだ。事件を確信に近づける証拠は今のところ無く、唯、時間だけが過ぎていたのだ…（その間には、魔物の出現があったが…、剣二達によって事無きを得ている）

「で、今日は何の日か知っているんだろうな？」

今日は“珍しく”起きている剣二に今まで“考え事”をしていた巧巳ははっと気が付いたのだ。

「ああ、ごめん。ちょっと考え事をしていたから…。今日は“彼女達”が扶桑こしに戻ってくる日だね」

「ああ、そうだが…」

剣二はそうと言った事を確認した巧巳はまた考え事に戻った。その考える理由わけは高科先生の事もあるが、4日前にあった“將軍”のことも気になるのだ。何故彼は自分のことを知っているのか？何故自分に事件のヒントをくれるのか？その他にも色々あるが一番の疑問は將軍そうごだろう。

「そうやって考えていると、頭がハゲて波平みたくなるぜ。巧巳」

そう言ってきたのは永侍で、その隣には斗牙がいる。

「そつだよ、今巧巳が考えるのは補修の時間だよ。金融日の日に一週間分の補修が受けるって不動さんが言っていたよ」

「はあ！？、不動のおっさんはそんな事を言っていたのかよ。うわああ、もう一週間休めばよかったのかな？」

「そつなつたらもう一週間分の補修があるんじゃないのか？」

『馬鹿の末路だ…』

斗牙の放った一言で驚いた巧巳は、1週間ぐらいズル休みしようと考えたが剣二と激龍剣（と言っても小声だが）の一言で黙ってしまった。

「それにだ、斗牙達からの報告にあつた“やつら”のここの所の破壊活動。俺達が事件に遭遇してから活発になってきている。裏で“やつら”が騒ぎを起こしているのか、それともその状況で何か企んでいるのか解らない状態だ。それだけじゃない、事件の鍵となる“ギガロマニアックス”や、巧巳が遭遇した謎の集団。そして”將軍”。いちいち考えても答えが出ない、なら、その悩みを抱えてそのまま進むしかない。“答えが後からついてくる”。俺はそう考えている」

小声だが真剣な顔で語る剣二に、巧巳は剣二は剣二なりに考えているのだと思ったのだ。

「さてと、このまま“彼女達”とも合流して何事も起きないといいのだがな…」

「こついつ事に限って何か起きるからねえ、僕たちの場合」

剣二の言う通り何か起きなければいいと巧巳も思い、だが何かト

ラブルが来る事を予想していた。

しかし巧巳の予想は的中するのである…

それから数時間後…

とある場所…

ここはある“基地”の指令室でこの部屋全体に警告音が響いていて、何十人の人が忙しく手元のキーボードを操作していた。

「指令！ここから南東の方角5千kmの太平洋に魔物反応確認！映像に出ます！」

そう言ったのはキーボードを操作していたうちの1人、青のスーツに青いスカートを着て赤いネクタイをしている女性で、彼女が着ている制服はここにいる全員が着ている様である。恐らく彼女達はオペレーターなのだろう。その彼女は手元にあるキーボードを操作して部屋にある大画面にその映像を映した。その姿は“我々の世界に存在した”V137に酷似こくじしていた。しかし、その色は黒色に少ないが赤と不気味感が漂い、更にそれよりも不気味な紫色があり、その中心に目玉があることを確認できる。

「…、“混合型”か…」

そういったのは同じスーツを着た中年の男で、さっきの女性が言った“指令”なのかもしれない。

「はい！ベースとなったのは“ネウロイ”飛行タイプに“ジャマイマタイプ”を何十体も合成されたと考えます。またその体内に“マダンキー”反応を確認しました。しかしその数は一体ですが、今まで確認された“ネウロイ”とは別のタイプで、その能力は不明となっているようです」

そう言った別のオペレーター（女性）が手元のキーボードで操作し、別の画面にその情報を出したのだが、ベースとなった“ネウロイ”が今まで確認された中でも新種だと判断されたのだ。

“ネウロイ”

この世界で突如出現した謎の生命体で、正体・目的とも不明である。外形は金属で出来た我々の世界で出てくる飛行機や陸上兵器のような姿をしている。だが、大きな建造物を一撃で破壊しうる圧倒的な攻撃力を持つ上、その周りには“瘴気”を撒き散らしながら進行する。“瘴気”とは、我々の言葉で言うならば古代から19世紀まである種の病気（現在は感染症に分類されるもの）を引き起こすと考えられた“悪い空気”で、気体または霧のようなエアロゾル状物質と考えられた。代表的な病気はマリアで、この名は古いイタリア語で「悪い空気」という意味の『mal aria』から来ている。しかしネウロイの場合、その周りに発生した霧は大地を腐らせ金属を自分の体内に吸収し、そして人間は死に悼<sup>いた</sup>ましめる毒性を含んでいる。だがネウロイは何故か水は苦手らしく、大河や海洋などの水を渡るのが苦手であり、山頂を超えるのを手こずる為、防衛線をしくにはそこである。また、それを対抗するため“ストライカーユニット”と“インフィニット・ストラトス”の開発しており、前者はすでに正式採用しているが、後者はとある理由から対ネウロイ用にはない方針をしている。そのわけは…次回で説明するため後の楽し

みである。

「到達予想時刻とその予想場所は？」

指令と呼ばれる彼の一言で観測されているスピードとその方角を予想だが表した。

「今から2時間後の1300です、場所は…ここ“渋谷”です！！」

別のオペレーターの言葉に指令は「フム…」といい、

「指令、もしかしたらやつらは基地に攻撃するのでしょうか？」

そう言ったのは眼鏡をかけた青年で同じ制服を着ているが指令の横にいるため地位は上だと思われる。

「いや、それは考えにくい。しかしだ、今現在我々には対空手段が少ない。おまけに“超獣神”と“超重神”は今整備中だから出撃は不可能だ。しかもだ、ほとんどの航空隊にも彼らに対する効果も機会できん。ここはやつを上陸を許し、向かい討つしかない。左京君、すぐに緊急避難命令を発動させるんだ、警視庁にいる鳴神さんにも協力を仰ぐように言ってくれ。時間はあるがなるべく急いでくれ！！」

指令は自分の考えを言い、かつ“自分達の戦力”や“他の戦力”を分析し“海上での迎撃は不可能”と判断したのだ。仕方なく渋谷やそこを通る町に避難勧告を出して住人の避難を始めるように言い、その協力を警察も協力を要請したのだ。その左京と呼ばれた女性はすぐに行動を開始し、また別のオペレーター達も作業に入った。

「…“彼女達”の合流時間は？」

ふと指令は作業をしている1人のオペレーターに尋ね、そのオペレーターも確認のためそれを計算した結果、

「ヒトサンニイマル1320！しかし別行動した2人はヒトサンイチゴ1315で、五分早く到達できると思います！」

指令にそう報告したのだ。つまり15分の間に被害が出る可能性がある、その間に“被害を最小限に抑える”事が重要だと考えたのだ。

「彼女達に連絡！すぐにしちやう渋谷に向かうよう伝えてくれ！それと“彼ら”にもここに来るように言ってくれ。状況の説明をする！」

「了解！！」

指令はすぐに命令を出して、彼女達にすぐに向かうように指示を出し、また“彼ら”にもここに来るように指示を出したのだ。

場所を戻して…

『緊急のお知らせです。今日、午後1時に未確認飛行物体が渋谷に到着することが判明しました。被害が出る可能性があるため、役人の指示に従って安全に避難を開始してください。繰り返します…』

授業中に校内放送が流れたため、教室に居た生徒達は『何だ？』とか『如何したんだ？』と騒ぎ始めた。

「ZZZ…」

が、剣二はまだ寝ていたのだった。

「相変わらず剣二は寝ているなあ…、緊急事態だこんな状況って言うのに…」

永侍はそんな剣二を見てため息をついたのだ。前にこんな状況を見て諦めているのかは知らないが…

「しょうがないよ、剣二は剣二だし。けど、剣二を運ぶのはだれにするの？」

斗牙も諦めているが、それよりも“だれが剣二を運ぶか？”という疑問を考えていた。

「しょうがない、僕達でじゃんけんするのは如何かな？」

巧巳がそう言い、その周りに炎火、氷牙、風太、雷丸、三住、そして斗牙と永侍が集まってきたのだ。

「負けた人が剣二を持つって事で、最初はグー…」

そう言いながら手をグーにして、

「ジャンケン、ポン！！」「」「」「」「」

ここに「剣二をだれが運ぶかジャンケン大会」が始まったのだ…

「くだらない事をやっているわね、男子たち…」

地可はそれを見てため息をついたのだ。（余談だが、剣二が運んだのはなんと不動のおっさんで、その理由は「剣二をだれが運ぶかジヤンケン大会」の最中に不動のおっさんが来て「何やっているんだ！」といわれてその理由を説明した後、折角だからから不動のおっさんに運ぶ事になると巧巳たちが提案した（斗牙は反対だったのが）。勿論不動のおっさんは反対したが、時間も惜しいため渋々運ぶ事になったのだ。因みにその時瑞希に「貧乏くじを引かされたわねえ」と言われたのはいうまでもない）

で時間は進み…

「あれ？巧巳君は？」

ここは避難場所のシェルターで、なんでもここはかつて防空壕だったものを改良して一ヶ月間生活できる食料と水が確保している。そんな所に梨深は巧巳や剣二（寝ていたが…）たちがいないことに気が付いたのだ。

「さっき連絡があつて、巧巳君達は別のシェルターに避難しているんだって」

そう女性の先生が事の真相を語ったのだが、

（本当にそうかな…？）

梨深はそれとは別の何かあるのだろうと考えたのだ。

その頃、その巧巳たちは…

梨深の思った通り巧巳達は先程の基地にいたのだ。彼らだけではなく葵やくらら、朔哉にジヨニーにエイダ、さらにフェイ、エイナとリイルと集まっていたのだ。

「すまない、“魔弾戦士”の諸君。緊急事態が発生した」

そういいながら謝ったのは先ほど”指令”と呼ばれた男で、ここある組織の指令室で彼の名前は天地<sup>あまち ゆつや</sup> 裕也で前に風呂で会話していたうちの1人である。（13話参考）

「実は先ほど新しいタイプのネウロイをベースとした混合型の魔物が出現した。今現在われわれには航行手段は少ないうえ、“ダンクーガ”や“グラヴィオン”は今現在調整中なため出撃は無理だ」

「仮に出撃できても、合体は不可能。分離状態でも苦戦する可能性は出てきます」

「うげ、じゃあどうするんだよ」

天地司令官とエイナの言葉に永侍は嫌な顔をした。今現在“ネウロイ”と対抗できる2機の出撃は無理だと言われて如何するのかと聞いてきたのだ。

「永侍君の言う通りだ、そこで我々は渋谷にやつを誘いこみ、そこに“結界”を張って被害を最小限に留めながら敵の持つ能力を確認、“ストライカーズ”が来た時一気にそれを討つ」

「それで、彼女達が来る時間帯は？」

「交戦してから15分後に別行動をしていた2人が戻る。その5分後に本隊が来る予定だ」

天地は永侍の質問に答え、作戦の内容を伝えたのだ。つまり彼女達が来るまで時間を稼ぐしかないのだ。また彼女たちが来る時間を聞いてきたくららに対しても答えた。

「最低でも15分ですか…、相手が上<sup>空</sup>にいる以上、遠距離で攻撃するしかありませんね…」

「それにベースとなったネウロイの詳細なデータが分からない以上、ぶつつけ本番で戦うしかないか。毎度の事だけど俺たちも無茶するなあ」

その答えに対してジヨニーと朔哉がそれぞれ答えたのだ。

「仕方がないでしょう。けど、例え新しいタイプのネウロイだけど倒し方は変わらないわ」

愚痴を言っていた2人に対し葵は同意の言葉と共に、やるしかないと言ったのだ。

「そうね、けど、どうしてこのタイミングで仕掛けてきたのかしら？」

「くらら様、それについてなんですけど。前に新しく出来た“ネウロイの巢”が1つ行方不明になったと連絡が入ったそうなんです」

「恐らくその巢に居たネウロイを巢ごと捕まえて融合した。って所ね」

「まったくネウロイの巢を持ち帰るほどの力を持つやつは誰かしら…、って居たわね。“アイツ”が」

くららは葵に同意すると同時に“なぜ今頃になって仕掛けてきたのか？”という疑問が上がり、エイナは前に報告した事は改めて皆に

言い、フェイは推測を立てた。瑞希はそんなことをやってのけた敵の正体を考えたが、すぐにその人物（？）に心当たりが浮かんただ。

「ああ、奴しか思いつかないな」

そう言ったのはいつの間にか起きていた剣二であるが、その目には鋭さがあつた。

「だが、それを言っている場合ではないぞ。空中戦が出来るのは今の所、葵とエイダ、それに風太と白波しか出来ないぞ。後はシロンに乗ってもらうが、大体あいつの場合は剣二お前が主に乗るからそれ以外は地上戦は出来るが……」

「いえ、剣二君はシロンに乗らなくても飛ぶ事が出来ると思います」

「どういうことだ、“瀬戸山”？」

不動のおっさんは剣二をたしなめると同時に空中戦をやれるのは今の所4人とシロンに乗せることしか出来ないといったのだが、先ほど天地指令の隣に居た青年、瀬戸山せとやまきいち喜一が剣二も単体で空中戦が出来るといってきたので聞いてきたのだ。

「ええ、前に石版を調査していた“ミーナ”さんからの連絡で、“サンダーリュウケンドー”の獣王は鳥形で、それを呼び出すには短刀の笛歌を吹く」と報告があつたんです。今現在そのキーはまだ発見できていませんがもしかしたら彼女達が回収した“マダンキー”の中にそれを呼び出す“ダガーキー”がある可能性があります」

「そのため、光君は白波君と共にマダンキーがある本隊に向かつてくれ。そこで“鑑定”をおこない、もしあるのならすぐにリュウケンドーの所に“転送”してくれ」

瀬戸山の説明を聞いていたら天地指令は光と白波を別行動をとらせると共に、そのマダンキーの探索を命じたのだ。

「で、もし無かったら？」

「その時はその時だ」

しかしない場合もある、その事を剣二は言つと、天地指令はキツパリと答えた。

「まあ、それはそれでいいじゃない。もともと博打要素があるし」

「うん。前に魔物倒した時には、他の魔弾戦士のキーだったし」

「確か似そだね。まあ、指令の言う通りその時はその時よ」

天地指令の答えに琉菜、リイル、地可の順に言つた。彼女達にはそういう経験があつたのだろう。

「指令、海軍に動きあり。出撃準備に入っているとの情報があるとの事です！」

「何い！！」

しかし、そんな彼らとは別に動き出そうとする海軍に天地指令は驚きの声を上げた。

「オイオイ、あいつらに“普通の攻撃”は通用しないはずだろ？特攻する気か！？」

「出撃するのは第961海軍隊。その司令官は黒井中佐です！！」

「「ああ、あの“馬鹿”が隊長の部隊か……」」

永侍がその部隊に心配の声を上げるが、次に入ってきた報告に全員が納得した。と同時に呆れていたのだ。

「そういえば、あの人は確かもうすぐ降格するって噂があったからな、最後のチャンスだと思って出撃したのか？」

「それにしたって無謀の程があると思いますが…？」

そういつたのは不動のおっさんであるが、それに突っ込みを入れる形でエーダも言った。

「まあそれもあるが…。実は“ストライカーズ”が扶桑こしに戻ってくるのが原因だ。前の会議で反対したのは彼だったし、何よりも“女尊男卑”の世には猛反対だった“超タ力派”だった人物だからこちらにも宥めるのに大変だったよ」

また天地指令もその理由を語りため息をついた。その直後、

「指令、その部隊ですが…。軍から待機しろとの命令を違反をしたためその場で解散、指令である黒井元中佐は軍法会議にかけられることです。しかもその中には“核”が搭載したとの情報もありますが今現在調査中です」

次に入ってきた報告にしばし沈黙して…

「阿呆だな…」

剣二はそういうと同時に全員がため息をついたのだった。

「しかし、これで余計な心配がなくなった。各自、作戦開始まで待機してくれ」

が天地指令はこれでいらない心配が無くなり、作戦に集中できると

言って各自に待機を命じた。

それから数時間後…

渋谷のある場所

「いいか、作戦内容を伝える。やつが渋谷<sup>こし</sup>に進入した時点で結界を展開。その後、葵、エイダ、風太は自力で、剣二はシロンに乗って空中でやつを攻撃を開始してくれ。他の皆は地上から援護攻撃だ。何か起きるか分からない。15分間、やつを結界<sup>こし</sup>から出すな！皆気を引き締めてかかれ！！」

後5分ほどで午後1時になるうとしているここ渋谷は避難が完了しているため誰1人もいない状態である。しかしそのゴースタウンとなった渋谷に彼ら（剣二、巧巳、炎火、氷牙、風太、雷丸、地可、光、三住、不動、白波、葵、くらら、朔哉、ジョニー、エイダ、斗牙、永侍、琉菜、リイル、瑞希、エイナ、フェイの23人）が立っていた。不動のおっさんが作戦の説明した後、

「じゃあ、俺と光は先に彼女達に会いに行く。いくぞ、残龍迅」

『ああ、いこうぜ白波』

白波がそういうと右手首にある龍の小物、残龍迅<sup>ザンリュウジン</sup>がいった。

「ザンリュウジン」

そう言うとき残龍迅が光を放ち、ある形に変わっていき、その光が消えると右手首に黒を基本とした龍の顔が、その両方に斧が装着していた。

「リュウジンキー、発動」

懐からマダンキーを出して（形は長方六角形）真ん中にある紋章を押すと鍵頭に隠れていた鍵幅が出て残龍迅の顔の所にマダンキーを鎖し込み、回して押した。

『チェンジ、リュウジンオー』

「残龍変身」

残龍迅がそういつと同時に両方の斧が延び、白波の手に持つと輝き始め、白波が素晴らしいながら天に残龍迅を向けた。そこから光の龍が出てきて天に昇り、そこで吼えると白波の方へ降り始め、白波の体に入っていた。その直後に光を放ちその光が消えると、

「残像が過ぎし時…、迅き龍が光臨する。リュウジンオー、来陣」

髑髏を連想させる黒き鎧を纏った魔弾闘士、リュウジンオーがそこに居た。

「シャドウキー、召喚」

リュウジンオーは腰にあるマダンホルダーを回して、その中から1つのマダンキーを出し、真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出て残龍迅の龍の頭の方に鎖し込み、回して押し込んだ。

『召喚、デルタシャドウ』

「いでよ、デルタシャドウ」

残龍迅が言つと同時に輝き始め、リュウジンオーが天に向けるとそ

これから光が放ち、ある程度進んでいった光が魔方陣の形に変わったのだ。そしてその中から、鳥に似た黒い鳥が出てきたのだ。これがリュウジンオーが召喚できる“獣王”、デルタシャドウである。

“獣王”とは…

各“魔弾戦士”が所有する地球の精霊で、その姿は地球上の動物に姿や幻獣等、獣の姿が多い。また、魔弾戦士を乗せて移動できるビークルモード、魔弾戦士の武器になるウェポンモード、鳥形の獣王の場合は魔弾戦士と合体し空を飛ぶウイングモードに変形が可能である。そのため彼ら獣王は魔弾戦士をサポートする“サポートアニマル”とも呼ばれている。

「デルタシャドウ、ウイングモード」

リュウジンオーはデルタシャドウにそう言った時、デルタシャドウは頭以外を変形し巨大な翼“シャドウウイング”になり、リュウジンオーの後ろに回ると、頭部がリュウジンオーの胸と重なり固定した。

「シャドウウイングリュウジンオー、来陣」

この姿になったリュウジンオーは“シャドウウイングリュウジンオー”である。

「よし、それじゃ行くぞ」

「よろしく願いますー！」

シャドウイングリュウジンオー（以下S Wリュウジンオー）は光に素晴らしい、光も答えるとS Wリュウジンオーに抱えられて空に飛びだって行った。

「よし、もうすぐやつがここに到着する。各自、“変身”だ！いくぞ、剛龍銃！」  
『了解』

不動は腰にある剛龍銃にいい、剛龍銃も答えた。

「ゴウリュウガン！」

不動はそういうと腰から剛龍銃を手に持ち、名を呼ぶと光が放ち始めある形に変わっていき、その光が消えると龍の口に銃口の形をした白き銃を握っていた。

「こっちもいくぜ！激龍剣！」

『応っ！』

「ゲキリュウケン！」

そしてそれに答えるように剣二が激龍剣を、

「僕達もいくよ！蓮龍拳」

『ああ！』

「レンリュウケン！」

巧巳は連龍拳を、

「いくぜ！炎龍丸！」

『おうよ！』

「エンリユウメル！」

炎火は炎龍丸を、

「いきますよ、水龍刀！」

『分かった』

「スイリユウトウ！」

氷牙是水龍刀を、

「いこう！双龍牙！」

『はい！』

「ソウリユウガ！」

三住は双龍牙をそれぞれ小さくなっている魔弾龍のモバイルモードを持ち、名を呼ぶと光に包まれて大きくなり形が各々の武器に変わり、その光が消えるとそれぞれの武器に変えていった。更に、

「じゃあ、いくよ！風龍鎌！」

『ああ、いこう！風太！』

「フウリユウレン！」

風太は腰にある風龍鎌（モバイルモード）を左手に持ち、名を呼ぶと風龍鎌は光に包まれてある形に変わりその光が消えると、緑色の龍の頭部に口から曲刃が出ている鎌が握られていた。

「参るでござる！雷龍槍！」

『御意！雷丸殿！』

「ライリユウソウ！」

雷丸は腰にある雷龍槍（モバイルモード）を右手に持ち、名を呼ぶと雷龍槍は光に包まれてある形に変わりその光が消えると、黄色の龍の頭部に口から直刃が出ている槍が握られていた。

「いくわよ！地龍薙！」

『ふむ、ゆくぞ地可よ！』

「チリュウテイ！」

地可は腰にある地龍薙（モバイルモード）を右手に持ち、名を呼ぶと地龍薙は光に包まれてある形に変わりその光が消えると、茶色の龍の頭部に口から曲刃が出ている薙刀が握られていた。

「リュウガンキー」

「リュウケンキー」

「リュウレンキー」

「リュウエンキー」

「リュウスイキー」

「リュウソウキー」

「リュウフウキー」

「リュウライキー」

「リュウチキー」

剣二は激龍剣の柄を上げ、龍の顔がある場所を上げそこに鍵穴を現し、上から不動、剣二、巧巳、炎火、氷牙、三住、風太、雷丸、地可の順にマダンキーを取り出し、真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出てきてそれぞれの鍵穴（剛龍銃はグリップのホルダーを差し込む所、激龍剣は先ほどの鍵穴、蓮龍拳と炎龍丸は龍の顔、水龍刀は柄の下、双龍牙は左手の方の柄の下、風龍鎌と雷龍槍と地龍薙は龍の顔の後頭部）に鎖し込み直し、



「敵を打ち抜く、龍の弾丸…、魔を撃ち貫く銃士！<sup>ガンマン</sup>リュウガンオー、来・陣！！」

不動のいた場所には、白い鎧を身にまとった魔弾銃士リュウガンオーが、

「地球と共に生れし龍が、闇に蠢く魔を砕く！リュウケンドー、来・陣！！」

「睡蓮の花言葉は“優しさ”と“信頼”。それらを犯すものは許さない！リュウレンドー、来・陣！！」

「炎と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を焼き尽くす！リュウエンドー、来・陣！！」

「水と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を凍て尽くす！リュウスイドー、来・陣！！」

「2つの龍が生まれし時、その牙を持って闇に蠢く魔を切り裂かん！リュウソウドー、来・陣！！」

上からリュウケンドー、リュウレンドー、リュウエンドー、リュウスイドー、リュウソウドーの順に名乗りを上げた。さらに

「風と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を吹き飛ばす！リュウフウドー、来・陣！！」

風太のいた場所には、緑の鎧をまとった魔弾刑士リュウフウドーが、

「<sup>かみなり</sup>雷と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を裁く！リュウライドー、来・陣！！」

雷丸がいた場所には、黄色の鎧をまとった魔弾忍士リュウライドー

が、

「大地と共に生まれし龍が、闇に蠢く魔を叩き潰す！リュウチドー、来・陣！！」

地可がいた場所には、茶色の鎧をまとった魔弾薙士リュウチドーがそこにいた。

「行くわよ、皆！」

「……応！！……」

葵の言葉にくらら、朔哉、ジヨニー、エイダがそれに答え、右手首にある横向きの動物の頭（葵は鷲<sup>ワシ</sup>、くらは獅子<sup>ライガー</sup>、朔哉は犀<sup>サイ</sup>、ジヨニーは象<sup>ゾウ</sup>、エイダは鷹<sup>タカ</sup>。色は葵、くらら、朔哉、ジヨニーは黒。エイダは赤）についているスイッチを押すと、閉じていた口が開いた。

「……チェンジキー、発動！！……」

左手には懷から取り出したマダンキーを真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出て、葵達はそう言いながら開いた口の中に鎖し込み回し、そして左手でその口を閉じた。

『チェンジ、ノヴァイーグル』

『チェンジ、ノヴァライガー』

『チェンジ、ノヴァライノス』

『チェンジ、ノヴァエレファント』

『チェンジ、ノヴァホーク』

上から葵、くらら、朔哉、ジヨニー、エイダの順に右手首につい

ている機械から音声が発生してその機械から光が輝きだした。

「……断空、変身!!」

そう葵達が叫ぶと光が放射してそれぞれ鷲<sup>ワシ</sup>、獅子<sup>ライガー</sup>、犀<sup>サイ</sup>、象<sup>ゾウ</sup>、鷹<sup>タカ</sup>の形になり彼らの中に入っていた。その中では葵は普段着から黒の全身スーツに変わり、足、腰、腕、胴体の順に赤い装甲が装着していき、最後に鷲<sup>ワシ</sup>を想わせる頭部が装着した時、周りの光が晴れた。

同様にくらは、朔哉、ジョニーは黒の全身スーツ、エイダは赤い全身スーツに変わり、くらは青い装甲、朔哉は黄色い装甲、ジョニーは黒い装甲、エイダは深紅の装甲を足、腰、腕、胴体の順に装着していき、最後にくらは獅子<sup>ライガー</sup>、朔哉は犀<sup>サイ</sup>、ジョニーは象<sup>ゾウ</sup>、エイダは鷹<sup>タカ</sup>を想わせる頭部を装着した時、葵と同じく周りの光が晴れた。

「音速の荒鷲!、ノヴァイーグル!!」

葵が変身したノヴァイーグルは右手を顔にかざし、その後その手を腰において自身を名乗り、

「銃撃の獅子!、ノヴァライガー!!」

くらが変身したノヴァライガーは左手を顔にかざし、その後その手を腰において自身を名乗り、

「激突の暴犀!、ノヴァライノス!!」

朔哉が変身したノヴァライノスは右手を顔にかざし、その手を斜めになぞりながら自身を名乗り、

「圧倒の巨象！、ノヴァエレファント！！」

ジョニーが変身したノヴァエレファントは左手に顔をかざし、その手を斜めになぞりながら名乗り、

「天空の才鷹！、ノヴァホーク！！」

エーダが変身したノヴァホークは両手を顔にかざし、その両手を鷹を思わせるポーズを取りながら名乗りを上げた。

「我ら、空になりて、煩惱を断つ者！！」

ノヴァイーグルがそう言いながら天に拳を突き上げて、

「しんせいじゅうそう新星獣装！！ダンクーガ断空我、ノヴァ新星！！！！」

その後、全員でポーズをとりながら名乗ったのだ。

「こつちも行くよ、皆！」

「ええ応（うん）（分かりました）」

斗牙の言葉に永侍、琉菜、リイル、瑞希、エイナ、フェイが答え（「応」と答えたのは永侍、「ええ」と答えたのは琉菜と瑞希とフェイ、「うん」と答えたのはリイル、「分かりました」と答えたのはエイナである）、左手首にある機械にある蒼いボタンを押すと、横についていた紅いカバーが外れ鍵穴が出てきた。

「チエンジキー、発動！」

右手に懷から出したマダンキーの真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠さ

れた鍵幅が出てきて斗牙達はそう言いながらマダンキーを鎖し込み  
回し、また蒼いボタンを押してカバーを閉じた。

『『『『『『『『チエンジ、グランナイツ』』』』』』』』

そう機械音が聞こえた後、その機械が輝き始めた。

「『『『『『『超重、変身！』『』『』『』『』」

斗牙達がそう叫び、同時に紅いボタンを押したのだ。するとその光  
が斗牙達を包み込んだ。その中で斗牙は黒いインナースーツを着て  
おり、その上から魔方阵が降りてきてそれを通過すると、青いスー  
ツと白いグローブとブーツを着ていて、まだその上から魔方阵が降  
りてきてそれを通過すると青いヘルメットが頭についていた（目に  
は黒いゴーグルがついている）。

永侍たちも同様に、黒いインナースーツを着ていて、その上から魔  
方阵が降りてきてそれを通過すると、永侍は真紅、琉菜はピンク、  
リイルは蒼色、瑞希は黒、エイナは緑、フェイは銀のスーツを着て  
おり（白い貝ロブとブーツは共通）、またその上から魔方阵が降り  
てきてそれが通過すると侍は真紅、琉菜はピンク、リイルは蒼色、  
瑞希は黒、エイナは緑、フェイは銀のヘルメットが頭についていた。  
そして光が斗牙達の前に集まり、斗牙は二本の剣、永侍は二本の槍、  
琉菜は二つのドリル、リイルは弓、瑞希は二丁の銃、エイナは二本  
の手斧、フェイは二本のナイフが現れて、武器それらを持つと周りの光が  
晴れた。

「剣の騎士、ソードナイツ！」

斗牙が変身したソードナイツは剣を前に斬りながら名乗り、

「槍の騎士！ランサーナイツ！！」

永侍が変身したランサーナイツは二本の槍を回しながら名乗り、

「ドリルの騎士！ドリラーナイツ！！」

琉菜が変身したドリラーナイツは手に持ったドリルを交差させ火花を散らしながら名乗り、

「弓の騎士、アーチャーナイツ」

リイルが変身したアーチャーナイツは弓を一回回して静かに名乗り、

「銃の騎士、ガンナーナイツ！」

瑞希が変身したガンナーナイツは銃を回しながら名乗り、

「斧の騎士！アックスナイツ！！」

エイナが変身したアックスナイツは斧を回しながら名乗り、

「短刀の騎士！ダガーナイツ！！」

フェイが変身したダガーナイツはナイフを交差させて名乗った。

「我ら、力無き者を守り、その脅威を龍の牙で打ち倒す者！！」

そう言いながらソードナイツは手に持っていた武器を前に構え、

「グランナイツ偉大なる騎士！、只今降臨！！」「」「」「」「」

全員で各々の武器を振りながらそう名乗った。

「よし！、全員位置につけ！！」

リュウガンオーは変身した全員に対してそう言い、すぐに全員別々に散らばって移動した。

同じ頃…

ある基地…

「魔弾戦士。全員位置につきました」

モニターにはそれぞれの位置に魔弾戦士がいて全員が時を待っていた。

「まもなく、目標が到達します」

また、別のモニターにはあの融合魔物が接近してきたのだ。

「カウント10秒前、10、9、8、7、6…」

そうカウントを取るとモニターの魔弾戦士達は足元に魔方阵を出現させた。

「5、4、3、2、1…作戦開始です！！」

するとその魔方阵から光が一直線に出てそれらが1つの場所にぶつ

かると、そこから光が広がりドーム状になっていきその光が地面に付くと外から見たら普通の景色になっていた。そう“混合型の魔物がいない”風景である。中の方は少し暗いがその魔物がいてその付近にはリユウケンドー他魔弾戦士達が集まっていた。

ここ渋谷にて混合形魔物vs魔弾戦士たちの全面对決がここに幕を開けたのだ。

次回に続く。

## 第15話 闘いの幕開け（後書き）

いかかだったでしょうか？

あの？の所は実は「ストライクウィッチーズ」だと思った人たちや  
そうでなかった人谷も感想をいただけたらいいと思います。そして  
次回彼女たちが登場します。

そして1万7千のアクセル突破ありがとうございます！！

それではまた…

第16話 一雷へいかずちの鳥 雷鳥！サンダーイーグル！！（前書き）

どうもセイワです。

今回の話はバトルがメインです。そして彼女たちが登場します！！

それではどうぞ…

第16話 一雷へいかずちの鳥 雷鳥！サンダーイーグル！！

その頃…

扶桑海（我々の世界での日本海）海上

剣二たち魔弾戦士が混合型の魔物と戦闘に入った同じ頃、扶桑に向かっている2つの空飛ぶ機械がいた。その2つは人間と同じ大きさで、その外見は我々の世界には架空の存在である“ストライクフリーダムガンダム”と“ジャスティスガンダム”に似ている。

「竹井さん！、先ほど“SHOT”本部より新型ネウロイのベースにした混合型魔物が渋谷に侵入、対して本部は結界を混合型魔物が渋谷に侵入すると共に張つて中に剣二さんたちを迎撃に出たそうです！。司令官さんからの報告通り私たちが来るまでの時間稼ぎです！」

その内の“ストライクフリーダムガンダム”似の機体から女の子の声が発して、その“ジャスティスガンダム”似の機体に報告したのだ。

「始まつたわね…、このままの速度でいくと予定通り15分くらい掛かるわね。しばらく扶桑からネウロイが出現しないからつて私たちが離れた結果がこれだと笑えないわね。ミナ中佐がいる本体より5分程早いけど…急ぐわよ、宮藤さん！！」

「はい！！」

“ジャスティスガンダム”似の機体から女性の声がしておそらく先程“ストライクフリーダムガンダム”似の機体から竹井と言われていた人（？）だと思われる。“ストライクフリーダムガンダム”似

の機体の報告を考え、早く着くように“ストライクフリーダムガンダム” 似の機体にいる宮藤に対して言い、宮藤もそれに答えて先ほどよりも速度を出したのだ。

またそれと同時期…

先程の海上よりも別の所

また同じころ、一気の輸送機が扶桑を目指して飛んでいた。その中で…

「みんな聞いて！、さっき“SHOT” 本部からの緊急の通信が来て、新型ネウロイのベースにした混合型魔物が渋谷に侵入、対して本部は結界を混合型魔物が渋谷に侵入すると共に張って中に剣二君達が迎撃に出たの。報告通り私たちがくるまでの時間稼ぎよ、それとこっちに白波さんと光ちゃんも来る事も忘れないでね」

ハッチのある機体後方に10人の女性がいた。その中で言ってきたのは緑色の軍服を着ている赤い（そのうえ少し黒い）ロングヘヤーの女性、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐である。前に剣二に電話をしてきた内の1人である。余談だが、彼女は今現在19歳だが、「本当は凄い年増じゃないのか？」とか、「ババア」とあちらこちらで言われているが、私自身は19歳は本当だと信じたい。つていうかそれを言った奴前出るや！！

「うわ！、如何したのミーナ！？。何で泣いているの！？」

「うっん、誰かがわたしの事を庇った気がして…うっ…」

そうミーナが泣いていたのを見て驚いたのは黒の軍服を着ていて金

髪のショートヘヤーの外見上は若い女性はエーリカ・ハルトマン中尉、これでも17歳でこれでも剣二と同じ年である（馬鹿にしているわけはありません、彼女は凄いい子です）。でそんな彼女の指摘通りミーナが涙を流していた。

「で、何かわたしの事を馬鹿にしたような…、まあ褒めているような気が…」

「日常の事を言われたんじゃないのか？、大体お前は…」

何故か怒っている（しかし何故が褒められて少しは機嫌は好くしたが）エーリカに対して、そう説教したのは灰色の軍服を着ていて黒と茶の中間の髪に後で左右に髪を結んでいる長身の女性、ゲルトルト・バルクホルン大尉、ミーナと同じく19歳である。彼女についての細かい所は今省かせていただく（彼女の尊厳のために）。

「だ、大丈夫かな？。剣二さん達…」

「大丈夫ですわよ。まあ、あの“年中冬眠男”は兎も角、彼らの実力はリーネさんもご存じではありませんの？」

心配しているのは、制服みたいな軍服を着ていて茶髪の三つ編みをしている女の子、リコット・ビショップ曹長、通称リーネで歳は16歳だが胸が大きい（おい）。そんなリーネに大丈夫だと言ったのは、青い軍服を着ていて金髪のロングヘヤーでメガネをかけている女の子、ペリーヌ・クロステルマン中尉、リーネと同じ16歳だが胸は…、彼女の尊厳のためここに書かないでおこう。ちなみに彼女が言っていた“年中冬眠男”とは鳴神 剣二、その人である。

「そうだよリーネ、剣兄ちゃんや不動のおっちゃん達を信用しないと。それよりも早く芳佳やジュンジョンに会いたいな」

「そうだな、まあ2人は先に着くだろうし。ああ、だったらあた

しやルツキーニが先に行つていいか？、あたしの能力だつたら同じタイミングで到着できるし……」

ペリーヌとは別の子がリーネに心配するだけと言つてきた。その子は白いワイシャツっぽい軍服を着ていて、黒に近い緑の髪にツインテールをしている少女、フランチェスカ・ルツキーニ少尉、歳はこの体の中でも最年少の１３歳である。それよりも先程登場した宮藤や竹井に会える事を楽しみにしていた。

そんな彼女に同意をかけたのは赤い軍服を着ていてオレンジ色の髪のロングヘヤーの女性、シャーロット・E・イエーガー大尉、通称シャーリーで１７歳だが胸はこの部隊一デカイ（こらこら）。で彼女とルツキーニは先行したいと言つてきたのだ。

「フム…、確かにシャーリーの能力と機体なら宮藤や竹井と同じタイミングで着くのだが、輸送機に白波や光が来るのまではここで待機だ。だが、もし彼らが着いたら私も一緒に行く！」

「ちょ、ちよつと坂本少佐！？。確かに機体のおかげで前線に戦うだけの力は戻ったけど、無茶は禁物……」

「無茶は承知！！。だが祖国の危機に黙っている私ではないわ！！！」

そう考え、まずは白波たちと合流することが先決だと言つたが、もしも合流したら自分も出ると言つた。そう言つたのはルツキーニとは別の白い軍服を着ており、黒髪のポニーテールで右目に眼帯をしている女性、坂本美緒少佐である。歳は２０歳で性格は豪快、「はっはっは」が彼女の口癖で、彼女も剣二に電話してきたうちの１人である。彼女の発言にミーナは驚き、止めようとしたが彼女は自分の祖国の危機に見逃すほどではなかった！

「ああ、坂本少佐。いつもかつこいいですが、今日はいつも以上凄

くかつこいいですわ…、坂本少佐！！私も出撃を志願しますわ！！」  
「ええ！？、だ、だったら私も志願します！！。私は芳佳ちゃんの故郷が危険だと知っていたら絶対駆けつけて守りたいです！！」

その坂本の言葉に頬を赤くするペリーヌ。そして自分も坂本と共に行くことを宣言。その隣にいたリーネは最初は驚いていたが自分も志願して友達の故郷を守ることにしたのだ。

「あのさ、話の途中だけどサーニヤがこっちに向かってくる物体を見つけたって」

「はい、恐らく白波さんと光ちゃんだと…」

彼女達の会話に入ってきたのは水色の軍服を着ていて、金髪のロングヘヤーをした不思議少女、エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉、年は17歳で特技は占いだが…、これも彼女の尊厳のために書かないでおこう。

そしてエイラの隣で共に言ったのは、上半分は白、下半分は黒の軍服を着ていて、水色のショートヘヤーの少女、サーニヤ・V・リトヴァク中尉、年は14歳の一見して線の細い、<sup>はかな</sup>儚げな少女でいつも眠たそうである。

「何？。操縦席、何かが見えないか？、こちらに向かっている客人（白波と光）がいるはずだ。もし見つけたらハッチを開けてくれ。お客人を招きたい」

『こちら操縦席。客人を肉眼で確認、ハッチを開けます』

報告を受けた坂本は操縦席に通信を送り、その確認ができればハッチを開けると言った。その操縦しているパイロットがSWリユウジンオー（と抱えている光）の姿を確認してハッチを開け、そこにSWリユウジンオーが入ってきた（ちなみに翼は折りたたまれている）

。

「久しぶりだな、白波。いや、今はリュウジンオーか？」

「挨拶はいい。今はそれよりも例の物マダンキーを見せてくれ。光、準備を」

「ええ、… “カノンの書よ、我ヒカリ・カノンの名において、その姿を我の前に現れよ” …」

着艦してきたリュウジンオーを確認し、久しぶりの再会に坂本がリュウジンオーに声をかけるが、その本人はそれよりもマダンキーの鑑定を最優先にし、光にカノンの書を出すように言い、光が呪文となると足元に魔法陣が現れそこから黄色の表紙の分厚い本が出てきた。

「これが今回の遠征で手に入ったマダンキーよ」

ミーナはそう言いながらとりだした鞆のふたを開けると、そこには何十個のマダンキーが入っていた。

「結構数が多いな、とりあえず俺はここに残る。光ひかりの護衛もかねてな、ついでにこの輸送機も守ってやる。」

「ええ、わかったわ。ついでなのは余計だけど。…それで坂本少佐、不本意ではありますが、リコット・ビショップ曹長、フランチエスカ・ルツキー二少尉、ペリーヌ・クロステルマン中尉、シャーロット・E・イエーガー大尉、以下4名を連れて先行で扶桑に行ってください。ただし、無茶はほどほどにしてね。この事は私自身の“お願いよ”」

リュウジンオーはマダンキーの数を見て時間がかかると思いここにおいてその護衛（本当は光の護衛で輸送機はほんのついで）をかつて出た。その事を聞いたミーナは坂本の申し出と事態の深刻さを受け、

先行することを承認した。またくれぐれも無茶はするなと言われた。

「判った。まあ無茶するから約束できないがな。リーネ、ペリーヌ、ルッキーニ、シャーリー、行くぞ!!」

「了解!!」

坂本はミーナにそう言うത്とリーネ、ペリーヌ、ルッキーニ、シャーリーにそう言い、その4人は敬礼をして坂本の順にハッチに走って行き、

「行くぞ、坂本 美緒、出る!!、剣聖、天空武装!!」

「続けて、リコット・ビショップ、扶桑に向けて行きます!!ウツド・スナイパー、天空武装!!」

「ペリーヌ・クロステルマン、行きます。ブルー・ブリッツ、天空武装!!」

「フランチエスカ・ルッキーニ、イックヨヨヨ、ガイア・パンサー、天・空・武・装!!」

「シャーロット・E・イエーガー、振り切るぜ!、ソニック・セイバー、天空武装!!」

飛び降りたのだ。その後“何かの小物”を持つと光に包まれてそれが晴れると、坂本は“ガンダムエクシア”に似ている機体（武装が多い）に、リーネは“ケルデイルガンダム”に似ている機体で、ペリーヌは青き装甲の“ブリッツガンダム”に似ている機体（武装は多い）。ルッキーニは“ガイアガンダム”に似ている機体で、シャーリーは“セイバーガンダム”に似ている機体に身を纏っていたのだ。

「んじゃ、往くとするか。変形!!」

そう言つてシャーリーは機体を変形して高軌道戦闘機に変えると坂本以下4人を乗せ、トップスピードで扶桑に飛んでいった。

「美緒、気をつけて…」

それを見送つたミーナはそう呟いた。その横で、

「…これは目的のキーじゃないわ、次のキーをおねがい」

一生懸命マダンキーの鑑定している光の姿があつた。

場所を戻して渋谷

一方そんなことが起こっているとは露知らない剣二達魔弾戦士たちはというと、

「わが名において真の姿を見せよ、汝<sup>なんじ</sup>、ウインドラゴンの『シロン』よ」――」

そう呪文を唱えているリュウケンドーの前にはシロンが風をまとつてその後ろに小さい体より大きい白い翼が生えてその体を包んだ。

「その大いなる姿を現代<sup>いま</sup>の世にて蘇<sup>よみがえ</sup>れ！！『復活<sup>リボーン</sup>』！！！！」――

その言葉とともに白い翼に野中から光が照らし、それが収まり翼が開くとそこには白き龍、シロンの真の姿“ウインドラゴン”がいたのだ。

「やれやれ、久しぶりの戦いはネウロイの合成もんかよ」

とシロン（大）が魔物を見てそう言ったのだ。

「そう言うなシロン、宮藤達が帰ってくる記念の”パーティ”だと思っただけだと思っただけだ」

「それにしても少ないようだが…」

『いや、剣二気をつけろ!!』

リュウケンドーはそういい、シロン（大）は突っ込むと激龍剣が注意の声を上げた。見ると魔物から紫色の液体が滲み出てきて、それが地面に落ちるとそこからジャマイマが何匹か現れた。だが問題はその数であり魔物から滲み出た液体は次々を落ちていき、それらを合わせるとジャマイマの数は数百になった。

「ウゲ!?、あの魔物にあんな能力が!？」

『先ほどの指令の説明聞いていなかったのか?、あの魔物はジャマイマが何十体もの合成されている。恐らくその部分を分離させたのだろっ』

「なるほど、つまりあの魔物はジャマイマの“母艦”ってわけね。これ以上増えるのは…、って何あれ!？」

リュウケンドーが驚きの声を上げて、激龍剣がその説明をした。そしてノヴァイーグルがあの魔物をこのままにしたらジャマイマの数が増えて被害が増えることを言おうとした時、その魔物の次なる変化を見たら驚きの声を上げた。それは魔物から紫色の液体が滲み出た所までは同じだが、そのままジャマイマの姿に変わった。“悪魔を連想させる翼が背中にはえて”。

「空中戦用のジャマイマですね。あんな姿があるなんて…」

「やつらは唯一ヶ月休暇したわけじゃなかったわけか。おまけにまた何かが出てきたぜ」

ノヴァエレファントはその翼が生えたジャマイマ、“スカイジャマイマ”を見て言った後、ノヴァライノスが言うとおり、魔物から紫色の液体が滲み出てきて、それが地面に落ちるとそこからジャマイマが現れたが腕の所が違っていた。“腕が大砲”になっていて、その砲身をリュウケンドーたちに向けた。

「!?、いかん、散開しろ!!」

リュウガンオーが危険を察して散開をしろと言い、リュウケンドーたちはバラバラに散らばった。先ほどいた場所に砲身付きのジャマイマ、“バズーカジャマイマ”のはなつた砲撃が着弾、大爆発を起こしその煙が晴れると地面に穴を開けた。その光景（地面に穴をあける）はそれほどの破壊力を見せつけられたのだ。

「チョツ…、なんて攻撃なんだよ。アレに当たったら洒落しやれにならないよ!!」

「それだけじゃないぜ、リュウレンドー。おまけになんか新たなジャマイマも出てきたし」

リュウレンドーは先ほどの攻撃で穴になった場所を見てアレに当たったただでは済まされないと確信した。

その横でリュウソウドーはまた新たなジャマイマが現れた事を知った。その両手には刃物になっている“ソードジャマイマ”が刃物を交差しながら前に進んできたのだ。

「まずはあの大砲つきを何とかするしかないですね。アレをこのままにしたら空中で狙い撃ちをされたらこちらは不利になりますし、

それにあの魔物に攻撃できません…」

「“約一名以外”はね」

ダガーナイツは冷静に分析をして、このままでは混合魔物母艦の攻撃ができないと判断。先にバズーカジャマイカを倒すことを決めたが、ガンナーナイツの言葉でダガーナイツは彼女の視線を見た。そこには…、

「オラオラ、逆鱗に触れた激龍の剣士とその使い魔のシロン様のお通りだ!!」

「アイドン（薩摩弁でお前ら）退きやがれ！、退かねえとイッキ（薩摩弁ですぐに）斬るぞコラ!!」

スカイジャマイカの群れで手で殴る、足で蹴る、尻尾でなぎ払うなど大暴れしているシロンとその背中でスカイジャマイカを斬りまくるリュウケンドーの姿がいた。（すぐに斬ると言ったが既に斬っているが…）

「…、いつの間に空に上がったんでしょうか？」

「知るか、そんなの」

ノヴァエレファントの疑問にノヴァライノスが知らんと言った。

説明しよう!!（↑by作者）

先程の攻撃で危険を感じたリュウケンドーはシロンの背中に乗りそのまま上空へ飛んだ。もちろん煙で見えなくなったので攻撃する心配もない。そしてそのままスカイジャマイカとの空中戦と発展したのだ。以上、説明終わり!!

「あれ？今誰かが言っていなかった？」

「だから知らねえって」

ソードナイツの言葉にランサーナイツは知らんと言った。

「そんな事を言っている場合か？。あの大砲つきを何とかしないとリュウケンドーは遅かれ早かれ落ちる。そんな事すら忘れてアイツ（リュウケンドー）を危険にさらす気か？」

リュウガンオーの言葉に他の魔弾戦士は改めて現状を把握し、

「さすがにそうですね。どの道、先にあの大砲つきを何とかしませんと」

そう言いながらリュウスイドーは水龍刀の柄を握り今にも斬りに行く構えた。

「そうだね、じゃあ行きますか！！」

リュウレンドーの言葉で彼らはジャマイマの群れに走りこんだ。

その頃扶桑付近では…

交戦に入ったリュウケンドー達魔弾戦士とは別の所、扶桑海を飛んでいた竹井と宮藤はというと…

「扶桑が見えたわ！、こちら、連合軍第501統合戦闘航空団所属、  
竹井 醇子大尉！」

「同じく連合軍第501統合戦闘航空団所属所属、宮藤 芳佳曹長  
！」

そう通信を繋げ、自分たちの所属、名前と階級を言った後、

『こちら扶桑軍本部、要件は何でしょう？』

「こちらに連絡が入っていると思うけど、これから扶桑に進行します！」

『要件は受けたまっています。長期の任務、ご苦労様でした』

竹井は通信してきた通信士に要件を言った後、その通信士の言葉を聞いてから通信を切り、

「急ぎまし……」

『竹井！、宮藤！。聞こえるか、応答しろ！！』

「この声は…、坂本さん！！」

竹井は宮藤に言おうとした時、別の声が聞こえた。宮藤はその声に聞き覚えがあり、その方角を見ると、こちらに向かってくる機体が見えた。それをよく見ると一機の機体が四機を乗せていた。そしてそれらが近くに来るとその内の一機が宮藤達の近くに来た。

「同時に扶桑に着いたか…、だが久しぶりだな」

その一機はもちろん坂本である。

「芳佳ちゃん！」

「あ！、リーネちゃん！！」

宮藤の所にリーネが来て、手を合わせていた。

「お、竹井大尉。任務大丈夫だったか？」

「あら、シャーリーさん。ええ、こっちは…」

「ジュンジュユユユユユユユン、会いたかったよおおお  
おおおおお」

「ちょ、ちよっとルツキーニさん！？」

竹井の所にシャーリー（変形したまま）が来て任務の事について話そうとしたが、ルツキーニが竹井に抱きついて来たため慌てたのだ。

「はっはっは、竹井モテモテだな。まあ再会で何か話したいがそれは後だ。今現在交戦している剣二達魔弾戦士の援護に向かうぞ！」

「『『『『『了解！！』』』』』」

坂本はそんな状態を笑ったがそれよりもやるべき事を宮藤達に伝え、その後、宮藤達は敬礼し全力で渋谷に向かった。

そのリュウケンドー達魔弾戦士はというと、

「ライノスバルカン！！」

「エレファントランチャー！！」

先に仕掛けたのはノヴァライノスとノヴァエレファントだ。どこから出したのか知らないのかノヴァライノスは4つの砲身を持つバルカン砲を両手に持ちそれをジャマイマの群れに向けて掃射し、ノヴァエレファントは巨大な砲身の大砲を肩に担いでジャマイマの群れ



その攻撃で頭が吹っ飛んだジャマイマは短い言葉の後倒れた。また別の所で、

「大地の槍よ、悪しき者を貫かん！！。グランドダッシャー！！！！」

リュウチドーが呪文を唱え、それが終わったときには地面に石の槍が飛び出してきたのだ。それも1つではなく、無数の石槍が現れそれらがジャマイマに突き刺さったのだ。さらには、

「スプリットショット！！」

ガンナーナイツがそういった後、手に持った銃を連射しながら放射状に回しながら固まっていたジャマイマを一掃し、

ながれぼし  
「流星！！」

アローナイツが手に持った弓の弦を引くと何本かの矢が現れ、それを放すと矢が全て飛んで行きジャマイマに突き刺さり消えて逝った。そんな彼らの攻撃の間に突撃したのは、

「一度やってみたかったんだよねえ、爆炎剣！！」

そう言いながらリュウチドーは手に持っていた炎牙に炎をまとってそのままジャマイマに斬り付けたのだ。またそこは別の所では、

「ギロジンカッタアアアアアア！！」

一回転してその遠心力と、落下のスピードでその手に持った剣でジャマイマを斬りつけるソードナイツと、

「ファランクス!!」

無数の突きでジャマイマを突きまくるランサーナイツに、

「パワアアア、ナツクル!!」

ドリルの先端にエネルギーを集め、それを突き出すとそのエネルギーが前方に飛んでそこにいたジャマイマを倒したドリルナイツに、

「インパクト、カイザアアア!!」

そう言いながら大きく振りかぶった斧を地面に叩きつけてその衝撃波と破片で攻撃を与えるアックスナイツに、

「つむじかぜ  
旋風!!」

両手に持った短剣で次々とジャマイマを斬り付けながら進むダガーナイツであった。また、

「はあっ!!」

「じゃあ!!」

「そうりゃあ!!」

そうソードジャマイマの刃物をさばいて気合一閃で手に持った魔弾龍で斬り付けるリュウスイードとリュウフウドーとリュウソウドーに、

「油断大敵でござるよ!!」

そう言いながら複数の苦無<sup>クナイ</sup>をジャマイマに投げつけるリュウライドに、

「どおりやあ!!」

とジャマイマの一匹を捕まえ、それを別のジャマイマに投げつけるリュウエンドーの姿があり、

「イーグルダガー!!」

手に持った短剣でジャマイマの頭を刺すノヴァイーグルに、

「ダンプレード!、ツイン!!」

両手に持った剣の柄の下を連結してジャマイマを斬り付けるノヴァホークであった。

「よし、あらかた片付いたな。ノヴァイーグル、ノヴァホーク、リュウフウドー、今だ!!」

そうこうしている間に10分が経過してバズーカジャマイマを含むジャマイマ軍団の大半を倒したリュウケンドー以外の魔弾戦士たち。そのうちの1人であるリュウガンオーはこの好機に上空の混合型の魔物に対しての攻撃を開始を命じた。また先に上空で大暴れしているリュウケンドーとシロンのおかげでスカイジャマイマの数が少なくなっていた。

「了解!、ノヴァイーグル、スカイモード!!」

「同じく、ノヴァホーク、スカイモード!!」

ノヴァイーグルがそう言うのと背中中のバックアップが変形して上半身を覆い手には2丁の銃を持ち、足にはミサイルポットが展開して驚を連想させる姿に変わり、ノヴァホークも鷹を想わせる姿に変わったのだ。

「ファルコンキー、発動!!」

その変形の後、リュウフウドーは腰にあるマダンホルダーを回して、その中から1つのマダンキーを取り出して、真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出て風龍鎌の龍の顔の後頭部に鎖し込みまわし、押し込んだ。

『召喚、ストリームファルコン』

「いでよ、ストリームファルコン!!」

風龍鎌がそう言うと同時に輝き始め、リュウフウドーが天に向けるとそこから光が放ち、ある程度進んでいった光が魔方陣の形に変わったのだ。そしてその中から隼はやぶさに似た緑の鳥が出てきたのだ。これがリュウフウドーが召喚できる獣王、ストリームファルコンである。

「ストリームファルコン、ウイングモードだ!!」

リュウフウドーがそう言った直後、ストリームファルコンが頭以外を変形し巨大な翼“ストリームウイング”になり、リュウフウドーの後ろに回ると頭部がリュウフウドーの胸に、背中にアームが固定した。

「ストリームウイングリュウフウドー、来・陣!!」

この姿になったリュウフウドーは“ストリームウイングリュウフウドー”である。そしてその3人は上空に飛び、

「よう、遅かったな」

先にながっていたシロンに乗っているリュウケンドーと合流した。

「私達が来るまでに片付いているわね。で、どう？、あの母艦の魔物は？」

「ああ、それがな…」

ノヴァイーグルが辺りを見渡し、スカイジャマイマがいない事を知りながらも本来のネウロイとの混合型の魔物の特徴を聞き出そうとしたら、リュウケンドー何やら難しそうに言った。

「まあ、攻撃すればわかるが…」

「？。じゃあ攻撃するわね。イーグルライフル！！」

攻撃すればわかるとリュウケンドーが言い、不思議そうに思いながらもその魔物に攻撃することにしたノヴァイーグル。手に持っているイーグルライフルで攻撃したのだ。そのダメージが通ったのは通ったのだが…

「って、攻撃が効いていない！？」

「違います！再生速度が速すぎるんです！！」

ノヴァイーグルが攻撃が通じないと思ったがノヴァホークが違うと言った。そう、攻撃は当たるのだが“再生する速度が速すぎるのだ”。先ほどの攻撃はすぐに再生してしまったのだ。

「おまけに全体に攻撃を与えて核<sup>コア</sup>を出そうとしたが、その核が移動するみたいで何回も攻撃したが全然その姿が見えないんだ」

またリュウケンドーはベースとなったネウロイの弱点である核を攻撃を試みたがそれ自体が移動する見たく困っていたのだ。

「つまり、リュウケンドーの話をまとめますと、“再生速度が速い”と“核が移動する”。つまりあの魔物を倒すには“再生速度が追いつかないほどの攻撃を叩き込む”しかありませんね」

「その案でいこうよ。けど、攻撃を受けてもすぐに回復するなんてね。おまけにネウロイは“魔法”での攻撃以外は駄目だからね。あ  
る意味最強の母艦だね」

ノヴァホークは今までの話をまとめてその攻撃案をいい、ストーリー  
ムウイングリュウフウドー（以下S Wリュウフウドー）はそれに同  
意しながらもこのタイプのネウロイの感想を言った。

そう、ネウロイは従来の武装は効果がなく、唯一対抗できるのは“  
魔力”でそれを最大限発揮できる“ストライカーユニット”が開発  
されたのだ。また同時期に開発された“インフィニット・ストラト  
ス”はもともと宇宙で活動できるように造られているため一応瘴気  
の中でも活動できるが“魔力”を増幅できないため見送る事にした  
のだ。

「くそっ、こっちは事件の事で手いっぱいって言うのに、余計な仕  
事を増やすなって言うんだ」

『だが、どうするんだ？あの魔物を倒すにしても…む？』

「どうしたんだ？」

リュウケンドーが舌打ちをしながらやくのを激龍剣がなだめようとした時、何かに感知した激龍剣をリュウケンドーは聞こうとしたら、

『何かが、音速の速度でこっちに向かって来ている』

「ちょっと待て。まさか、結界の中に向かって突っ込むってことなのか？」

『フム、そうなるな』

激龍剣の言葉にリュウケンドーが最悪の事態を激龍剣に聞いたらそうだと激龍剣が言ったのだ。

しばし沈黙の後…

『もうすぐ結界内に突っ込むがな』

「……っておおおおおおいい！！」「」

激龍剣が言った一言でノヴァイーグル、ノヴァホーク、SWリュウフウドーが驚きながらも突っ込んだのだ。そして、結界の一部が何かによってぶち破られたが、それは数秒のうちに回復していった。そして突入してきた何かがリュウケンドーたちに向かってきたのだ。

「って宮藤、坂本さん、竹井さんに、リーネにペリーヌ、シャーリーにルッキーニじゃないか！？、合流する時間よりも早いじゃないかよ！？」

リュウケンドーが言う通り、そこにいたのは先ほど合流した宮藤達であった。

「はっはっは、何、シャーリーの能力があれば早く着くし、宮藤たちと合流できる。それに扶桑の危機に黙っている私ではない!!」  
「答えになっっている様でなっていないが分からねえが、相変わらず豪快だな、あんた…」

高笑いしながら答える坂本に、シロンは呆れながらも言ったのだ。

「坂本さん、それよりも…」

「うむ、分かっている。敵の魔物のタイプはお前達の会話を通じて聞いている。確かに核が動いているのは分かるが、広範囲で攻撃しようにもこの数ではな…」

宮藤が坂本に何かを言おうとしたら坂本は知っており、あの魔物を対処法である。しかしそれには頭数が揃わないといけないのだが…

『応答して!、リュウケンドー、応答して!』

そうリュウケンドーのヘッドカバーから通信が聞こえてきてリュウケンドーはその声を知っていた。

「ミーナさん。どうしたんですか?」

『有ったのよ、“ダガーキー”が!、今からそっちに“転送”するからね』

「って有ったんですか!?!、まあ博打にも程が…、ってうおっ!?!」

リュウケンドーは通信を開いてミーナからの用件を聞こうとしたら例のキーが見つかり、自分の方に転送することだった。リュウケンドーもそれには驚いたが、魔物が赤色の光線を発射したためそれをよけるためにシロンが回避したため、また驚いたのだ。

「すまねえ兄貴、マダンダガーを使うにもあの魔物がそう都合よくいくとは思えねえ、ここは違う場所で呼ぶのがいいと思うぜ」

「シロンの言う通りですリュウケンドーさん、こっちは私たちに任せてください。その間にダガーキーを」

「ああ、分かった」

シロンの提案と宮藤が言った後、それに同意して通信を一旦切り、そう言った後リュウケンドーはシロンに近くのホテルの屋上に降り立ち、

「ミーナさん、こっちは準備いいですよ」

『ええ、じゃあ光さん。お願いするわ』

通信を開いて転送をお願いした。その時にリュウケンドーの頭上に魔方阵が現れてそこからマダンキーが出てきてそれを掴んだ。

「よし、いくぜ！。ダガーキー、発動！！」

リュウケンドーは激龍剣の柄を上げ、龍の顔のある場所を上げそこに鍵穴を現れると、ダガーキーの真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出てきて激龍剣の鍵穴に鎖し込み回し、激龍剣の柄を下げ龍の顔を元の位置に戻した。

『召喚、マダンダガー』

「いでよ、マダンダガー！！」

激龍剣が言うと同時に輝き始め、リュウケンドーが天に向けるとそこから光が放ち、ある程度進んでいった光が魔方阵の形に変わったのだ。そしてその中から中心に黒い色の球体が埋め込まれている短剣が現れて、それをリュウケンドーが掴んだのだ。

「これが…、マダングガー…」

『剣二、サンダーリュウケンドーになれ。そしてマダングガーの吹くのだ』

「分かったぜ！。サンダーキー、発動！！」

マダングガーを見ていたリュウケンドーだったが、激龍剣の言葉に我に帰りマダングガーを地面に刺して、激龍剣の柄を上げて龍の顔のある場所を上げそこに鍵穴を現れると、リュウケンドーは腰にあるマダンホルダーを回しその中の1つのマダンキーを取り出し、真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出て激龍剣の鍵穴に鎖し込み回し、激龍剣の柄を下げ龍の顔を元の位置に戻した。

『チェンジ、サンダーリュウケンドー』

激龍剣の声と同時に黄色の雷が剣先に集まりだし、

イマヌマ

「雷鳴、武装！！」

リュウケンドーは激龍剣を自分の目の前に構えながら叫び、剣先に集まっていた雷が彼の周りを囲みながら飛び、その姿を黄色の雷の龍に変わるとリュウケンドーの中に入っていく、その体を雷に包まれてそれが晴れると、リュウケンドーの肩、肘、膝、頭に雷を模った細部がつき、胸のクリスタルが黄色に変わっていたのだ。

「サンダーリュウケンドー、来・陣！！」

そう言いながらポーズを取るリュウケンドーの今の姿は、強大な雷の力を取り込みその力を自在に操るために変えた姿、サンダーリュウケンドーである！！だが、この姿になると強大な力に体力を消耗

してしまう、まさに諸刃の剣なのだ。

「よし、吹くか！、…で、どう吹くんだ？」

『適当に吹け、後はマダンダガーが何とかしてくれる』

激龍剣をモバイルモードにして腰におきマダンダガーを持ちいざつて時にどう吹くのかサンダーリュウケンドーが迷ったのだが、激龍剣がアドバイス(?)をしたので適当に吹くことにしたのだ。

それと同時期

輸送機

サンダーリュウケンドーがマダンダガーで吹いていた同時期の輸送機の中、

「はあっ、やっと終わった…」

そう言つて座り込んだ光の周りにはマダンキーが散らばっていた。

「お疲れ様。けど、よかったの？。ダガーキー以外のマダンキーを鑑定して」

「したかないでしょ、もし未鑑定のままで使用したら何か起こるが分かったものじゃない。だからこれからの戦いのために一気にしたのよ」

「しかし、今は休みも取った方がいい。そうしないといざつて時に動けないからな」

そう光に毛布をかぶせるミーナの言葉にその理由を答える光。だが、

今は休めと言ったのはリュウジンオーの言葉にうなずいたのだ。

光が言っていたマダンキーの危険性とは…

魔物から取り出したマダンキーはこのままでは使えない。その理由はマイナスエネルギーがキーが纏まりついていて、いくら魔弾龍でもこのままキーを発動したら機能に障害を起こしてしまう。そのため光のカノンの書で鑑定と同時期にマイナスエネルギーを浄化しているのだ。

「じゃあ、私も休もうかな？」

「ハルトマン、我々は今は待機中だ。休む事は…」

「あのさ、話の途中だけど…」

エーリカが休む発言に自分も休むと言ったらゲルトルトが突っ込み、また説教をしようとした時、エイラが話に割り込んできたのだ。

「如何したんだ、エイラ？、話に割り込んできて…」

「あのさ、さつきからカノンの書が何か輝いているけど…、如何なっているんだ？」

ゲルトルトがエイラに何か用があるのかと聞いてみたら、カノンの書が輝いているため何かあるのかと思ったのだ。そしてそこにいる全員が光のカノンの書を見たら…、ひとりでにページがめくり、あるページでめくるのを止めるとそこから魔法陣が浮かび上がってきてそこからは黄色の鷹が現れ輸送機を飛び出して行ったのだ。

「光龍杖、あれがサンダーイーグルなの？」

『ええ、別名「雷鳥」、数ある獣王の中で気性が荒くリュウケンド

「以外使えなかった獣王よ。おそらくマダングダーの音色を聞いて飛んで言ったのね。あの子が唯一好きな音色なのよ」

光の問いを答えたのは彼女の腰にある魔弾龍、光龍杖（こうりゅうじょう）である。

「…、ねえ私たちの出番、あると思う？」

「無理だな」

それを見送っていたエーリカはエイラに質問をして、エイラがそれに答えたのだ。つまりは、自分たちが着く前に終わっているということである。

「まあ、もしもの事があるからここからは各自飛んで渋谷に向かうわよ」

しかし何か起きるのか分からない、そのためミーナはここからは自分たちで渋谷に向かって飛ぶことにしたのだ。

「で、輸送機（こうすうき）は如何するんだ？」

「近くの基地に着艦許可をしたからいいのよ、元々そうする予定だったし」

リュウジンオーの疑問にミーナは答えた後渋谷（戦場）に向けて移動を開始した。

で、その渋谷というと、

「撃って撃って撃ちまくってやる！ー！」

そう言っただノヴァライノスがライノスバルカンを撃ちまくっているが、

「全然効いていないじゃないの!？」

「先ほどの葵さん達の会話通りだとあのネウロイは再生速度が速いって言っていました。けどすぐに再生するのはおかしいと思います。なら導き出す答えは…」

「魔物になっちゃった事でその再生速度が速まったって事が…、あいつら、とんでもない化け物<sup>モンスター</sup>を生み出しやがって!!」

ノヴァライガーが驚きの声を上げるが、その横でノヴァエレファントが冷静に分析をして異常な再生速度がネウロイが魔物化によって強化された事になると予想。ノヴァライノスがその事に気がつくとそれを生み出した連中に愚痴を付いたのだ。

「それよりも、朔哉さん!。撃つ時は「ダナダナダナ!」って言うってくださいって何回も言っているんじゃないですか!」

「おい、リュウレンドー!、俺は正義のロボットの<sup>トランスフォーム</sup>変形する犀か!?。そんな事は言わないって何回も言っているだろう!!」

「そんな事を言っている場合!？」

ノヴァライノスとリュウレンドーの会話にノヴァライガーは突っ込んだのだが…(汗)

「とにかくだ、遠距離攻撃出来る奴は魔物の攻撃を…ってリュウレンドーとリュウソウドー!、お前たちも攻撃に参加しろ!!」

「無茶言わないでくれよ、僕の遠距離攻撃は時間制があるって言わなかったっけ!? あんな再生する奴だったら時間を過ぎてしまっよ!!」

「俺も同意見だ。どっちかって言えば中距離射撃に設定しているからあんな遠くの敵にはこうで出来ないんだ」

リウガンオーが遠くに攻撃できる全員で魔物を攻撃しようとしたが、参加しているはずのリウレンドーとリウソウドーの2人が参加していない事に注意をしたが、それぞれの理由から攻撃できない事が分かったのだ。

「ようするに役立たずって事？」

「よし、ちよつと顔出せ」

「今はそんな事をやっている場合じゃないでしょう！？、後にしなさい！！」

ソードナイツがリウレンドーとリウソウドーを怒らせる一言を言ってしまい、今にも一触即発になったがガンナーナイツが2人を落착させたのだ。

でその上空では…

「いっけえええ！！」

そう宮藤は腰のレールガン、背中に装備しているビーム砲、さらに翼の羽の部分が分離して小型のビームガンに両手に機関砲とロングビームライフルを一齐に発射し魔物に直撃したが、

「宮藤ちゃんの攻撃もすぐに回復するなんて！？」

「デタラメの再生速度ですよ！？」

リーネとペリーヌの言葉通り、すぐに再生したのだ。

「不味いわね、ただ攻撃するだけじゃすぐに再生してしまうわ。直接核を狙わないと」

「だが、それをやるにはあのネウロイを貫通するほどの攻撃を与えないといけないだが…、ん？なんか聞こえなかったのか？」

竹井が今現在の戦力では倒せないと判断し別の方法を提案したが、坂本の言う通りそれをやりのける戦力がないと言った時、鳥の声が聞こえてきたのだ。その刹那、結界の一部が破られて、それが魔物の上に移動するとそこからいくつもの雷が落ちてきて魔物にダメージを与えたのだ。それは先程のサンダーイーグルである。

『剣二、あれがサンダーイーグルだ！』

「あれが、サンダーイーグル…、よし、サンダーイーグル、さっそくで悪いがウイングモードだ…！」

近くのビルにいたサンダーリュウケンドーはその光景を見ていて、元の剣に戻っていた激龍剣の言葉にリュウケンドーはサンダーイーグルにそう言うと言ったサンダーイーグルはリュウケンドーの方に向かって来て、足をリュウケンドーの肩に掴むとそのまま巨大な翼に変形して言ったのだ。

「サンダーウイングリュウケンドー、来・陣…！」

右手に激龍剣、左手にマダンダガーを握ってサンダーウイングリュウケンドー（以下S Wリュウケンドー<sup>サンダーウイング</sup>）は名乗ったのだ。

『剣二、マダンダガーの力を使え。使い方は頭の中に流れてくる』

「よし、“マダンダガーの中に眠るカノン文字よ、螺旋を描いて魔を縛る鎖とならん!”、“ダガースパイラルチェーン!!”」

激龍剣の言葉でその使い方を知ったSWリユウケンドーはマダンダガーを前に出し、呪文を唱え、それが終わると中央の球体からカノン文字が出てきて魔物に巻きついたのだ。

「コレは!?!」

『敵を縛る光の鎖、ダガースパイラルチェーンだよ。だけどマダンダガーの能力はこれだけじゃないよ』

SWリユウフウドーが驚きの声を上げて、風龍鎌が魔物を縛っている鎖の説明をした。だが、如何やらまだ何かあるようである。するとSWリユウケンドーが激龍剣とマダンダガーの柄同士を連結したのだ。マダンダガーの刃が伸び、

「激龍剣、ツインエッジモード!!」

『ツインパワー』

SWリユウケンドーがそう叫び激龍剣がそういったのだ。そして、

「この魔力なら…、行くぜ、“シフトエレメント”!!」

そうSWリユウケンドーが叫ぶとどこからか黒い雲が辺りに周り出してきてすべてを包むと、突然雲から雷が走り魔物に襲いかかってきたのだ。そうこの雲は雷雲なのだ。

シフトエレメントとは…

自分の得意とする環境にする魔術で例えば火の属性のファイアーリ

ユウケンドーの場合は辺りを火の海にすることで自分の能力を最大限に発揮できるのだ。

しかし、これを行うには大量の魔力を消費してしまうのだ。ただでさえサンダーリュウケンドーは魔力を消費してしまう。マダンダガーは文字どおり魔力増幅装置なのだ。

「一気に行くぜ！、ファイナルキー、発動！！」

そういい、SWリュウケンドーは激龍剣の柄を上げて龍の顔のある場所を上げそこに鍵穴を現れると、リュウケンドーは腰にあるマダンホルダーを回しその中の1つのマダンキーを取り出し、真ん中の紋章を押すと鍵頭に隠された鍵幅が出て激龍剣の鍵穴に鎖し込み返し、激龍剣の柄を下げ龍の顔を元の位置に戻した。

『ファイナル“クラッシュ”』

「……ちよつと待て、今ファイナルクラッシュって言わなかったか？」

激龍剣が言った言葉に驚いたSWリュウケンドーはそれについて質問してきたら、

『フム、まあ簡単に言えばファイナルブレイクの上位版だな』

「ならそのままあいつにぶつけるか！、ちよつと荒っぽく行くぜ！！」

激龍剣の答えに理解したSWリュウケンドーは激龍剣を体と同じく水平に構えるとそのまま魔物に突撃したのだ。

「んなつ、何するつもりなんだ！？」

それを見たシャーリーは驚きの声を上げた。

「獣王、魔段龍、剣士、三つの力が今1つになる!!」

そう叫ぶと雷雲から雷撃が彼らの周りに集まり出してその姿を雷の鳥に変わったのだ。

「三位一体、雷鳥突き!!」

そしてそのまま魔物に突撃!、そして魔物の体を貫通しその貫いた場所に核があったのか、SWリュウケンドーが技を解除するとその体は碎け散り、光に変わって逝ったのだ! マダンキーを残して。

「闇に抱かれて…、眠れ…」

「何決め台詞を言っている場合か。すぐに復興活動をするぞ」

SWリュウケンドーは決め台詞を言ったが、その後で坂本に怒られて魔物（リュウケンドー達もだが）に壊された街の修理渋谷に取り掛かった。

で、それから数時間後…

とある基地

「よくやってくれた、被害も最小限に抑えたうえ新たな力が我々の手に“戻ってきた”。しかし、新たな魔物が現れた今、気を引き締めてくれたまえ…。ところでバルクホルン君、何故剣二君に関節技を掛けているのかね?」

「いえ、ちよつとこの“年中冬眠男”の根性を叩きなおしている途中です」

「ちよ…、マジしゃれにならないって!!。こ、腰が…」

「黙れ!!、戦士たるもの、眠気を抑えて立っているものを貴様はあるうことが立ったまま寝るといふ違法行為をした!!。これはさつき言つた貴様の根性を叩き直す行為だ!!」

「だからつて腰がお、折れる…。もし折れたらどうするんだよ!？」

「安心しろ。それは宮藤に治してもらえ」

「ええ!？、わ、私ですか!？。けどその前に止めてくださいバルクホルンさん!!」

天地指令の言葉通り、バルクホルンは剣二にパワーブリッジをかけていたのだ。彼らの話のその横では水平の服を着た少女、宮藤が慌てて止めようと頑張り、ほかの全員が「やれやれ」と頭を抱えていた。

それを遠くで見ていた坂本と彼女と同じ服の竹井が何やら話をしていた。

「はっはっは。相変わらず寝ていて、それをバルクホルンに叱られているな剣二は」

「あれで死なないのは凄いと思うけど…。それよりも…」

「ああ、お前たちの詳細な報告は後で見るが、新たな問題が起きるかもな。“動物などの変死体にマイナスエネルギー反応が観測された”か…」

戦力が整いつつある魔弾戦士であつたが…、何やら黒い影がちらつ

いていたのだった。そして…

「これでいいのか？」

「いいんじゃない、いいんじゃない。実験は成功したし、奴らには我々の企みは感じてていなしじゃろうて。それに失敗してもそれはそれじゃ」

「フン、確かに。成功してもそれはそれ、もし失敗したらあの男を切り捨て例のあれを実行するのもまた一興、結果どちらに転んでも渋谷が“崩壊”するがな…。さて、どう止める？。魔弾戦士よ」  
「すべては“大魔王様復活”のために！！」

闇に潜む陰謀が刻々と動き出す…

次回に続く…

第16話 一雷へいかずちの鳥 雷鳥！サンダーイーグル！！（後書き）

いかがでしょうか？

彼女たちが装備したのはインフィニット・ストラトスのようでしたが、あれは全くの別物です。その詳細はのちに書こうと思います。

さて次回はこの話の謎の1つを解明しようと思います。

もうすぐアクセス数2万突破します。皆さんこれからもよろしくお願ひします！！

それではまた…

## 第17話 過去の記録と急転（前書き）

どうもセイワです。

今回の話は予告通りに行こうと思います。

それでは始めます…

## 第17話 過去の記録と急転

前の戦いから数日後…

4月25日 剣二の家

「で、今日も休学か…」

渋谷で合成魔物と戦いから数日後、街の被害は最小限に抑えたもののニュージエネの怪奇の事もあり学園から全校生徒に数日間はお休みするように言われて今現在家にいる剣二（勿論服装は剣道着）。また基地の方でもストライカーズの荷物を運んでいるため手伝いに行きたいが、自分自身、数日前の戦いの疲労とゲルトルトのパワーブリッジによるお仕置きで休むように言われている（もつともそれらはもう回復しているのだが…）。更に「軽めの荷物があるだけで、手伝いは入らない」とミーナに言われていて、その事もあり他の皆も自主的に家にいるため人それぞれの休日を楽しんでいる。（まあ何名かは仕事の真つ最中だが…）

「光は光で寝ているし、さてどうするか…、宮藤から「しばらく安静にしてください」って言われているが、もう体の調子もいいし…ん？、誰か来たのか？」

昨日の件で今日一日安静と言われた光は寝ていて自身も安静にする（もう完治しているが…、本当に人間なのか？）様に言われてどうするかと悩んでいたら、玄関のチャイムが鳴り誰かが来たと玄関に向かったのだ。

「ハイハイどなたで…、何でここに来ているんだ？」

玄関の扉を開けるとそこにいた人物に啞然とした。その人物は…

「咲畑」

そこにいたのはなぜか制服を着ている梨深が立っていたのだ。

「まあこれしかないが…」

案内された所で剣二が茶を入れて梨深の所に茶を置いた。

「あ、ありがとう…」

「その前に質問だ。何で俺の家が分かったんだ？」

茶を飲もうとした梨深を制して何故自分の家が分かったのか質問したのだ。

「ええつと、前に不動先生から聞いてみたんだ。それで…」

「おっさんからか…。ならいいんだが…」

その答えに若干の疑問を浮かべたが、何か用があつてきた客人に対して失礼だと思いそれについては後で調べる事にした。

「…あの、ちょっと聞いてもいいかな？」

「何だ？」

茶を飲んだ梨深は剣二に対して質問をしたのだ。それは、

「うん、何で、剣二君はタツクンと仲がいいのかなって…」

そう、何故剣二と巧巳が仲がいいのかということだ。その事を疑問に思った梨深は思いつき剣二に話しかけたのだ。

「あいつと？」

「うん、何か不思議な感じがして…」

「それだったら直接本人に聞けばいいじゃないか？」

「えっ！？」

だが、それだったら本人に聞けばいいと返されたのでそれに困ったのだ。その理由はいろいろあるだろうが…

「じ、実はタツクンの住所が分からなくて…」

「それはおかしいな。おっさんから俺の家のことを知ったくせに何で巧<sup>アイツ</sup>巳の家のことを知っていないんだ？。俺の家を知る前に巧巳の家のことを知っておくべきだったな」

だがその答えも剣二には嘘だと見破られてしまい黙ってしまう梨深。

（さて、どうする？）

剣二は前に巧巳に事件を巻き込むなと言われてから梨深が事件に対して何か知っているのかと考えた。もし関係があるのなら梨深が何故巧巳にあんなに庇い立てをする理由が巧巳に関係が有るという仮定が証明されるのだ。また剣二は咲畑の細かいプロフィールを調べようとする人物に梨深の調査を依頼したのだ。その答えは今日の午後に連絡が行く予定であるが本人の口から話そうと考えたのだ。

「…、やっぱり疑っているの？」  
「当然だ」

梨深の問いに即答する剣二。勿論思考盗聴されないように力を使っている。巧巳から思考盗聴される危険性から学校にいる時も力を使っ  
て妨害している。

「うん、その反応は正しいよ。…けど何でタツクンは何であんな  
まっすぐな目”をしているのかな…？」  
「何？」

疑いを持っている事に自覚しているが後半の所は小声になってどこ  
か哀しそうな顔をしている梨深の言葉を聞いた剣二に、

「な、なんでもないよ。けど、タツクンと剣二君は何で中が凄くい  
いのかって気になったのは本当だよ？」

「…なるほどな、なら巧巳に直接聞けばいい。今からあいつの住ん  
でいる所に行くからな」

「え？、いいの？」

それを誤魔化した梨深は剣二と巧巳の中がいい理由を知りたいのは  
本当だといったら今から巧巳のところに行くと剣二がいいその同行  
を誘われたが…

数分後…  
巧巳の基地<sup>ベース</sup>

「ねえ、何で咲畑さん。何で死にかけているの？」

巧巳が言つとおり、梨深は地面に手をつき肩で息をしているのだ。

「も、もう二度と剣二の運転するバイクに乗らない…」  
「…」

梨深が言つた言葉に納得した巧巳であつた。つまり“剣二の居眠り運転”の被害にあつたのだ。

「じゃあ、俺は買出しに行ってくる。まあお茶ぐらいあればいいだろう…」

そう言い、剣二は基地を出て行つた。

「で、何について話があるの？」

「あ、そうだった。ここに着たのは何でタツクンは剣二君と仲がいいのかって思つて…、最初剣二君に話を聞こうとしたけど、それだったらタツクンに聞いたほうがいいって言われたの。だめだったかな？」

「え、剣二と？。そうだね…、じゃあ少し思い出を語ろうかな…」

剣二が出て行つたのを確認した巧巳は梨深がきた理由について聞いてみた。梨深は落ち着きを取り戻して基地（こし）にきた理由をいつたのだ。最初、梨深の言葉に驚いた巧巳であつたが、少し考えた後過去を話すことになった。

それはこの物語より1年前…

「ここが、僕の通う翠明学園か…」

そう言いながら巧巳は門をくぐり、クラス分けの紙が張られている所へ行った。

「ええつと、あつたあつた。1 - B…」おお！、おい剣二。俺達も同じクラスだぞー！」「…ん？」

自分の名前を見た巧巳はそのクラスを見たとき、その隣にいた赤い髪が黒の髪の毛にちょんまげをした男に話しかけていた。

「剣二？、ええつと、あつた。…鳴神 剣二か…」

巧巳は何故か気になり、その名前を探した。自分の名前の上に書かれていたその名を口にして…

その頃の僕は、彼のことを気にしていなかった…

「それでは、自己紹介してもらいます。まずは…」

そついいながら1 - Bの担当の先生が出席名簿の名前を読み上げていた。と、

「ええつと、次は、漢封君ね」

（変な苗字だね…）

担当の先生の言葉にそう呟く巧巳、と、

「俺の名前は漢封 炎火。炎火は炎に火だからな」

立ったのは先ほど剣二に声をかけていた青年であった。

（漢封君の父さん、演歌…、好きなのかな？）

しかし巧巳は炎火の名前の事で思っていたのである。と、

「因みに俺は演歌が好きです！！」

本人も演歌好きであった。何人か自己紹介した後、

「次は…、郷君ね」

「あ、はい」

そついいながら立ったのは緑の髪にボサボサヘヤーで小さい眼鏡をしている小柄な青年である。

「僕の名前は郷 風太です。好きな事は…実験です。フフフフフ…」

自己紹介の後、眼鏡を光らせて何やら企んでいる顔をしているため何人かは若干引いていた。巧巳もその1人である。

（マ、マッドサイエンティストだ…）

巧巳はそう思っていたが恐らく引いていた全員も同じ思いだと思う。勿論担当の先生も引いていて、「じゃ、じゃあ次は…」と言い、何人か自己紹介の後、

「次は、水舞君ね」  
「はい」

そう言って立つたのは水色の短髪で眼鏡をかけている青年である。

「水舞 氷牙です。皆さん1年間よろしくお願いします」

そう行っただ後、礼をして座った氷牙。

「え？あ、じゃあ次は…」

しばらくポカンとした担当の先生は慌てて出席名簿に名前の確認をした。で何人が自己紹介した後、

「次は、鳴神君ね。鳴神君？鳴神君？」

そう担当の先生がいったのだが返事がなく、担当の先生が剣二に近づくと…

「ZZZZZZZZZZZZ…」

寝ていた。鼾いびきをかき涎を垂らしながら…。

「え、ええっと…、鳴神君、自己紹介のほうを…」

そう剣二の体を揺らすと、

「んあ？、ふああああああ…。何だあ？」

揺らした事で起きた剣二は頭をかきながら起きた。

「鳴神君、自己紹介のほうを…」

「鳴神 剣二。宜しくな…、ぐう…」

担当の先生の言葉に自己紹介をした剣二は立つたまま寝たのだ…

（えええええ…、どれだけ寝れば気が済むんだよ…）

巧巳は何回目となる心に呟いた。

「え、ええっと、次は西条君ね」

担当の先生が剣二の事をほつといてもいいだろうと判断して次に名前を呼ばれたのは巧巳である。

「え、は…はい。ぼ、僕の名前は西条 巧巳です…。よ、よろしく  
お願いします…」

おどおどした感じで自己紹介が終えた巧巳はすぐに座ったのだ。

「じゃあ、次は仁堂君ね、って何処にいるのかしら？」

「先生殿、拙者はここにいますでござる」

担当の先生が言う通り巧巳の後ろの席にはだれも居なかったが、突然の声に驚いた先生は声のした方を見た。そこには天井に張り付いている男子生徒の姿が…

「スマンでござる。拙者、仁堂 雷丸でござる。言っておくでござるが忍者ではないのであしからず」

降りてきて自己紹介しながら口到人差指を当てて言ったのだが、

（絶対忍者だろう…）

と巧巳はつぶやいたのだ。でしばらく他の生徒の自己紹介した後、

「次は…保堂さんね…」

「先生大丈夫ですか？、あ、私、保堂 地可って言います。よろしくお願いします」

ある意味濃すぎる生徒に疲れを感じた担当の先生に地可が心配そうに声をかけながら自己紹介をしたのだった。

（普通のヒトだ…、けど3次元の女はイラネ）

と心の中でつぶやく巧巳だったが、

「剣二！、あんたはいつまで寝ているのよ！！、いい加減起きなさいよ！！。この「年中冬眠男」！！！！」

剣二の方に歩き出した地可は、彼の耳に大声で怒鳴ったのだ。

「まったく。相変わらずだなあ地可。眠いのは癖だっていつも言っているだろうが」

地可の怒鳴り声で起きたのか、剣二は地可に対してそういったのだ。

「だからって自己紹介のときぐらい起きていなさいよ！。これから1年一緒に勉強する仲間でしょうが！！」

「まあ安心しろ、後で氷牙に聞くから」

「後でじゃなくて!!、あ、先生剣二コイツと私のことはおいといて次に言ってください」

地可はそう言つて剣二に説教していたが剣二はのらりくらりと聞いているためその効果がない。地可は先生に自己紹介の続きをしてくれと言ひ、また剣二に説教をしたのだった。

「ええつと、次は…」

担当の先生も地可の言つた事に賛成して他の生徒に自己紹介を数人した。

「次は…、三住君ね」

「はい、俺の名は三住 大輔、よろしくな!」

そう言つて自己紹介をする三住。その後も自己紹介をしていたが…

「あんたはいつもいつも寝てばかりじゃないの!、少しは起きる気にもなりなさいよ!!、…って立ったまま寝ているんじゃない!!」

…地可の剣二に対する説教は自己紹介が終わる頃まで続いた。余談だが、この事が地可に学級委員に押し上げた事になったのは言つまでもない…

で数日の昼休み…

「うわああ凄いなあ、剣二君の弁当…」

近くに通りがかった女子が剣二の弁当を見てそう感想を言った。まさに宝石箱のようにいどろられたその弁当は見るものを魅了するほどの美しさである。

「ああ、俺の家は祖父ちゃんと2人暮らしだからな。祖父ちゃんは仕事で出かけている事が多かったから家事は全部俺が担当したんだ」「へえそうなんだ、じゃあ炎火君や地可さん達と仲が良いのは何で？」

「あいつらは小学生からの腐れ縁だ。まあ地可は俺たちを止めるストッパー役だな」

女子達の質問に答えながら食べる剣二の姿を見ていた巧巳に、

「気になるでござるか？。西条殿？」

「うわわわ！？。って仁堂君！？」

突然後ろから声がして、振り向くと誰かがいた為最初驚いたが、よく見ると雷丸だったのだ。

「う、うん。何か鳴神君って不思議な感じがするね…。普段は寝ているのに勉強はできるし、掃除も自分から進んで他の皆を先導してやっているし、それに…」

「？。それに何でござる？」

「…、なんでもない」

巧巳は剣二のことを自分の目で見たことを雷丸に話をしていた事に内心驚いていたのだ。それに気が付いて話を切り上げて昼飯を食べていたが、その疑問を抱えていたのだ。

何で巧巳は剣二僕の事を気になるんだろうか…？

それから数週間のある休みの日

「おらああ！！」

見掛けで不良だと分かる男に殴り飛ばされる巧巳。なぜこんなことになっているかというと、彼はブラチュウ荷の登場人物である星来のフィギュアを買いに行つてその帰り道で不良のグループにぶつかつてしまい、リンチになつていたのである。

「お前のせいで肩が外れたんだよ。慰謝料いしやうりやう払えや…」

そう言いながら巧巳の胸を掴み持ち上げていたがその不良は嘘ついているのだ。

（何で僕はこんな目にあうんだ…？）

そんな事を思いながらも体の痛みでいえない。と、

「おい、コイツ。こんなものを持っているぜ」

「オイオイ、コイツはオタクだな。よしこいつは俺が貰うか」

不良の1人が巧巳の持っていた袋の中身を見つけて星来のフィギュアを見て笑つたのだ。その時、

「おい、何人のクラスメイトにかつあげしているんだ？」

その声と共に1人の不良がぶっ飛ばされた。

「だ、誰だ!？」

「あ、兄貴…、アイツだ…」

巧巳を掴んでいた不良にぶっ飛ばされた不良が指を指した。その先にいたのは…

「な、鳴神君…」

そこにいたのは剣道着を着ている剣二であつた。しかしその目は険しい目をしていたのだ。

「な、鳴神!？。中学の頃にここのらの中学の不良を壊滅に追い込んだって伝説の!？」

「ucciい、だがこっちは多人数だ!! やっちまええええ!!」

不良の1人が剣二のことを言っていたが兄貴の不良は巧巳を離して子分と共に剣二に突っ込んだ。

「手前ら、地獄行きまで突っ走りたいようだな。なら…、付き合つてやるぜ!」

しかし剣二もそう宣言すると大乱闘に発展したのだ。

そして……

「ず、ずい、ま、ぜんでじだ…」

「はいはい、言い訳は署でたっぷり聞いてやる。おいこいつらを連れて行け」

そうたんこぶを数箇所殴られて泣いている不良の兄貴以下そのグループは警察に御用となった。

「まったく、わし宛に電話があると思ったらお前が絡んでいたとはな」

「悪いな祖父ちゃん、クラスメイトをしめているやつらをぶっ飛ばした後、警察に電話してじいちゃんの名前を出さないといけなかったんだ。いくらあいつらが悪いとは言え俺も事件に加担しているからな、事情聴取で時間を喰らうわけにはいけなかったんだ。本当にごめん」

「まあ、お前のその性格は言うまでもないが気をつけるんだぞ」

その横で剣二は祖父である総一郎からあらかたの事情を聴き終えた後、治療を終えた巧巳の方へ歩いて寄った。

「何で、あそこにいたの？」

「買い物をした帰りだ。まさかお前に合うとは思わなかったけどな」

巧巳の問いに剣二は手に買い物袋を巧巳に見せたのだ。

「何で助けたの？」

「んな者、弱い者いじめをしている奴らを許せなかったのも1つ、もう1つは…」

「もう…1つは…？」

「クラスの仲間を救うためだ」

「え？」

最初鳴神君の言った言葉が分からなかった。けど、

「これから一緒に高校生活を送る仲間の危機に、放って置いたら男が廃るからな」

「け、けど…、何で僕なんかを…。僕はオタクだし…」

「お前がオタクだろうが宇宙人だろうが関係ない。俺は唯、困っているやつらを放って置けないだけだ」

「け、けど…」

僕の言い訳を鳴神君が真正面から受け止め、返して来る。それが当たり前のように…、そして…

「お前、自分がこのままでいいと思っているのか？」

「え？」

「このままでいいかって聞いているんだ」

「そ、それってどういう意味…？」

と言おうとした時、鳴神君の片方の手には星来オリヴィルのフィギュアの入った袋を持っていた事に気が付いたのだ。

「俺がフィギュア<sup>これ</sup>の価値は分らない。だが、お前にとっては大切な物だろ？。それを守るほど強くなれ」

「強く…？」

「力もだが、心もだ。あの不良に言い返すほどの力を身につけろよ。じゃあ、俺は帰るから、これはここにおいて置く」

そう言つて鳴神君は星来オリヴィルのフィギュアの入った袋を地面においてこの場を去った。そして僕はその袋の所に歩いて行つてそれを抱いた。ふと鳴神君の後姿を見ていると歩いていた足が止まっている事に気が付いた。

今思えば鳴神君のこの言葉に僕のこれからの行動が決まったかもしれない…

「最後に一言だけ言っておく。“今のお前のままでいいのか？、勇気を出せ、一歩先に踏み出せ、その一歩が新しいお前を創る”」

その言葉を言つた後、鳴神君は歩いて去つて行つた。最後に鳴神君が言つた意味を考えた僕は、ふと思ひ当たつた。

（そうだ…、僕は自分の可能性を殺していたかもしれない。もし、<sup>彼</sup>もしも鳴神君みたいに強くなつたら真正正銘の疾風迅雷のナイトハルトになるのかもしれない）

そう思うと僕は立ち上がって、

（明日、休む日だけど学校…、行ってみようかな…？）

そう決意して僕は新しい自分に向かっての一步を踏み出したのだ…

そして現在…

巧巳の基地

「ってことがあって、あの後剣二に頼んで剣道部に入部したんだ。三住君も同じ経緯の時に会って意気投合したっけ」

そう思い出しながら笑っている巧巳。それを複雑な顔をして聞いている梨深。その表情はどこか哀しそうな顔をしていた。その話が本当だとしても、何故そんな“顔”をしていえるのか？

「三住君もブラチューのファンだからその話で盛り上がってねえ。その後剣二の特訓で死に掛けたり…、学園祭で店を出してそれが大反響を生んだり…、炎火たちの補修を手伝ったり…、色々あったんだ」

そう、どんな苦しい事があっても巧巳のその顔はそれ自体が“生きているって素晴らしい”という顔に満ち溢れていたのだ。

「だからなのかな…、剣二は僕にとって目標であり、先生でもあり、

ライバルであって、友達なんだ」

その言葉に梨深は驚いていたのだ。そう、彼らの間には太くて長く、そして千切れないほどの強さを持つ絆であることをここで知つたのだ。

「これで僕の話は終わり。どうだったのかな？、僕の過去の話を知って？」

その言葉に驚いた梨深であったが、慌てていて。

「う、うん。凄い1年だっ  
て思っちゃった」

「そう、それよりも僕が過去の話を話したし、咲畑さんの過去の話を聞きたいんだけど？」

しかし巧巳が言った言葉に梨深がその体を停止したのだ。

「え……？、な、何で私の過去の話を……？」

そう言いながらも震えだした体。小刻みにだがどんどんと大きくなってくる。

「いや、深い意味じゃなくて…、どうしたの咲畑さん？」

「い、いや…、いや、イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ  
イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤアアア  
アアアアアアアア！！！」

巧巳は誤解を招きそうな言い方をしたのだからそれは別だと話をしようとしたらも梨深の異変に気が付いて声をかけようとした時、顔に手について絶叫したのだ。その目は虚ろになつて目は定めてい

いが何かに怯えていたのだ。

「ど、どうしたの！？咲畑さん！？」

「いやぁ！、私を見ないで！！、 “そんな目で見ないで” ！！、もういや！！、行きたくない！！、あそこには行きたくない！！」

巧巳は梨深に声をかけるが完全にパニック状態に陥った彼女には止められなかった…

「ただいま…、って巧巳どうしたんだ！？、咲畑に何があったんだ！？」

そのタイミングで帰ってきた剣二は梨深の状態が異常だと察知して巧巳に話を聞いたのだ。

「僕だつて分からないよ！？。咲畑さんの過去の話を知ったからこの状態になったんだ！」

「くそつ。しょうがない、俺は救急車を手配するから、お前は咲畑を落ち着かせるんだ！！」

そう言つて剣二は携帯で119番通報をして、巧巳は梨深を落ち着かせるために奮闘したのだ。

救急車が到達したのはそれから5分後の事であつた……………

次回に続く…

## 第17話 過去の記録と急転（後書き）

いかがでしょうか？

今回の話で巧巳と剣二の2人がどうやって出会いそして変わっていったかが分かったと思います。しかしその後起きた梨深の異変は一体？

アクセス数2万1千突破！、ありがとうございます。

それではまた…、この後はキャラ設定です。

## キャラ設定 主役編（前書き）

どうもセイワです。これは私の小説で登場したキャラを紹介する所です。今回は主役の2人を紹介します。

## キャラ設定 主役編

鳴神 剣二 16歳 誕生日 1月10日 O型

本作の主人公。翠明学園に通う学生だが、とある理由から魔弾剣士リュウケンドーとして魔物を戦う戦士でもある。

髪型はテイルズオブヴェスピアのレイブンの髪形である。

性格は人をからかうが時折クールなイメージがあるがそれは彼が見せる1面で心では熱く燃え上がる正義感が強く義理仁上ある漢である。幼いころから祖父の稽古（本人曰くあれは一步間違えれば死ぬ。そのため顔の傷はその時の名残）で剣道の腕前は高校1年で優勝するほどの腕で彼自身鳴神龍神流（魔を倒す剣術）の剣士でもある。

また祖父と2人暮らしのため家事全般が得意、どこまで完璧であるが、彼には致命的な弱点がある。それはどこでも寝る癖である。いつ何時どこでも寝る男で一部の彼の知人から「年中冬眠男」と呼ばれている。また家にいる時には剣道着を着ている癖もある。後何故かシロンの言葉も分かるという特技もあり、たまに鹿児島弁で話す事もある。バイクを通学に使うが彼以外が乗せない、と言うよりもすぐ寝る癖が出てしまい誰もそれに乗せないが…

決め台詞は「闇に抱かれて、眠れ…」で熱くなると「突っ走ってやる!」と叫ぶ。

西条 巧巳 詳細は原作と同じ

剣二と同じく本作の主人公。彼の性格は常識人になっているが、これは高校1年の時に剣二に出会ったことに始まる。その頃の彼は原作と同じく重度の妄想癖持ちの引きこもりのいわゆるダメ人間であった。しかしある日不良に絡まれた時に剣二に助けられて、その後三住や剣二の友人との出会いで自身が変わると決意。剣二のしごき

に堪えて2年生では剣二に背中を預けるほどに急成長を遂げた。がふとしたはずみで前の性格に戻るのはちょっとした欠点でもある。彼も魔弾戦士リュウレンドーとして魔物と戦う戦士でもある（最初は魔弾龍なしで戦っていて魔物を倒すほどの力はなかった）。前に書いた通り常識人になっているのは一癖も二癖もある剣二達を抑える為に彼らのストッパーとして働いているが、それに巻き込まれる苦労人でもある。

今回の事件では彼の隠された秘密が明らかになる…？

## キャラ設定 主役編（後書き）

いかかだったでしょうか？

今回はこの2人の設定を載せました。では他に質問したい人は感想に載せてください。

それでは今度こそまた会いましょう…

## 第18話 襲撃と判明と別れ（前書き）

どうも、この小説が終わっていないのにもかかわらず別の小説を書いているセイワです。

今回の話はある意味急展開を見せます。それではどうぞ…

## 第18話 襲撃と判明と別れ

それから数時間後…

AH東京総合病院

「どうやら精神的なトラウマによるものです。今は睡眠薬で眠らせていますが、明日になれば目が覚めるでしょう。そのときに検査をして異常がなければ退院となります」

あの後、救急車が来て病院に搬送した梨深であつたが、病院こほに来るまで乗せた救急車の中に乗せようとしたが暴れていたため乗せられなかった。そのため剣二が首元を手刀での一撃を与えて気絶をし救急車に乗せて病院まで到着した。また病院に付いた時、気が付いてまた暴れていたが巧巳と剣二に抑えられて、その上に睡眠薬を投与されて今に至る。その後で今は担当の先生に梨深の状態を剣二が聞いていたのだ。

「そうですね…、それと巧…、西条君のほうは？」

「ああ、彼については大丈夫です。いたって正常な範囲でしたし」

その上で巧巳の状態も診査して異常がないことも確認したのであった。

「分かりました。色々ありがとうございました」

そう礼をして、部屋から出た剣二にそこで待っていた巧巳と合流した。そして話をしながら歩いていった。

「巧巳、俺が出て行った後一体何があったんだ？」

「僕にも分からない。けど、僕の過去を話した後咲畑さんの過去を聞こうとしたらあんな状態になったんだ」

「……一体アイツの過去に何があったんだ？。あんなに取り乱すほどの凄まじい過去があったのか？」

『…そうだろうな…』

「ん？、どういう意味なんだ激龍剣」

『巧巳達に今まで話をしていなかったが、アレはギガノマニアックス特有の“代償”だ』

「代償って…、それってどういう…」

『それは後にしろ。ここで話をしたら怪しまれるぞ』

「「あっ」」

その内容は梨深の状態の事であり、その話に激龍剣と蓮龍拳が話に参加してその真相を聞き出そうとしたが、人目がつく病院（じく）にいては怪しまれる可能性が出てきたためその話は病院を出てからにしたのだ。

その2人の後を尾行している車がある事を…

それから数分後…  
とある喫茶店

「ところで剣二、何で僕達はここにいるの？」

「ああ、ここに待ち合わせをしている人がいるからな…。っと、どうやら先にいるみたいだね」

そう会話をしながら喫茶店の戸を開けた剣二と巧巳。そこにいたのは…

「よう、遅かったな」

「朔哉さん！？」

テーブルの上にコップの中の水を飲んでいる朔哉であった。

「どうして朔哉さんがいるの？」

「俺が依頼して咲畑を調べていたんだ。彼女は何か知っている。その可能性が出てきたから調べるようにいったんだ」

そう言っつてコップに入っている水を飲んだ剣二。その横で納得して頷いた巧巳である。

「で、どうだったんですか？」

「ああ、調べていて分かったんだが…。お前ら驚くなよ」

巧巳の問いに朔哉は決意して言った。

「咲畑 梨深は…、“この世にはいない、彼女が5歳の時に死んでいる事”が分かったんだ」

「「はあ？」」

朔哉の言った言葉に訳が分からずにそんな声を上げる巧巳と剣二。

「俺はまず彼女の名前を調べた。そしたら彼女はある事故で死んだ事になっていたんだ。この新聞はその当時の事故詳細だ。その事件は彼女の家族が車で旅行していた時に起こった。当時、辺りに霧が出て視界が悪くなっている時に誤ってがけから転落。ガソリンに火が付いたのだろうか爆発を熾おこしたんだ。その爆発音を聞きつけた地元に住人が警察と消防、そして救急車を手配した。が、それらが到着した頃には運転席と助手席には焼死体が発見された。勿論身元は燃え尽きていない運転免許で判明した。で当時5歳だった咲畑 梨深の死体が見つけれなかったため生きているかもしれないと捜索を行なったが、その直後に土砂崩れが発生して遺体ごと埋まってしまったんだ。その後調査を行なったが血が付着して所々に焼けていた服が発見。それを調べるとそれを着ていたのは咲畑 梨深本人だと判明、その付着していた血の量から死亡が確認してこの事件は幕を閉じた……」

朔哉は当時の新聞を広げて巧巳と剣二に説明した。

「だけど、彼女は存在している……、その理由は」

『ああ、彼女は死んだ事にして、何者かに“拉致”されたか。なら、あの錯乱には納得するな』

「ん？、どういうことだ？。激龍剣？」

しかし彼女が存在しているのなら答えは1つ。生きてどこかに拉致されたのだ。巧巳の言葉に続いて言い、その事に納得した激龍剣に剣二はそれに言ったのだ。

『ああ、ギガノマニックスは何も生まれ持った能力でも、後から努力して身に付けた能力でもない。 “人が最も使つてはいけけない禁断の力” なのだからな』

「人が、最も使つてはいけけない禁断の力……？」

激龍剣の言った事にオウム返しに言う朔哉。その手には手帳にシャープペンを書いていた。

『ああ、覚醒する条件は……』

「……それから先のことは後にしろ激龍剣。どうやら俺達尾行されていたみたいだ。しかも……やつらは殺<sup>や</sup>る気だ」

それを言った後に剣二と巧巳、それに朔哉（資料を勿論回収済み）はテーブルの下に潜った。その刹那、彼らのいたテーブルに銃弾の嵐が降って来たのだ。恐らくマシンガンを使用しているがそんな事は関係ない。その音がやむとそこ喫茶店にいた人は皆……体中に穴を開けられて逝っていたのだ。

そこに黒ずくめに、顔はガスマスクに体は防弾チョッキを着た数人が入っていき、剣二達のいたテーブルに近づいた。そしてその1人がテーブルの近くに近づいた時！

「はあ！！」

そうテーブルが飛びその1人に当たるが、その1人は対してダメージを与えなかったがその顔には驚愕の顔が映った。そう、そこにいたのは龍の装飾を施された戦士2人と犀の姿をした戦士であった。

「……………てめえら…、一体何者だ？」

その白き龍の戦士…リュウケンドーは激龍剣を持っていなかったがその声からある感情が支配していた。

「ここにいた人たちを巻き込んで僕たちを殺しに来たって事は……………、事件の首謀者が僕達を狙ってきた……………」

同じく赤き龍の戦士…リュウレンドーもその声から同じ感情を爆発寸前まで高ぶっていた。

「そつだろつが、それは後にしろ。今俺達にできることは1つだ」

犀の戦士……ノヴァライノスが拳を握り構えながら2人と同じ感情を  
今にも爆発しそうに言った。

彼らから出てくる氣に一步も動けない襲撃者達。彼らは油断なく銃  
を構えているがその構えている銃が小刻みに震えている事に気が付  
いたのだろうか？、もし気が付いたなら彼らはこれから起こる事を  
察知したのかもしれない。だが、彼らは絶対<sup>襲撃者</sup>に彼らにやつてはいけ  
ない事をしてしまった。そう彼ら、“表と裏の境界線で戦う戦士”  
達を……

「「「こいつらを、ぶっ倒す……！」」」

怒らせてしまったのだから……

それから数時間後……

「で、こいつらを半殺しの目に遭わせてたって事だな？」

そうため息を漏らした坂本の後ろには、襲撃者の1人の後ろに手錠をかけているが、その顔は虚ろで何かをブツブツ言っているのだ。しかもほぼ全ての襲撃者全員が同じ状態に陥っていた。あの後襲撃者をボコボコにした剣二達は基地に連絡し、特殊チームを派遣、ここの閉鎖を求めたのだ。剣二と巧巳は襲撃者の車を調べに行っている（勿論変身したまま）。

「ああ、こいつらは俺達を含めてここにいた全員を殺す気で来たらしい。まあ後でこいつらを調べればいいけど…」

朔哉はそついいながらも何か気がかりになりそうな事に気が付いたのだろう。それを聞こうとした坂本の耳に、

「が、があああああ！?!?!?!」

襲撃者の悲鳴が聞こえたのだ。慌てて坂本が後ろを振り向くがそれと同時に体が倒れ、慌てて駆け寄ろうとしたが…、

「くそつ、…死んでいる…」

既に絶命していた。更には、突然爆発音が聞こえて慌ててその方向に行ってみると…

「すまない、どうやら俺達に殺しを頼んだ奴等は襲撃者が成功しようが失敗しようがお構いなく車に爆弾を積んでいやがった…」

そこには炎上していた襲撃者の車に、少しこげていたリュウケンドーとリュウレンドーの姿がいたのだ。

???

(ここからは会話だけです)

「…失敗しましたね」

「ああ。…だが、口封じは完璧だ。襲撃者には予めある薬品を齒に仕込ませて、ある時間にその薬品の入った容器が自動に開ける様に設定しましたし、車の方には爆弾を仕込ませたからな」

「しかしながら私の方の“使徒”が減ったのは痛いですがね…」

「まあ、彼らには別の意味で幸せになったと思いますけどね」

「しかし……、襲撃をした彼らはある組織の人間ですが……、私の権限でもそこまでは調べられなかった」

「しかし、その組織にあの男がいたとは…。驚きましたね」

「ああ、あの“装置”を完成させるためにはあのデータが必要になる。だが、まずは彼なしのデータを取るためにあの騒ぎを起こしたのだから…」

「しかし、あの男もそれを感じて我々を嗅ぎ回っているのだろう」

「どちらにしても、あの男を捕らえるチャンスはまだありますからね」

「そう、“西条 巧巳”の脳内波のデータが揃えばアレは完成する」

（会話終了）

場所を剣二達に戻る…

「襲撃者達の自殺に使用されていた薬品ですが…、症状から判断して青酸カリだとは判明しました」

「だけどよ宮藤。俺達が見た感じ襲撃者<sup>そいつら</sup>は薬を飲む素振りが見せなかったぞ？」

「加門さん達が気付かないのも理由があります。その人たちを調べ

たら親知らず歯に薬の入ったと思われる小さい機械が発見しました。それを調べるとどうやらある時間になるとその機械から青酸カリを噴出して口全体に青酸カリを充満させて死に追いあつたと思います」

朔哉の質問に答えと説明している宮藤。あの後襲撃者は謎の自殺を遂げたためその遺体を基地に運んでその解剖を宮藤に頼んだのだ。その結果を先ほどの説明である。

「用が終わつたら切り捨てる…。こりゃあ一連の事件の犯人のやり口だな」

「D M A鑑定をしないと身元が判りませんが、もし判つたら連絡します」

そう考え込む朔哉に宮藤は身元を調べるために調べる事になったのだ。

「そっといえば剣二さんと巧巳さんは？」

「あいつらは別の用で出て行ったぞ」

そして宮藤は今いない2人の行方を朔哉に聞いたらもう行ったのを知ったのだ。

「まったくあの2人は…、それはそうだが爆発に使用した爆薬はどうだ？」

宮藤の隣で聞いていた坂本はため息をつきながら爆弾には何が使われていたかを聞いてきたのだが、

「……、それは私の管轄外で分かりませんよ、坂本さん……」

「お、すまんすまん」

そんな会話をしていたのであった。

で、その剣二達は…

「やつ等…、本気で襲<sup>マシ</sup>い掛かってきやがって…。しかも関係ないやつまで巻き込みやがって…」

「け、剣二落ち着いて…」

その2人は別の喫茶店で遅い昼食を食べていたが、剣二は殺気漲らせながら食べていたのだ。それを巧巳は抑えながら自分の頼んだものを食べていた。因みに2人が頼んでいるのは何故か蕎麦<sup>そば</sup>であるが…

「俺は落ち着いている。だが…、“やつらをこのまま放って置いていいのか”って思っているんだ」

「それを俗に「怒っている」「んじゃないの?」

本人は落ち着いているって言うているが周りから見れば怒っている風に見えるのだ。

「まったく手がかりが無いって言うのも…」

「…いや、手がかりはあるよ」

「本当か!？」

敵の正体が知らない以上、闇雲に動いても埒が明かない。だから剣二は苛立っていたが、巧巳が何かを思い出したように言ったのを聞いて巧巳に顔を近づけたのだ。

「ち、近いって…。さっきの襲撃者達、「その目、だれの目?」ってブツブツ言っていたのを聞いたんだ」

「何?、確か…、前にお前が接触した謎の宗教がそれを言っていたって話を聞いたが、もしかするとそいつらかもな」

巧巳は顔が近いから離れてくれといい、剣二は身を乗り出した体を元に戻して巧巳の話を聞いたのだ。それによると襲撃者を撃退している時、小声で「その目、だれの目？」といっているのを聞こえたのだ。また、拘束している間もそれを繰り返しているのを確認できる。

「その可能性は高いよ。…ああ、そういえば蒼井さんはそれを知っていたよ」

「ああ、あの3年の…」

また巧巳はセナがそれに知っている事を伝えたと、剣二は考え込み…

「よし、朔哉に頼んで蒼井の事を調べるように頼んでみるか」

「まあ、ほどほどにね……」

そう言いながらも食事を再開した2人であった。

その数分後…

「で、探すって言われても…」

その後、蒼井を探したらいいだろうと剣二は提案をするとすぐに行動を起こしたが…、

「全然見つからないな…」

ここ、渋谷駅で探しても見つからなかったのだ。

「しょうがない、ここは奥の手パート1だ」

「奥の手？」

「ああ、あいつの穿いていた青の…」

剣二の作戦を聞いていた巧巳の目に…

「って、あれ蒼井さんじゃないの!？」

「何?、確かにな…。パート1を中止。パート2に移行だ」

「パート1って何!？」

「よし、激龍剣。ちよつと脳波を遮断する力を解除してくれ」

『何する気だ？。まあお前の事だ…、何か企んでいるかは後で聞  
くが…』

街中を歩いていてセナの姿を確認したのだ。それを剣二も確認し、  
今話をしていた作戦を中止、新たな作戦の発動を開始したのだ。そ  
れを巧巳は突っ込んだ後、剣二は何かを企んでいる顔になり激龍剣  
に力を解除を頼んだ。激龍剣もそれを聞いてそれを解除すると…。  
セナの顔が真っ赤になって何かを探す素振りをしたのだ。

「い、一体何を頭に思い浮かんだの？」

『さあ？』

巧巳と蓮龍拳はそんなやり取りをしていると、

「なああああああああああああああああああああああああ  
ううううううううううううううううううううううううううう  
ああああみいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！」

そんな声がして、その迫力ある声に驚いた巧巳は声のした方向を見  
るとセナはものすごい形相で剣二達のほうに突進してきた。その手  
にはデイスードが握られていてその顔と姿はまさに夜叉そのもので  
ある…

『おい剣二！、お前どんな事を頭の中で考えていたんだ！？』

「何。『蒼井のパンツは青だ』って思ったんだ」

「それは誰だつて怒るよ！！」

「死ねやああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

激龍剣と巧巳の突込みに対してそうサラリと言った剣二の目の前に振り下ろそうとしたディソードがあつたのだが…

「怒りに身を任せて剣を振るう…。そんな単調な攻撃はかわすに限る」

すでに避難していた巧巳に対して数歩左に移動する剣二。彼が立っていた場所にはディソードが空を斬つたのだ。

「なあ！？」

「そしてその力を利用して投げる。少しは頭を冷やしたらどうだ？」

驚いているセナに対して剣二はディソードを持った手を掴み、突進に取る加速をそのまま利用して見事な一本背負いを決めたのだ。

「怒らせた剣二もそうだけど、それを容易く捌けるのも凄いいよね……」

その衝撃でセナは目を回して気絶したのに対して、その光景を目にした巧巳もそんな感想を漏らしたのだ。

それから数分後…

近くの公園…

「う、ううううん…」

「あ、気が付いた？」

そう声をかけたのは巧巳であり、セナはベンチの上で寝かせられ、いつの間にか額に乗せていたタオルを取って起きたのだ。

「お前…、どうして…。ってそれよりもお前！。どうして鳴神が知っている！？。パンツのことは秘密にするって言わなかったのか！？」

「まあ、そうだったけど…。メールしたからねえ、剣二に」

セナはどうしてここに巧巳がいるのかが分からなかったが、先ほどのやり取りを思い出して巧巳に詰め寄り、それを答えた巧巳。どうやらあの時出したメールが剣二の所に届いたらしいのだ。

「で、お前に聞きたいことがあるんだが…」

「人の弱みに付け込んで脅迫するのはお前のやり方なのか？。だったらそれはノーだ。私はそれに屈し…、お前たちまさか…」

剣二はその隣のベンチに座っていて聞きたいことがあるから答えてくれといった。だが、それに屈しないというとしたが、自分の体の異変に気が付いたセナは顔を真っ赤にしてしまった。そう、

「それもいいが、大胆だなああ…。なあ巧巳？、これは少しやりすぎなのかもしれないなあ」

「流石に学生でこれを穿いている人はいないよねえ…、というよりこれって勝負パンツ？」

会話をする剣二と巧巳であったが、剣二の手に持っていたのは……  
……、黒のガーターパンツだった。

「vんr・うslつあc yt なyんヴあうえvんt!?!?!?!?!?」

勿論これは巧巳や剣二が穿いていた物ではない。とすると答えは1つ、奇声を上げてスカートをしっかり抑えているセナである。

「安心しろ、お前のあそこは目を瞑っていたから見てないからな。で、これと引き換えに教えてくれないか？」

剣二はパンツを指に引つ掛けて回しながら言ったが、本人はそんな事よりも剣二の印象をこう思ったのだ。

（あ、悪魔だ…、コイツも悪魔だ…）

...

それから数分後:

「で、この前変な宗教がどうのこうの言っていたけど、あれってどういふことなの?」

あの後彼らに屈服させられたセナはパンツを引き換えに自分の知っている事を話す事になったのだ。それで巧巳の質問に対して、

「それよりまず聞きたいんだが、あいつらに関わると…」

「もう関わっている、さっき襲撃されたばかりだからな」

「なあ！？。どういうことだ！？、あいつらが何故お前達を襲うんだ！？」

「落ち着いて。僕たちも解らないけど、蒼井さんが追っている人と僕達が追っている人はもしかしたら同じかもしれないんだ」

だが、何故その事を聞く必要があるのかという疑問にセナが言おうとしたが、剣二の言葉に動揺して更に聞き出そうとした。そんなセナを抑えて巧巳は自分達の仮説をセナに教えたのだ。

「……、すまない。これだけは教える事はできない……。唯、1つだけある事を教える。それで手を打たないか？」

「話によるな」

だが、セナは考えた後答えることはできないと言い、その代わり別の情報を教えると交渉してきた。剣二は話によってはこれでいいと決めたのだ。

「すまない。人間は実は“電気仕掛け”って知っていたか？」

「？、それと話の内容はどう繋がるの？」

「最後まで聞け。人間は体を動かす時に脳から筋肉にかけて電気信号を送っている。それは見えているものも同じで神経パルスを使って見ているものを脳に送っている」

「なるほどな…」

「で、ここから本題だが…。もしも“電気信号をその神経パルスにコンバートする技術があれば五感の全て、更には意識そのものを支配できるようになる”。前に西条が遭遇した物を作り出す事も可能なほどのな」

「それを悪用しているやつがいるって事？」

「そうだ、やつらは…、ギガノマニアックスの能力の1つ、“リアルブート”のリスクもなしに利用できる装置を開発した。そしてこの一連の事件も恐らく…」

「その装置を悪用しているやつらが絡んでいるって事が…。繋がってきたな」

セナの情報はこれまでの事件の犯人の手口を導き出す手がかりとなったのだ。しかし、

「それはそうだけど…、“ギガノマニアックス”って…、何？」

「それに“リアルブート”って何だ？」

そう、先ほどの会話から出てきた謎の単語について聞こうとしたが…。

「それについては答ええないな、それにギガノマニアックスは好きで能力を持っていない…。“人が持つてはいけない力”だからな…」

「…、分かった。それは俺たちで調べる。もし何かあれば俺の携帯に電話をくれ。これが俺の携帯の番号だ」

セナは何か恨めしそうな顔になり、また襲撃前に激龍剣が言った言葉と同じ事を言ったため、剣二はそれについては自分たちで調べる事にし、また剣二はセナに自分の携帯の番号を書いた紙をパンツと共に渡した。

「ああ、ついでに私は駅前にいることが多いからな。何かあればそこで会おう。それともし“エラー”を見つけたら私の方へ連絡してくれ」

「“エラー”？」

「ギガノマニアックスが作り出す妄想だ」

そういいながら女性用のトイレの方へ歩き出すセナ。それを見送って剣二と巧巳は公園を後にした。

それから数分後…

巧巳の基地

「ええっと…、あつたあつた。…どうやら蒼井さんが言った事は本当のようだね」

そう言いながらパソコンの画面を見る巧巳、その後ろにいる剣二もそれを覗き込んだ。

「セナ<sup>アイツ</sup>の言っていた事が乗っているVR技術の特許に…、米政府の「機密と人体研究に対する保護の強化」ア？。明らかに怪しいだろ？」

そこに乗っていた事を言いながら剣二は頭を抱えていた。

「だけど、これで事件はギガノマニアックスが中心になっているっ

て事だけでも進歩があるんじゃないの？」

そついいながらも巧巳はこれまでの事件はギガノマニックスだと確信したのだ。

「しかもそれに俺達が巻き込まれたって言うオマケ付だけだな。……で、そこに隠れていないで出てきたらどうなんだ？」

剣二はまだ頭を抱えていたが、次の言葉には殺気がこもっていて、玄関のところに誰がいることに気が付いたのだ。

「ふふ、流石ね……、龍の騎士さん」

そこにいたのはFFS、いやあやせが制服のまま立っていたのだ。

その近く……

「せ、先輩……、どうやら容疑者はあの中に入っていたみたいす」

「よし、このまま見張るぞ」

そういいながら巧巳の基地を見ている判警部補と諏訪刑事。何故彼らがここに居るのは…

「しかし、歌詞が事件の事に似ていることで尾行ってどういう事すかねえ。まあそこには第三の事件の第一発見者の住んでいる所ですから何かあるっすかねえ？」

「まあ、それは上にしか分からないが…。話が変わるがお前、鳴神警視官とその孫が“なるかみゆうじんりゅう鳴神龍神流”の使い手って知っていたか？」

「なんっすか？、鳴神龍神流って？」

「ああ、示現流じげんの流れを汲む古くから続く剣の流派で、なんでも“魔物”を退治する剣だそうだ」

「はあ？。魔物ってそんな非科学的な…」

「それは馬鹿にしないほうがいいぞ。現に渋谷しゅぶにはそんな未開な生物…魔物が発生しているんじゃないか？。そして謎の戦士たちが現れている。それを疑うなんておかしいと思うがな」

「それって…」

「俺の思いおこしでいいのだがな…」

あやせの尾行と剣二と巧巳の調査であつたのだ。

「なるほどな…、まああの2人に関しては放って置いてもいいか」

あやせがここに来た理由。それは自分が刑事に尾行されていること、それに剣二達にも疑いがかけられている事だった。しかし、剣二はその事は放置する事を決めたのだ。

「いいの？。もしかしたらあの事までばれると思うけど？」

「大丈夫だよ、それについてはこっちでもう手は打ってあるし」

「そう、ならこれ以上言わないわ」

「そういえばお前もディソードを持っているそうだな。これをどうやって手に入れた？」

あやせは何処で知っていたのか剣二と巧巳の裏の顔を知っていたが巧巳はすでに手は打ってあるらしくそれについての追求は後にしたのだ。そして剣二は前に巧巳が目撃した例の剣の事を話をした。

「…、そうね。試練を乗り越えた者が手に入る勇者の剣ってどう？」

一瞬険しい顔になったあやせであったが、手に入った経緯を教える事にした。

「どづいうことだ？」

「そのままの意味よ、後はあなた達の相棒に聞けばいいじゃないの？」

剣二は更に追求したが、あやせは剣二達にそう問いかけたのだ。

「……本当に何者だお前？。激龍剣のことを知っているのなら……」

剣二はあやせにむけて殺気を全開にして激龍剣に手を伸ばし、

「女に手を上げるのは俺の信念に違反するが……、お前は事件の事で何か知っているのなら喋って貰うぞ!!」

激龍剣を元の剣に戻して右から水平に首に振るった！。が、

「くっ……。流石にあなたと戦うのは……、私に分が悪いわね……」

あやせはいつの間にか出現していたディソードを両手に持って激龍

剣の剣を止めたのだ。が所詮男と女。力の差は歴然としていてあやせの顔は剣二の力に苦しそうに耐えていた。

「なあ！？。剣二の剣を止めた！？。っていうかどうやって出したの！？。」

「このデイスードは、超越した場所——同一次元上にあるもう1つの可能性、あるいは“妄想”——に干渉するためのもの、この剣もその領域に存在してるのよ」

「なるほどなあ…、要するにその剣は受信機デイスードの役割を果たしたり耐久性は俺の激龍剣と同じ武器になる。だがな…、使い手の力量は歴然、だな！！！」

巧巳は驚いていたが、あやせは巧巳の疑問に答えながら耐えていてそれを受け止められた剣二のほうは冷静に剣の性質や耐久性は持っている激龍剣と同じだと判断し、あやせの左足に自分の左足を引っ掛けバランスを崩し、持っていた剣に力を入れてあやせを倒した。

「さて…、さっきの質問の続きだ。お前は何故俺たちのことを知っていた？」

そして上向きに倒れているあやせの首元に激龍剣の切っ先を向けて質問をする剣二であった。

「何か…。物音をしましたね先輩…ってどうしたんすか？」

「…諏訪…すぐに尾行を中断。すぐに本部に戻るぞ!!」

「え、ええ!?!、さっき電話した相手はだれだったんですか!?!」

「行方不明になった医者が見つかった!!。今からそこに急行するんだ!!」

「え?、ええええええええええええええ!!?!?!?!?!」

「?、剣二。さっきの声ってもしかして…」

先ほどのやり取りを遠くで聞いていた巧巳であった（内容までは聞いていなかったが）が、その時に剣二の携帯の着信音が鳴ったのだ。

「?、だれだよ。こんな時に…、もしもし？」

『剣二、大変な事が起きた!!』

「祖父ちゃん!?!。どうしたの?、そんなに慌てて？」

剣二が空いた手で携帯を操作して出ると、電話してきた相手は総一

郎だったのだ。しかし、その様子では何やらただ事ではない様子である。

『行方不明になっていた医師が見つかったと報告が入ったそうだ！』

「って高科先生が！？」

その内容には剣二も驚き、それに巧巳も驚いていたのだ。

『そうだ。今現在発見した所へと向かっているが……、すでに手遅れになっているかもしれないな……』

「……、どういうことだ？」

『今までの経緯から見て犯人は前回の事件の関係者を殺している可能性が高い。第4の事件の関係者である高科もその1人だ。もしも、何者かによって利用された場合……』

「……殺されている可能性もあるってことだな……」

しかし総一郎も殺害が起これと断言していて剣二もそれに同意している。  
最悪な事態

『もうすぐ着く。切るぞ』

「ああ…、巧巳。高科先生のことだが…」

剣二は携帯の電話を切ると巧巳に言おうとしたが…、

「分かっているけど…、こんなのおかしいと思わないのかな？」

巧巳の纏っている空気に異常がある事に気が付いて剣二は黙ったままだった。

「それも…、大いなる意思の導きね」

仰向けに倒れているあやせの言葉に巧巳は…、

「くそおおおおおおお！！！！！！」

壁に自分の拳をぶつけながら絶叫したのだった。

遺体となって発見された高科先生が解剖の結果……“脳が無く、更には最低でも1週間は生きていた”という報道が流れたのは……それから数時間後のことだった……

そして…、この事件は後に…第5のニュージエネ、「ノータリン」と呼ばれる事になる…

次回に続く…

## 第18話 襲撃と判明と別れ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

別の作品での投稿は大変だと思いますがこの小説も完結までいけたらいいと思います。

それではまた…、アクセス数2万2千突破しました。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7181j/>

---

CHAOS DRAGON SWORD

2011年11月25日21時01分発行